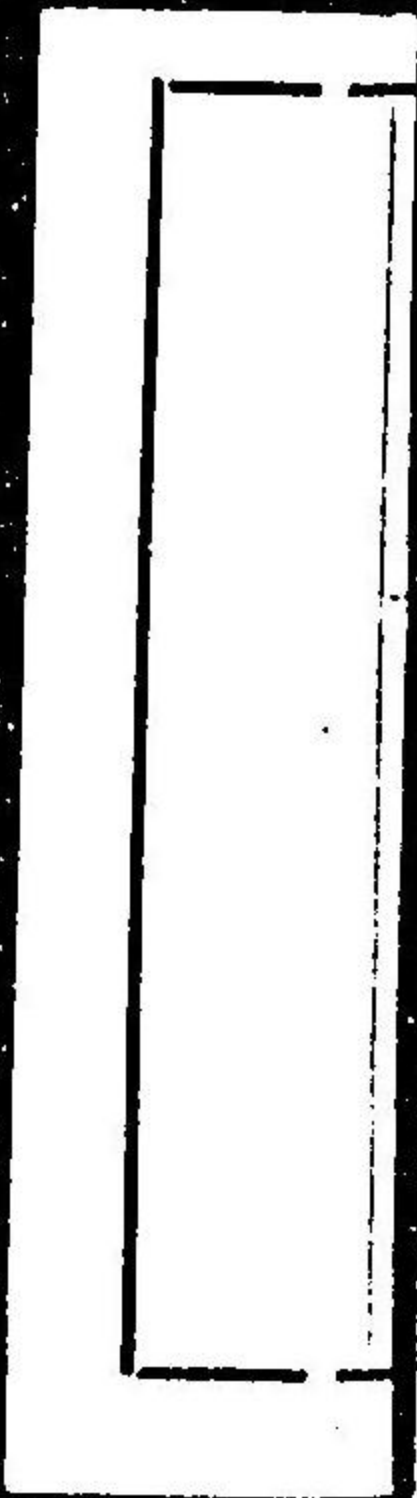


82  
438

基督論集



020590-000-4

82-438

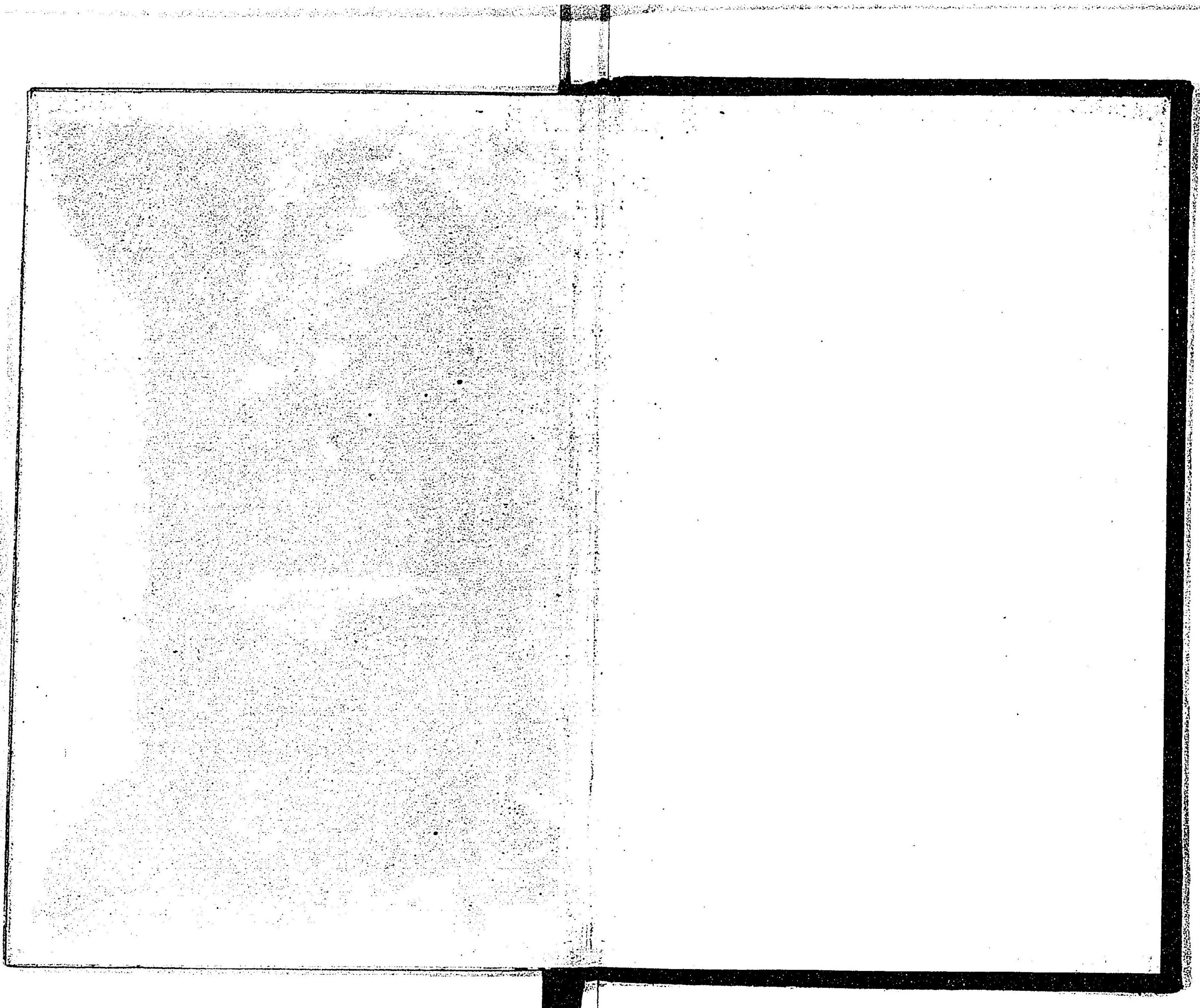
基督論集(海老名氏の基督論及び諸家の批評文)

福永 文之助 / 刊

M35

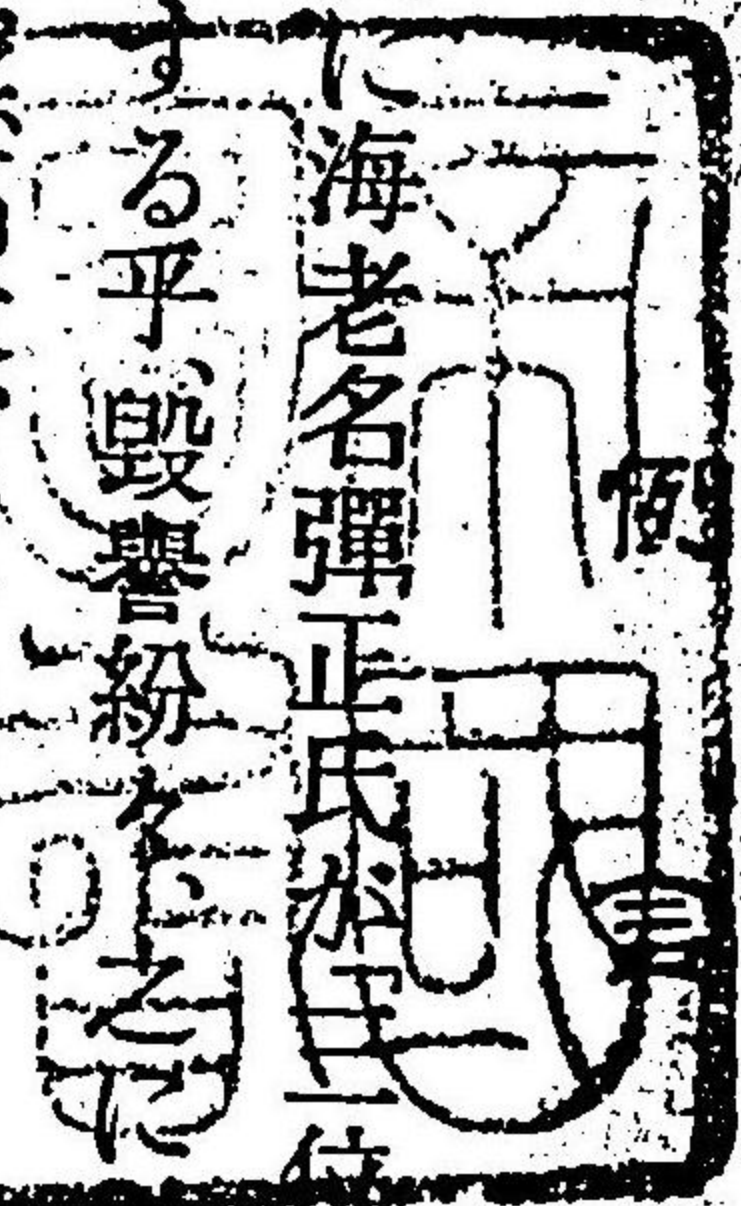
ABI-0405





82-438

其の旨



曩に海老名彈正氏が「位一體の教義と予が宗教的意識」てふ論文を公にする平、毀譽紛々たるに到して精嚴なる批評を加へしもの、小崎、植村、三並、高木、アルフレクトの諸氏にして、其の所論の該博穩健なるに到りては、海老名氏の論文と俱に珍異獲難き者と謂ふ可し。余これを珍として雑誌、新聞紙に散見する毎に、撰び出して綴ぢ合せ置きけるを見つ、同人交々懇懇するに之を一冊子として世に公にせん事を以てせしかば、則ち特に前記諸氏の許諾を得て之を印行するに到りし也。

蓋し本書印行の目的は、之等諸家の論文をして廣く世人に熟讀せしめん事を欲し、且つ此等の論文をして新聞雑誌と俱に散軼せしめん事を恐るるの婆心に過ぎざる也。而して其の剪裁次序の如きは、余専ら其の責に任ぜん。

護教掲載高木氏の「海老名彈正氏の三位一體論」てふ論文は、本書印行の際尙ほ未完なりしが故に、本書の印行を停止すると旬餘、以て其の完結の日を待ちしと雖も、該論文は頗る長篇にして續々掲載せられ、三月下旬に到るも尙ほ其の完結を告げざりしかば、遺憾ながら未完の儘にて本書に輯録しつ。幸に再版の日に際せば、其の殘餘の部分をも増輯し、以て完璧たらしめん事を努む可し。

基督論に關する論戰は、今や漸く半ばにして勇將陣頭に現はれ、雷驚電撃の奮戰勇闘を演ずるの日將に近きにあらんとすれば、夫等の論難辨拆の文章は、異日再版の時を待ちて順次増益し、以て遺憾なからしめん事を期す可し。

明治三十五年三月下旬

編者識

基督論集目次

第一篇 基督論の發端 ..... 一頁

第二篇 現時の基督論 ..... 二五頁

三位一體の教義と予が宗教的意識 ..... 二五頁

海老名彈正氏の告白を紹介す ..... 二五頁

福音新報の紹介文を読む ..... 五九頁

彼我相違の點を明らかにす ..... 六七頁

福音新報社説 ..... 七七頁

基督に關する論争を讀む……………

三 並 良……………八三頁

福音新報記者の基督論……………

三 並 良……………九一頁

海老名彈正氏の三位一體論を讀む……………

小崎 弘道……………九八頁

基督教的意識と神に關する三位一體の教義……………

アルフレクト……………一二三頁

海老名彈正氏の三位一體論……………

高木壬太郎……………一四四頁

### 基督論集目次

## 海老名氏の基督論 及び諸家の批評

### 第一編

### 基督論の發端

我邦刻下の神學界に於ける基督論若くは三位一體説の流行は、明治二十四五年の頃ひに金森通倫氏が自己の信仰意見を發表し、若くは普及福音教派が雑誌「真理」を發刊して、横論縦議、盛に同を援護異を排し以て世人の耳目を聳駭せしめし時にも優れるが如し。而して這般の論戦は如何にして始まりしやと謂ふに、そは曩に福音新報三百廿四號の社説、「福音同盟會と大譽傳道」てふ題下に、其の記者の信仰告白として、「余輩は神、人とありて世に下り、十字架に死して、人の罪を贖ひたるを信ず、余輩の信ずる耶穌基督は、活ける神の獨子にして、人類の祈をうけ禮拜を受くべきものなり」云々の記事ありしかば、豫て同記者とは其の信仰の徑を異にせる海老名彈正氏が、昨年十月發「新人」紙上に於ひて福音新報記者植村正久氏に對し、左の如き公開狀を發せし時に有りと謂ふ可し。

### 福音新報記者に與ふるの書

二

福音新報記者足下、足下の久敷基督教文壇に立ちて優雅なる健筆を振ひ、基督教の幽遠なる眞理を發揮して以て夥多の基督教徒を指導し、基督の福音を普く天下に宣傳せられ候ことの功蹟は今更申すも恐にて候。足下は我黨の先輩にして小生の如きは近頃文壇を辱めたる後進者に過ぎ不申、足下の文筆の如きは之を欽慕しても敢て企て及ぶ所にあらず候得共、今や不肖を顧みる遠なく努力を盡して驥尾に附し、大に基督の福音を宣傳致すべき時節と相成申候に付幸に御鞭撻を蒙り度候。

却説貴紙新報第三百二十四號社説欄に於て福音同盟會と大舉傳道と題せる論文を拜讀致候處、足下の論鋒には頗る同感を表し候ひしも、其結論に至つては全然反對の意見を懷き申居候義残念の至に候。此論旨につきては同盟會委員諸氏も定めて意見のあるべき筈に候間、小生は先づ控へて茲には陳述不致候。唯論文中に足下の基督につける信仰を表白なされ候事は天下の幸と可致義に候間、此事につき更に明瞭なる足下の説明を伺はんと欲する次第に候。信仰表白は最も明瞭を要すべき事に候へども、人の言語は不完全なるが爲に信仰の蘊奥を言明すること甚だ六ヶ敷く、足下の明確なる言辭と雖ども小生には解し難き所も有之、又は足下の信仰上の論據をも拜承致度候間、説明の御勞をも厭はれず尊慮の存する所

を明示被下候は幸甚。愈尊慮の程を會得致候上にて果して小生と意見衝突致候件も有之候ときは、憚る所なく論戦をも挑み奉る意向にて候。近年は専ら未信徒に向つてのみ論戦致す心底に候處、兎角同教の兄弟より攻撃せらるゝを免かれず、餘りに恬然として黙し居る譯にも参り難く、又近頃は神學上の論戦も打絶えて無之、寂寞の感も少からず候間、一聲之を破るも亦一種の目覺かと存候。更に愛ふべきの一事は蔭にて人々を邪推し猜疑して、猥りに彼れは異端派なり此れは正統派なりなど、隱峻の風評を飛ばして暗々裡に基督教徒を離間する弊習も有之哉に聞及候、時としては友人たるの名を冒して忌憚する所もなく其人を誣ゆることさへ有之候由、是等は最も忌は敷事にて、我黨には決して有間敷義に候。因て心外の至には候へども不得已同教の人にも亦論戦を挑むべき必要も起り來り申候。世間にては足下の神學意見と小生のとは最も多く相違致居候様に言ひふらす者も有之哉に候へども、是れ或は全くの誤解かも知れ不申戰場に望みて互に武者振を一見致し候へば一回も鋒鏑を交へずして相笑ひ、直に鋭鋒を鞘に納むるやも難圖候。若し夫れ論戦致すべき件果して有之候は之を辭する筈もなきかと存候に付、敢て足下に向つて質問に及び候段御賢察被成下度奉希候。

今や基督教徒の信仰も主基督の人格其ものに熱中致し始め候は信仰上大々の進歩にして、足

下も亦之を是認せられ候事と見え、足下の信仰表白の如き専ら此點に存するを拜承致候は喜悅の至に堪えず候。爰に足下の主張せらるゝ信仰の表白を掲載致候へば

余輩は神人となりて世に下り、十字架に死して人の罪を贖ひたるを信ず。而して余輩の信ずる耶穌基督は活ける神のひとり子にして、人類の祈りを受け、禮拜を受くべきものなり。基督は人類より此の上無き崇敬と愛を受くべきものなり。此の信仰を主張し此信仰を人に傳ふるを以て主義とするは余輩の傳道なり。福音新報第三百二十四號二頁

足下の表白文の簡明にして要領を得たるは感服の外なく候。乍去僅々一句の内容に於ても大文章を要すべき程のもの有之様に被考候に付、改めて足下の眞意を伺はんと欲する次第にて候。却説足下に伺はんと欲する箇條は先づ「神、人となり」の一句にて候。此一句は表白文の劈頭第一を占むる程にて僅々三語にて成り候へども、實に深遠なる哲學的意義を包藏し決して單純なる福音の如きものにては無之様に被察候。元來神は永久不變と承知致候處此の永久不變の神が人と成り給ふとは則ち一大變遷にして自家撞着にては無之候哉、足下の明確なる説明を承り度候。假りに人と成り給ふ事の出來るとすれば、神が人と成り給ふたる以上は神は最早神にては有間敷く、全く人にて候かと合點致され候。猿族が進化して人類と相成候たる上は、假令猿族の性質は尙遺存し居り候とも、最早猿にては決して無

之全く人類にて候、神の人となり給ふたものも亦其の如くにては無之候哉。然らば則ち耶穌基督は何なる場所何なる時代を問はず、永久眞の人にて渡らせられ候義と被存候。此眞人は復其人たるの性情を脱却して本來の神となり給ふ時も可有之候哉。將基督は最早其人たるの性情を蟬脱して純乎たる神にあり給へりと足下は信仰なされ候哉。又神が人と成り給ふたる其時間には天地には唯人のみ存在して、神ある筈は無之道理にて候様に被考候處、足下の意は那邊に存し候哉。足下の意は決して斯る淺薄なるものにあらざるは明白と存候。然らば人と成りたる神とは定めて聖三位の第二位を意味せられ候事と推察被致候。左候へば神、人となるの信仰は一轉して三位一體論となるべき筈に候。就ては足下の三位一體論を一寸承知致さねばならぬ次第と相成候。足下の奉戴せらるゝ聖三位は各位人格を有し給ふものにて、又各位十分に神たるの性徳を備へ給ふ譯にて候哉。若し各位が十分に神たるの性徳を具有し給はぬとすれば、聖三位の第二位が人となり給ふたと申ても、そは神其ものが人となり給ふたとは言ひ難く候。是れにては「神、人となりて」の意義は通じ兼候。結局神其ものでなく神の一部が人となり給ふたと信仰するより外はなきかと被考候。足下の意那邊に存し候哉。若し夫れ神の第二位が人となり給ふたるを以て神其ものが人となり給ふたものと信仰被致候はば、足下の三位論は則ち一轉して三神論にならねばならぬ

様に被考候。足下は三神一體論者にて居られ候哉。足下は如何にして神の本體に三人あることを證明なされ候哉。足下が神、人となりてと發言せられたる一句は深遠なる哲學的問題を包藏致し居候事にて、今日に至るも未だ議論紛々として決定せざる義に候。足下は此大問題を主張し又人に傳ふることを主義となされ候との言明もあれば、必ず先づ小生に其深遠なる意義を教示せられんこと伏て奉願候。小生の如きは二十有餘年此問題を解せんと思ひたれども、不敏にして未だ能く解すること能はざる次第に候、小生は足下の御指導を蒙りて朝に年來の難問題を解し、哲學上の神の本體より一大光明を得るの幸を得候はゞ夕に死すとも怨みは無之候、小生には之を聞くことを得るは實に一大福音にて候。足下幸に此大福音を小生に御傳へ被下度候。尙御教示を願ひたきは第二句にて候。

「神、人となりて世に下り」とあれば、神は常に何處に住し給ふ哉、日月の世界にて候哉、星辰の世界にて候哉、又は日月星辰の外にて候哉、「世に下り」とあれば、より高き世界より來り給ふたに相違なき義と存候。小生は神は無所不在と心得候處、「世に下り」とある以上は足下は神の無所不在を信仰して居られぬかと邪推致され候が如何にて候哉。又は無形の靈界より有形の人界に來り生るゝを足下は「下り」といはれ候哉。其れにしても往來を意味することにて、神は宇宙に往來し給ふと足下は信仰なされ候哉。假令靈界より人世に生れ

來ると考へ候ても、之れは有限に適用すべき語にして無限には適用致されぬ様に被考候。足下の眞意は那邊に存じ候哉、不肖の如きは甚だ了解に苦しみ申候。幸に高諭を惜むこと勿れ。

此外質疑致度件は一にして足り不申候へども一々尋問致候へば餘に長く相成り、又「神人となりて世に下り」の二句は基督崇敬の根本的問題を含蓄致居候間、僅に此二件につき足下の明確なる説明を拜承致し候上にて、若し論戰可致こと有之候は、此處にて開戦致し候ても宜敷からんかと存候。此處は吾人が信仰の關ヶ原にて候間、此場所にて足下の鋭鋒に接し候はば、基督崇敬の深淺厚薄も自から判明可致候。足下幸に前陳の二件につき御教示被下度奉願候敬具

福音新報記者植村正久殿足下

新人記者 海老名 彈正

右公開狀の趣意を概括して示さんに、「神、人となりて」云神子化身説の如きは、實に深遠なる哲學的意義を包藏し、決して單純なる福音の如きものに非ざるに、唐突にも之を以て



傳道の標榜と爲し、或は他人の信仰を量るの標準と爲すの非を認め、而かも古來教會の争點とありて異説紛々、今日と雖も尙ほ決せざる此の信條を爾く單純に標榜する以上は、果して如何なる意義を以て之を主張するかを質し、更に一轉して「世に降り」とあるは何處より降りし乎、日月星辰の世界より降りし乎、神の住所は何處なり乎を質し、其の意義如何に依りては論戰の鋒を交へんとの意を示せる也。之に對する植村氏の答書、福音新報第三百二十八號に出づ即ち左の如し。

### 海老名正君に答ふ

新人第二卷第三號に小生に宛てられし公開書拜見仕り候。

福音新報は無論小生の關係する所に相違無之候。然れども貴殿の質問を起されたる福音新報の文章には小生の署名無之候。直に之を捉へて小生に宛て御質問なされ候段、少々筋違ひかと存じ候。唯だ福音新報記者に宛て御質問あるが當然と存じ候。後日の事もあれば右念の爲一言致し置き候。

併しながら、彼の論文の主意は固より小生も同感のことにて有之、且つ折角小生の名を擧げ

て御質問なされ候事故、何の御答も不致候ては餘り風情無き儀と存じ一言左に陳述致し候。

第一閉口致し候は開戦とか、鋭鋒とか、武者振りとか頗る陽氣なる御事、小生如きは武者振りを見せたくも見たくも無之、唯だ靈界の實戰を極く眞面目に遣りたきものと考へ、及ばすながら眞理を發揮致したき存念の外他事無之候。

福音新報が其信仰を宣言して、神人となりて世に降り云々と書きしに御不審を抱かれ、御尋ねの條々逐一玩味致し候。猿族が進化して人となりたる以上は猿族にてはあるまじくとか、不變なる神が人となるは一大變遷にして自家撞着にては無之候哉とか神世に降ると言へば、神は常に何處に住し給ふや、日月の世界にて候哉、星辰の世界にて候哉とか、かくては神が無所不在で無くなるとか、種々御陳述相成り候工合、宛かもトマス、ペインの「道理の世」やインガルスルの基督教駁撃の論を讀む如き心地致し、奇異の感想に打たれ申候。

貴殿は餘程進歩的御自任の由にて常に新生面を開かるゝが御得意なりと傳聞仕候。成程數年來種々御説き出しに相成り候御議論は果して噂の實なるを證明致し候。貴殿の頭腦敏捷なるには平生驚き居り候。然る所小生如きは中々開創的とか新機軸を出すとか及びもつか

十  
ぬ話にて、何も珍奇の信仰無之候。福音新報に見えし、神人となり世に降り云々の如きも、全く歴史的の信仰にて、基督教信徒が古來共に認め來りたるものと少しも變りたる所御座無く候。古來基督教信徒が耶蘇を如何に信じたるか、又神人となりて世に降りたりとの信仰が其の大眼目たりしとは貴殿に於ても疾く御承知の御事と存じ候。小生は此信仰の外に別段見開きたる點も無之候。又信仰が(其是非は兎もあれ)通常如何なる意味を有する者なるか、此れは貴殿に於て百も御承知なるべく候。今更の様に難題がましく御質問あるが了解致し兼ね候。若し此の信仰に御不同意ならば御遠慮無く御攻撃おらせらるゝに若くも無しと存じ候。堂々反對の地位に立ちてアリアニズムなり、サペリアニズムなり、ユニテリアニズムなり、ソツチル説なり、將た別段に御見開きの御新説なり、御發表なされ候方自他の便利と存じ、切に御勸告申上候。貴殿が基督を神に非ずと御断定なされ、若くは神人となりしと言ふ説に駁撃を加へらるゝか、基督教信徒の歴史的に繼承し來れる信仰に向ひて非難を下さるゝ様な事を公然御議論あらば其時こそ小生も、基督教信仰の主張者辯護者として、非基督教的の信仰なるを公示せられたる貴殿と論戦を開くとも辭せず候。貴殿近頃は如何に基督を御信仰なされ候哉。基督は人となりし神に御座候哉。之を神として禮拜し、之に祈禱し、之に向ひて神に盡すべき敬愛を献すべき善に候哉。神の子は父な

る神を愛し又愛せらるゝものとして、永遠無始に存在せられしと御認めに候哉。此點に就ては貴殿の立場を明かにせらるゝが必要と存じ候。福音新報及び小生の立場は前にも申せし様の次第にて、其範圍及び其の意味共に有りふれたる事の外無之候。故に貴殿の提出せらるゝが如き御質問は無用なるべく直に賛成なり、駁撃なり御遠慮無く御發表相成るに於て何等の差支へ無かるべしと考へられ候。然れども不審なるは貴殿の立場に候。御質問の模様を窺へば何となく基督教徒普通の信仰に反對せらるゝものに非ずやと懸念仕候。此の所御信仰を發表せられて世間の疑惑を解かれ候方然るべくと存じ候。之を要するに貴殿御好みの武者張りたる句調を拜借すれば、廣く哨兵線を張られ遠く斥候を出さるゝなど御要心無用と存じ候。當方には御見懸けの外別段伏勢と申す様な奇策も無之候間、御懸念無く御本軍を御進め下され度候。篤と御武者振り拜見仕候上にて必要有之候はば、當方よりも相當の御挨拶申上ぐべく候。先は御返事まで如此に候。敬具

海老名 正君

梧 下

植 村 正 久

111  
突如たる海老名氏の質問に接し、植村氏は如何なる感想を懐かれしやと考ふるに、福音新報三百廿九號に據れば、「一體海老名氏は基督の神性とか三位一體とか云ふ根本的大問題に就ては何ふ云ふ立場に居らるゝてあらうか氏の書面に依て見ると氏が問題に對する立場は未だ決つて居ない様な語氣が見える、果して左様であらうか、氏の如き先輩が斯る問題に就て其の立場を何れともシツカリ決めずに居らるゝと云ふは聊か其意を得ざる所である、是は無論大問題であるから、之れに對する疑問は随分であらふ、併し大體の態度だけは是非決めて置くべき筈であらふと思ふ、氏の公開狀で見ると何ふも其の態度が決まつて居ない様子で、其の語氣は何となく素人らしく、其の口吻は無信ある哲學生の質問らしく聞ゆる、吾々後進の徒は先輩海老名氏が先づ右の根本的問題に就て其の立場を明かにせられんことを希望するものである」との記事あるを觀る。而して植村氏の答書の要點は、神人となり世に降り云々との信仰は、全く歴史的の信仰にして、基督教徒が古來共に認め來りたるものと毫も變らざる事、而かも這般の信仰は既に海老名氏の熟知せる所なれば、殊更に説明の勞を採るの必要な事の二點を以て之に答へ、更に翻て「貴殿近頃は如何に基督を

御信仰なされ候哉、基督は人となりし神に御座候哉、之を神として禮拜し、之に祈禱し、之に向ひて神に盡すべき敬愛を献すべき筈に候哉、神の子は父なる神を愛し又愛せらるるものとして、永遠無始に存在せられしと御認めに候哉」と海老名氏に反問し、其の意見の發表を希望せし而已にして止む。此の植村氏の答書に對する海老名氏の再度の公開狀は左の如し。

### 植村氏の答書を讀む

海老名 彈正

予は植村正久氏の答書を讀んで、忽ち奇異の感想に打たれ、更らに一轉して浩歎の情禁ずるをえなかつた植村氏は靈界の實戰を執行し、真理の發揮を旨とせらるゝことを明言された、其言の紙上に歴々たるにも拘らず、予の眞實なる質問に對しては聊も其靈界の實戰を酬いらるゝことなく、又眞理發揮の爲めに毫も其遵奉せらるゝ信條の内容を示さるゝことなく、唯其信條は全く歴史的の信仰にて基督教徒が古來共に認め來りしものと少しも異りたることなしと言ひ放たれたるところ、吾輩は其極めて眞面目らしくないのに驚かざ

るをえなかつた。

若し夫れ信條が複雑深遠ある内容を含んで居ないものならば誠に其範圍も其意味も有りふれたる事であつて、説明も討論も必要のないことである。しかしながら吾人基督教會史を編いて、古來一信條の定まるや幾多の論難駁撃を経たる後に於てし、或は又同一の信條が時代の變遷によつて古來未發の内容を發揮し來りたる跡を考ふれば、單に歴史的に繼承し來れる信仰といふ言葉を以て一概に言ひ去ることは出來まい。古代の事は姑く之を措き。彼の歐洲の宗教改革といひ、諸教派の分立勃興といひ、見來れば皆これ基督教信仰内容の發展に外ならないのである。ウエスレーがホッソフィールドに向つて、爾の神は我が惡魔なりと叫んだといふが如きは、決して形式的信仰の論争でなく、其信仰内容の見解に和すべからざる相違を認められた故であらう。

是に於てか吾人は疑ひなきをえない。植村氏は果して眞面目に基督教の眞理を發揮するの意あるや否や。其所謂眞理の發揮といはれたのは、歴史的繼承の信條の意義を正すなくして文字的に固守し、其文字を天下に宣傳し、人々をして其文字に盲從せしむるに止つて、萬々其内容を發揮するの意味でないことは、氏自らの文字の自證する所ではあるまいか。しかして其歴史的繼承の信仰とは、無論天主教ではあるまい、又メソヂスト派ルーテル派

でもあるまい。即ち日本基督教會が遵奉繼承し來れるカルウヰン派の信仰に外ならないのであらう、其新人記者に反問せられた件々の如きも、基督は人となりし神に御座候哉とか、神の子は父なる神を愛し又愛せらるゝものとして、永遠無始に存在せられしと御認めに候哉とか、毫も其信仰内容の發揮に關することなく、唯此を信ずるか信ぜぬか、彼れを認むるか認めぬかと、恰も洗禮志願者の入會試験でもせらるゝが如き口調である。極言すれば其所謂「歴史的に繼承せる信仰」の法位に坐して人々を審判せしカヤバヤポーバの態度に彷彿たるものがある。討究や論戦で以て眞理を發揮することは到底植村氏に望まれないやうに思はれる。結局相互に異端視し邪道視し、終に破門にまで及ぶてなくば飽き足らないのであらう。此の如きは吾々の最も厭ふべき所である。植村氏の論法を以てすれば假令幸に論戦するの機會をうることがあつても、それはたゞ歴史的の評論に止まつて靈界の實戦を現出するには至られまい。歴史的基督教は歴史を研究すれば判明すべきこととて、別に植村氏を煩はして論戦するの必要はないのである。吾輩は同氏の堂々たる信仰表白文（假命同氏の自筆に成らずとも其賛同せられたる）の内容をきくの幸をえなかつたのを以て千載の遺憾とするものである。否獨り予等のみではあるまい平生眞面目に眞理の發揮に熱中し植村氏の答書を今や遅しと待ちくたたる諸氏も、其書に接して其態度に失望されたであらう。

何れの時代に於ても自稱正統派の取りたる態度は恐らく之れに過ぎないと思はれる。古へより預言者を迫害し、基督及其使徒を殺戮し、保羅を逐ひルイテルを放ち、スピノザを排斥しソルウ<sup>ソルウ</sup>ヲタスを焼きたる人々は、皆歴史的繼承の壘に據つて信仰内容の自由討究を環退せんとしたものである。若し我國の固陋なる忠君愛國の唱道者に、其忠君愛國の内容如何と問ふたならばドーだらう。不忠不敬の宣告は直に其口から下されるであらう。今日の宗教界また此類の人に乏しくない。吾輩は到底此等の人々と手を執つて真理の發揮を勉むることが出来ない。植村氏の如き人物にして亦此類の意向をほのめかされたのは實に我宗教界の爲めに浩歎すべきところである。予は同氏に其信仰の表白を請求したのではない。其仰々しく發表せられたる信條の内容を聞かんが爲めに質疑を發したのである。之を主張するを以て其主義とする所の植村氏は其内容の質問に答ふるの義務はないのであるか。氏が一言の之れに及ぶものなくして却つて予に信仰の表白を勸告せらるゝは、氏の其信條を主張せらるゝやたゞ獨斷的であるとの意味であるか。あゝ予は最早多くをいふまい、しかも遂に此等意外の言を以て今回の局を結ばねばならぬに至つたことを深く限りなく遺憾とするものである。

按ずるに海老名氏は植村氏の反問を以て論戰の順序を轉倒したるもの、又之を以て洗禮志願者の信仰問答的のものと認め、今直に自己の説を述ぶるの要なしとて之に應ぜざりしが如し。之れ第一回の論戰にして、要は唯だ質問の形式に關する二三の辨難ありし而已、然るに福音新報記者は同誌第三百三十二號、「挑戰者の退却」てふ題下に

予輩は漠然基督の神性を唱へたるに非ず、カルビン、ルイテル、ウエスレー、モウリス等を始めとして、基督の教會が異口同音に主張する所を主張したるにて、一宗一派の信仰にあらざるなり。剩へ基督は禮拜をうけ、祈をうけ、此上も無き敬愛をうくべき神のひとり子なりと言ひたれば、既に或る人々の如く、漠然として基督を神の顯彰なりとするに非ず。實に之を神とするものなること明白に非ずや。又、神の子は父なる神を愛し愛せられて永遠無始に存在せられしものに候やと質問せしに因りて、神の子は千九百年前に始めて存在せしものにあらず、永遠無始に父なる神と共に存在したるものと爲すの意も明なるべし。愛し愛せらるるといへば、唯だ理想として神の中に存在せしものにあらずとなすの意も容易に知らるべし云々

と論じて再度の論戦を挑み、稍や其の立場を明にして戦意なきに非ざるの風情を示せしかば、海老名氏は再び左の公開状を掲げて三位一體に對する論戦を始めける。

### 再び福音新報記者に與ふ

海老名 彈正

福音新報第七卷第十九號の社説欄に於て、「挑戦者の退却」と題し、敵手の背後より口さがなく罵り叫ぶものは植村氏であらう。其聲色の如何にもよく氏に似たりと聞くは僻か。植村氏はまたも其署名なき故をもつて、分けて今回は第三者の地位に立てるを以て、其起草者は斷じて正久でないと言ひ張らるゝであらうが。吾人は山羊の皮をつけて兄エソフに擬し以て父を欺かうとしたかのヤコフを想起して獨笑せざるをえない。植村氏にして果して論戦せんと思はるゝならば、正々堂々真正面より名乗つて出でられよ。吾人は敵手を擇ぶものである。

新報記者、足下は足下の「神人となりて世に降り」といふ信仰表白に對する吾人の質問に向つては、何故に一片の答辯をも試みられなかつたのであるか。足下の主張はブレズレン

派の如く基督教信者に對するばかりではよもあるまい。インガルスルであれ、トマス、ベインであれ、ヒュームであれ、ドレーメルであれ、ハツクルであれ、凡ての人に向つて主張せらるゝであらう。問振の如何によつて何も答辯に躊躇せらるゝことはあるまい。足下は言はるゝ、此表白の意義は明々白々て別に六ヶ敷どころはない、説明を要することはない。しかも足下の表白には獨り教外に反對論者の多いのみならず、教内にも異説紛々として決する所がないのは足下の篤と承知せらるゝ所であらう。然るを足下には此六ヶ敷問題が一目瞭然だといはるゝのであるから、足下は其明瞭なる解釋を吾人に示さるべき義務がある。新人第二卷第三號に於て質問した所は今復た之を反覆して足下を煩はすまい。之れに對し足下の答辯をきかあかつたのは實に遺憾であるが、今は一步を進めて更らに奥妙なる教説を掲載して、吾人を幽遠の教界に誘導せられたのはむしろ多謝する所である。

新報記者足下、(一)足下は吾々の父なる神の外に又子なる一柱の神ありと主張せらるる。しかして足下の説明によれば、此二柱の神々は永遠無始より兩々對立して相互に愛し愛せられつゝあるものであるから、足下は疑もなく二神教の主張者であるやうに考へらるる。

(二)神父と神子との哲學的關係は未だ詳に聞くことをえなかつたが、神父が永遠無始にして能はざるなく、知らざるなく、無限無量在らざるなく善からざるなき實在者なることは

吾々が等しく信ずる所である。然るを足下と共に兩々相對立して存在する子なる神をもまた、永遠無始にして能はざるなく知らざるなく、無限無量にして在らざるなく善からざるなき實在者なりと論斷せらるゝてあらうか。さらば二個の無限無量の實在者を承認せねばなるまい、これ吾人の理解し能はざるところなるのみならず明なる自家撞着のやうに思はれる。(三)足下は所謂正統派の主張者を以て自任せらるゝやうであるから、聖靈も亦父子の二神に並立して吾人の崇敬をうくべき一の神たることをも承認せらるゝてあらう。さらば足下は二神教より更らに一步を進めて三神教の主張者たるかのやうに思はるゝのである。(四)父子二柱の神々の相互の愛は圓滿にして美を盡し親を盡くし毫も遺憾あるべき筈はない。然るを二者の中間に第三者の聖靈を必要とする如きは如何なる理由であるか。吾人は茲にもまた自家撞着の免れかたきものあるを見るのである。幸に足下の明瞭なる説明を與へられよ。

吾人は無限なる二柱の神々を認識することは到底出来ない所である。しかるを植村氏は之れに加ふるに無限なる二個の神々を認識せらるゝ以上は、又無限なる三個の神々を認識せらるゝこと決して六ヶ敷あるまい、既に三個の無限なる神々を認識さるゝ以上は、四個否無数の無限なる神々の存在をも承認せらるゝも、ひとしく困難ではなからう。植村氏は無

限なる獨一純全の神に信賴することに満足せずして、又無限なる第二神を崇拜し、無限なる二柱の神に飽き足らずして更らに又無限なる第三者を尊信せらるゝのであらうか。天主教の如きは此三柱の神々を以ても満足せず、第四者即ち神の母を並へ禮拜するに至つたものである。

新報記者は何を以て古代の哲學思想の産み出せるかゝる神話的教説を承認せらるゝのであるか。通俗基督教が信奉し來つた信條であるからといつて、一も二もなく信ぜらるゝのであるか。はたカルビン、ルーテル、ウエスレー等の諸賢が信仰したからといつて、之に盲従和同せらるゝのであるか。記者はかく信ずるのを歴史的繼承とせられるやうだ。史的繼承は吾人も大に重んずる所であるけれども、古代の形骸を其儘に傳ふるの抑も歴史を滅却したものでないか。歴史といふことは文字其物よりして開展進化を意味して居る。吾人は古人の靈的生命を發展するを以て眞の史的繼承とするのである。カルビン、ルーテルの所信所説を其儘悉く傳承すべきものならば、記者は定めし創世記の神話傳説をも其儘繼承せられてまたエデンの地理的所在を搜索せらるゝてあらうか。

吾人は基督の神性をも信じ、聖靈の神性をも信じ、又三位一體論の教義中に深遠なる宗教的眞理の包藏せらるゝをも信ずる。しかし植村氏の神話的教説の如きは、基督教本義の光

明を蔽塞するが故に、断じて之を排撃しやうと欲する。吾人は活ける歴史を信ずるが故に死せる形骸は死者をして之を葬らしめんことを欲するのである。パウロはいふ、俄文は殺し靈は活かすと。吾人は實に同情の感禁する能はざるものがある。

植村氏は福音新報第三百三十七號に、「海老名正氏の説を讀む」と題し、其の冒頭に「余輩が曩に海老名正氏の退却せらるゝを呼び留めんと試みたるは讀者の記憶せらるゝ所ならん、氏は如何に感ぜられしか終に引き返へして、再び余輩に其の論鋒を向けられたり、其の説く所毫も要領を得ず、僅かに前日の言を繰り返されしに過ぎず、之に應答するは、餘り面白く感ぜざれど、或は氏が堂々其の主義を明かにし、余輩をして快く議論を盡くすの機會を得せしむることあらんを萬一に僥倖し、茲に聊か意志を表明して、氏の反省を促がさんと欲す」と叙し、海老名氏の非三位一體を破せる其の論の結尾は左の如し。

#### 海老名氏の信仰告白

然れども海老名氏は、余既に基督論を發表せられたりと言はんとするか、善し試みに其の

發表せる信仰を左に示すべし。曰く

吾人は基督の神性を信じ、聖靈の神聖をも信じ、又三位一體論の教義にも深遠なる宗教的真理の包藏せらるゝを信ず

と。此は刑事被告人が法廷に於て自己に不利益なる陳述を爲す場合の如く、海老名氏の筆端より溢り出されし告白なり。基督の神性とは何を意味するや。アリウス然か信ず。ゆにてりあんも然か主張す。リツチルも然か宣言す。ナポレオンも此れしきの事はセント、ヘレナの配所に言ひ得たり。余輩の問ひしは此に在らず。基督は神なるか非かを問ひしなり。基督は祈りを受くべきものなりや。即ち遍在なりやを問ひしなり。基督は禮拜を受くべきものなりやを問ひしなり。神に非ざるを禮拜するは異教主義なり。淫祠迷信なり。海老名氏は基督を禮拜するや。而して基督は神なりや。神に非ずと言はば、海老名氏は偶像信者なりや。余輩の問はんはんと欲する所此の如し。海老名氏はゆにてりあんにも差支なき答辯を與へて一時を糊塗せんとせらるゝのみ。神の作用は凡て神的なり。ゆにてりあんも聖靈の神性を信ずべし。余輩は聖靈のパーソナルなるや否を知らま欲しく思ふのみ。三一説はヘゲルも深遠なりと認めたり。然れども彼は基督教徒に非るなり。基督教主義ならざる三一説も存す基督教主義三一説に真理の包藏せらるゝを認むると之を真理なりと信ずると



の間には南北よりも大いなる差異存す余輩は氏の三一主義の如何なるものなるやを知らんと欲するなり。

二四

植村氏の答辨に對する海老名氏の態度如何と謂ふに、氏は植村氏を以て答辨を避けて質問、攻撃、非難、嘲弄の地位に立たんと欲する者なれば、更に確信と眞率とを以て來るに非ざれば論戰の甲斐なしと思惟し、躬ら其の論戰を中止するに到りしと謂ふ。按ずるに第二回の論戰は最初のよりは、兩者の主張も態度も稍や明白成りに來りしと雖も、要するに根本の是非を捨て僅かに枝葉の辯難抗擊に止まりし而已。恰も是れ狼煙天を焦し鯨波山河に震ふ大軍の、刃を交ふると僅かに一二合にして、空しく旗を卷き軍を退さしが如きに過ぎざれば、吾人は其は飛樓雲梯を具へ櫓轆轤を修め、大兵の陣頭に雷驚電撃の火花を散らすの日を俟たざる可らざる也。是れ世に謂ふ植村氏對海老名氏の論戰の一斑にして、刻下世評に上れる基督論の發端なりと謂ふ可し。

## 第二編 現時の基督論

海老名氏が自家信仰の立脚點を表白し、併せて植村氏の反問に答へし所の論文は、「三位一體の教義と予が宗教的意識」と題し、ロゴス、化身、基督、聖靈、三位一體等の諸論を含める大論文にして徵引博渉を極む。而して該論文に對して精嚴なる批評を加へしもの、毎週新誌の小崎氏、福音新報の植村氏、護教の高木氏、新人の三並氏(寄書)等にして、俱に海老名氏の所説を縦横に辨拆して其の是非を決せんと努めしは、實に近時稀有の快事なりと謂ふ可し。先づ前に海老名氏の基督論を掲げ、以下逐次之に對する諸家の批評を載せん。

### 三位一體の教義と予が宗教的意識

緒言

海老名 彈正

已れ自からを知るといふことは古人の深く心に懸けた所である。吾人も之を旨とするものであるから、基督に由れる信仰に基く吾人の宗教的新意識に對し、吾人が解釋を試みんと欲するは亦自然の勢である。古への人は其所謂三位一體論を以て此新意識を解釋せんとしたのであるが、吾人は吾人の所謂三位一體論を以て此意識を満足に解釋せんと試むるは亦吾人が分限の許す所であらう。基督教の勃興したる時代は三位一體的思想の盛んに流行した時代で、教内教外の別なく此思想によらざれば、凡ての宗教的意識は満足に解せられなかつたのである。此宗教哲學は決して基督信者の占有物ではなかつた、彼等は此思想旺盛の時代に生れたるものであつたから、其時代思想を以て其新意識を解釋せんことを務めたので、三位一體の教義の如きは即ち時代思想の結晶體といつてもよい、當時基督教は時代精神の代表者であつたが、其三位一體の教義は即ち基督教の標準信條となつた。基督教は實に此信條を標榜して羅馬帝國の思想界を征服することを得たのである。幾百年の其間、リシヤ天才の産出した所の哲學思想は言ふも更なり、其上尙更に數百の星霜を積み重ねて討究された所の宗教哲學思想は、此三位一體の教義に由て大成せられたのであるから基督教會が之を尊重遵奉して長く繼承し來つたのは至極尤もなわけである。

#### ロゴス論の出處

今の三位一體論者の主張する内容は爰には言はぬ、古への三位一體論の内容を略言すれば其宗教的意識の内容が大抵推量せらるゝてあらう。猶太教の神は獨一純善の活ける神ではあつたが、時間を以ていへば天地の前にあり空間を以ていへば天地の上にと思惟せられたるが故に、神と天地との懸隔は非常に遠いものであつた、従つて天啓の時代も遠い古へにあつた話となつて、全く過去に屬する事柄になつてしまつたのである。故に猶太教の神は超自然神教の神とあり果てたのである。之れに反して異教の神々は皆天地造化の力であつて、之を哲學的に解釋すれば萬有神教に外ならなかつた。此萬有神教と超自然神教とは當時宗教界の二大分野をなしたもので固より互に相容れなかつたのである。猶太教と異教と相衝き、猶太人と異邦人と相敵したのは外ではない、即ち是等正反對なる二有神教説が相衝突し相敵視したのであつた。けれども思想は全然片輪なることをえない、超自然神教の神も全然天地萬有と別離して存在するものとは考へられない、神は假令天地の前に其存在を有したるものであるとしても、天地萬有は會つて神に創造せられたことがあつた、神は天地の外に存在を有すとしても、之を主宰するの大權は尙其掌中にある、神は天地萬有を創造して安息し給ふたと考へても、又天啓を授けられたこともある。故に猶太教の神は純

乎たる超自然神教の神ではない、異教の神々は造化の能力に外ならなかつたが、其哲學は是等の神々を超越する所の實在を發見するに至つた。猶太教は獨一神を認むると同時に多數の天使をも認め、異教は八百萬神を認むると同時に無窮永遠の存在を認めたとある。此に由て之を觀れば此二有神教は本來氷炭相容るべからざるものではなかつた。乍去此二教の思想を結付けるには神にして神にあらず、天地にして天地にあらず、一種の能力を認定せねばならぬといふ所から、神に造られたてなく神より生れたので、又天地を創造する創理性であるものを認定するに至つた。其名目は第二の神といひ、神の獨子ともいひ、半神造物者ともいひ、又道理とも理性とも稱せられて、しかし其最も廣く使用せられた語は即ちロゴスであつた。此神の分身にして天地の中に遍在する所のロゴスは即ち神と天地と別言すれば超絶神と萬有神と即ち猶太教と異教とを結付くる力である、神に對していはば神より生れた獨子天地に對していはば天地を造つた理性である。約翰傳の劈頭に元始にロゴスあり、ロゴスは神と偕にあり、ロゴスは即ち神なり。ロゴスは元始に神と偕にありき。萬物之れに由て造らる、造られたるものに一として之れに由らて造られしはなし。之れに生命あり、生命は人の光なりとあるは當時のロゴス思想を能く言明したものである。

#### ロゴス論と善惡の解釋

ロゴス論は猶太教と異教との二大思想を結付くる大々的思想であつたばかりでなく、又善惡論の深意を解釋する方便にもなつたのである。善と惡とは絶對的の反對なるものであるとは當時の人々の等しく認められた所、善惡二元論を主張した哲人も少くなかつたので、神とサタンとは元始より兩々相對するかの如く思惟した事もあつた、或は神を絶對の善となし、物質を絶對の惡と論究した事もあつた。是等二元論は一見甚だ真理の如く考へられるけれども人間の心意は二元論を以て満足することは出来ない、人の理性は結局一元論を以て最も合理的のものと論定するのである。古人も亦此論點に歸着したのではあつたが、善なる神と惡なる物質とを結付くることは實に六ヶ敷かつたので、種々の神統紀を想像し出したのであつた。即ち神より一の勢力出て其勢力より續き／＼に生れて結局物質と成り果つると恰も水の流れて下流となるだけ濁るが如く、太陽の光線の遠くなるだけ其温熱を減ずるが如きであると思つた。此流出をして幾回も相繼續せしめた所の議論もあつたが、基督教は第二回までにして止めた、即ち父が本源であつて、第一に生れたものを子といひ、第二に出たものを聖靈といふた。基督教の善惡論は固より流出論と同一ではなかつたが、ロゴス

を神と物質との中間に立てて、其善悪解釋の便を計つたことは間違ないのである

ロゴス論と天地創造

尙一の述べて置きたいことは、如何にして天地萬有が創造せられたかといふ問題も亦ロゴス教の主張によつて解釋せられたといふことである。猶太教の主張するが如く、神が若し單純獨一なるものならば、如何でか天地を生ずることが出来よう。神其もの、本體に於て永遠より一二を生じ、二三を生ずる動機なくしては、天地萬有の出で来る筈はない。故に天地萬有創造せらるゝには神の中に種別を生ずるものがなければならぬ、又天地萬有は差別の中に平等あり平等の中に差別あり、畢竟するに神其もの、本體に種別ありて始めて天地の平等差別を解釋することを得ると主張したものである。乍去神とロゴスと精靈との三實體があると論したのは基督教と異教哲學とが等しく主張した所の思想であつたといふことを吾人は肥臆せねばならぬ

ロゴス論と基督教徒の意識

當時の基督信者は其宗教的意識を前述の哲學思想に由て解釋せんと試みた。其意識といへ

は即ちナザレの耶蘇キリストに由て至善の神と一致和合することを得た所のものである。耶蘇キリストは實に神と人とを結付けた所のものであれば、さて其の性情人格は何であらうか、是れ彼等が論究せずには居られぬ所であつた。神と天地とを結付くるの力は即ちロゴスであれば、神と人とを結付る人格も亦ロゴス其ものでなければならぬといふは最も推測である。基督教徒が其神と一致和合した所の宗教的意識を解釋するには、當時の哲學思潮の勢、どうしてもイエスを以てロゴス其もの、顯現と斷定するより外はなかつたであらう。さて此ロゴスが若し受造物であつたならば、基督信者は未だ永遠の神と結付いて居るとはいはれない、乍去其意識に尋ねるときは確實に神に結付いて居るや疑ひなかつた。左らばロゴスは假令如何なる尊嚴を有するものであつても、受造物である以上は基督教徒の意識を満足に解釋することは出来ぬのである。アリヤン派のロゴス論が（ロゴスを受造者と主張する論）敗れて、アタネシヤ派の主張が勝利を得たのは、取も直さず基督教の勝利といふべきである。蓋しアタネシヤ派はロゴスを以て神より出でたる神、光より出でたる光と主張したからである。

爰に天地の上に超絶する父と天地中に遍在する子とが一身同體の神たることの認識せられて、始て猶太教にもわらず異教にもあらざる基督教有神論が明確に認定せられたのである。

又基督信者の新意識は明に一神崇拜の意識である。然るに當時彼等は基督崇拜をなしつつあつたから、若しロゴスが神其ものでないならば彼等は多神教の信徒となる譯だ。けれども多神教は彼等の厭惡する所であつたから、ロゴスを以て神其ものとせずにはゐられなかつたのである。そこでロゴスと基督とを一身同體と認定すると、同時に亦ロゴスと神とが一身同體であることを認定するに至つて。

### 永久の安心

基督教徒の宗教的意識は永久絶對の安心を自覺するものである。此安心は耶蘇基督に由つて得た所のものであれば、もし基督が無上の神と同體なるロゴス其ものでないならば、其安心は決して絶對の安心とは謂はれない。絶對の神に由れる安心であつてこそ始めて永久不易なれ、若し受造物によるものならば、假令天使長の尊榮を有するものであつても、未だ以て眞の安心とはいはれない、是れ其キリストとロゴスとを結び付け、又ロゴスを以て神の分身と尊崇したる譯である。

### 絶對的宗教

又基督教徒はキリストに由て絶對の安心を得た以上は其信奉する所の宗教の絶對的價值あることを論證せねばならぬ、古の聖賢が永恒の眞理を教示して人々に安心を與へたことは知識ある基督教徒の承認する所であつた、然かして其眞理は天地の理性なるロゴスの感化に由て發揮せられたものだといふとは異教哲學の夙に論及したのであつたから、基督教徒は此世界を照らしつゝあつた所のロゴス其ものは絶對的に又圓滿に耶蘇キリストとなつて現はれ古聖賢に由つて闡明せられた片々の眞理は悉くキリストの一身に具備完成せられたと論斷せざるをえなかつた。左らば基督はロゴス啓示の絶頂である。故に基督教は萬教の集合し來る燒點であつて、即ち絶對的宗教なること明白である。嗚呼大なるかなロゴスと耶蘇とを結び付たる思想。羅馬天下の思想界を併呑した偉大の思想は即ち此思想であつた。

### ロゴスの化身

靈魂が人體を取つて人間界に生活するといふ思想は當時哲人の殆んど普く採用した所で、ピタゴラス派は靈魂の輪廻説を主張し、プラトン派は上天の英靈が罪惡を犯したるの故を以て肉體を取つて人界に墮落したと論じた。人靈過去の存在は獨り異教哲學の主張したばかりでなく、猶太哲學も亦之れに唱和したのである。歴山府の猶太人フィローは創世紀第

一章の神の肖像を有する人と第二章の塵埃を以て造られたアダムの間に區別を立て、前者は後者の標準にして上天に存在するものであるといふた、ホウロは此理想標準たる天上の人が肉體を取つて世上に顯現したものを取りも直さず。キリストと思つたのである。左らばロゴスが肉體を取つて人界に生活するといふが如き思想は、容易く了解せられ得べきものであつて、當時化身論は何も六ヶ敷問題ではなかつた、唯ナザレの耶蘇が活くる神の化身であつたかなかつたかといふとが信者未信者の區別せらるゝ所であつた。異教哲學はアポロニオスのチエラを以て活ける神の化身と主張したのである

### 聖靈の地位

ナザレの耶蘇がロゴスの化身であつて、ロゴスは永遠の神の分身であるといふことは容易に基督教徒の一致することの出来ない所であつて、實に第四世紀にならば一定の信條となるを得なかつた、それが一定の信條となつた後も基督教徒一般には遵奉せらるゝに至らなかつた。しかるに既にロゴス論が勝利を得たときは、聖靈は造作もなく、ロゴスに次ぎて神の第三位を占むるようになったのである。が聖靈がロゴスに並び稱せらるゝが如きは、異教哲學にても疾くに論定して居つたところで、基督教徒が聖靈を神の第三位としたことは決して破天荒の識見とはいはれない。

### 三位一體論の發達

基督教は基督より發生して今日に至る迄二千年の久しき、尙其生長發達を止めぬ所の偉大なる宗教である。ロゴス論は基督教を以て永生顯現の事實と解釋せんと欲したる時代思想であつて、基督の自から啓示せられたものではなかつた、是れ吾人が最初から承知して置くべきとてある。基督は嘗て三位一體の教義を以て人の是非曲直を定めたまふたとはなかつた、又之を以て信徒未信徒の別をなし給はなかつた。三位一體の教義の如きはその念頭にだも浮ばなかつたであらう。(馬太傳結尾に父と子と聖靈云々は教會の聲であつて後年附加したものである) 耶蘇は唯其メシヤたることを公言し給ふたばかりである。メシヤとは猶太の王といふ義、又神の子といふもメシヤといふ義と同一で、萬々ロゴスの意義ではなかつた。キリストの十二使徒は耶蘇の公言を信じ、彼れのメシヤたるを認めて、其再來を期望したに過ぎぬ。當時基督教徒たるを表白する信條はナザレの耶蘇が猶太の王メシヤであるとの一ヶ條であつた、彼等固より三位一體の教義は知らなかつたポウロは一步を進めてナザレの耶蘇を以て上天の標準的人格の化身と認めたのである、しかし彼れは基督を其主であるといつたのみで、

嘗て神と尊稱したことはなかつた。彼れもニクヤ信條の主張者ではなかつた。約翰傳の著者に至つて始めて、ロコスとナザレの耶蘇とを結び付けたのである。しかし其ロコスは神と稱してはあつたけれども、ドコまでも天父に劣れるものとせられた。故に著者はロコス從屬論を主張するものであつたことは間違ない。ニカヤ信條の確定せらるゝまで、實に三百年の久しきロコス論は基督教會内に於て異説紛々であつた。此に由て之を觀れば三位一體の教義あつて然かして後基督教徒あつたてはない、基督教徒あつて然かして後此教義の言明せられたといふことは明白である。此教義が能く基督教徒の意識を説明したとは疑もないが、教義其ものが眞理であるとは斷言せられないのである。ロコス説の流行したる時代に於ては固より此教義が最も能く基督教徒の意識を説明したに相違ないけれども、之を萬世不易の信條とすることは吾人の首肯するを得ない所である。何んとなればロコス哲學が果して萬古不易の眞理であるかどうかは甚だ疑はしき所である、近世哲學は基督教徒原始の時代の如く最早ロコス論を主張しない、吾人はロコス哲學時代の既に遠く過ぎ去つた今日に生存するものであれば、茲に吾人は吾人基督教徒の宗教的新意識に吾人の新解を附するの權利あるのみならず、又義ありと思ふ。予固より薄信淺學にして之れに新解釋を與ふる價值あるものではないが、舊來の解釋を以て満足すること能はざるものなれば、己れが力相應の解釋を附するも亦不遜の罪を蒙ることはあるまい故に自ら思ふ所を陳べて舊信條に満足することの出来ない教友の参考に供せんこと亦我義務なりと信ず。

## 予が研究の順序

予は基督教信者となりし當時より、三位一體の教義が念頭に浮ぶことに未だ會て一種言ふべからざる苦痛を減むないことはなかつた。予が微なる智力は此教義を解せんが爲にあらゆる考慮を用ひ盡して窮境に陥つたこと屢であつた。固より神聖にして犯すべからざる教義として繼承し來つた所の信條であれば、之を尊重したと限りなく、若しも一點の疑雲を起すことあらば、不信不敬の罪として之を打消し去つたことも度々であつた。予は眼病に悩まされて多くの書を涉獵するの便を持たなかつたが、まんざら大家の議論を聞かなかつたでもない。予は獨逸のドルンルが近世の神學大家として大に三位一體論を主張した所の人であるとき、最とも彼れの著書に思を凝らし、彼の大著であるキリスト論發達史の如きは實に再三繰返して之を玩味して見たのであつたが、其史たるや實に紛々擾々の宗論史に外ならないことを知つた。其書に由つて予はキリスト論の如き、三位一體論の如きは古來明確なる定論なきを知り得たばかりであつた、唯其議論が深遠なる宗教的意識を解せんが

爲に討究せられたものであつて、今の神學校などで屹々論究するが如きとは雲泥の別あることを知つたのは予が本書の著者に謝する所である。予は又三位一體論に興味を有したる、否天地萬有を三動機を以て説明し盡さんと、試みた大哲ヘーゲルにも其教を乞ふた。其議論固より深遠で、有益なる教を受けた所のもの二三にして盡さず、予は彼れの弟子たるを榮とするものである。けれども三位一體の教義は彼れに由つても尙解することは出来なかつたのである。ア、予は重荷を負ふて疲れた、しかし予が心の苦悶は尙止まなかつた、此時恰もキリスト彼れ自身の秘訣を知らんと欲するの情切にして禁じがたく、予が宗教的意識は本來彼を信じて得たものであるから、復彼れ自身の解釋を聞んど欲した。凡て疲れたる者、重きを負へる者は我れに來れ、我れは柔和にして心謙れるものなれば我れについて傲へとの言は實に予が祈願に適應する所の聲であつた、我れは柔和にして謙遜れるものなれば我れに就いて學べとの言は殊に予をして彼れに親むの情を深からしめたのである。予が宗教的意識はキリストに由て始めて發生したのであるか、其解釋も亦キリストに由て確定することを得た。

#### 耶蘇基督と予が宗教的意識

予は基督信者となつて二個の著しき實驗をなした。第一の實驗は基督信者となつた其瞬間の時であつた。何であつたかといふと、天地の神が我君主であるといふことを感得したことである。實に予は神に降参して其臣僕となつたので、此時より予を支配するものは神であつて、予は主我主義を去つて主神主義の人となつた。兎も角も主神主義を以て主我主義と戦つたのであつたが、世上の名譽利達はいふまでもなく、宗教界に於ける聖業すら尙予を主我主義に縛するの憂あるを知り、名利の欲、智識の欲、權勢の欲、悉皆之を撲滅するにあらずんば到底主我主義の根據を滅絶すべからずと思惟し、無名、無能、無識の人となるも此主我主義をさへ滅絶すれば足れりといふ考て其境涯に入らんことを務めたのであつたが、天道も亦予をして無名、無能、無識の人とならしめ、獨り神の聖旨のみを悦樂する境遇に至らしめ給ふたのである。此時余は始めて最も聖なるゲッセマネーの主禱を實驗することを得た。其時恰も忽焉として予が心底に發生したるものは則ち神は我父にして我れは其愛子であるといふ意識であつた。爾後二十餘年余が宗教的意識は此神子たるの意識であつて、實に余が宗教思想の源泉となつたのである。余は此二個の實驗と意識とを以て耶蘇キリストの意識を窺ひ見た。是に於て天地の主なる父よと號呼し給ふた耶蘇基督の宗教的意識に限りなきの同情と同感とを獻することが出來て、彷彿の間に基督を見ることを得た



又此意識を以て隣人に向へば同胞兄弟の情は禁せんと欲するとも禁せられないのである。基督が凡て我父の聖旨を行ふものは是れ我兄弟なり姉妹なり母なりといひ給ふた心情も推知せられたのである。

神の子基督

基督には彼れと神と父子有親の意識があつたことは、予は毫も疑ふことが出来ない。彼れには最も高遠幽玄なる智識があつた、父の外に子を識るものなく、子の外に父を識るものなしといふ智識は、圓滿無碍なる父子有親の境涯に生活するものでなくば、決して有することの出来ないものである。圓滿なる父子有親は何によつて得らるべきかといへば情意の清かなる外にはあるまい。此明徹なる智識と此圓滿なる父子有親の境涯とを有する耶蘇基督は眞に一毫の罪なきものであることを信ぜざるを得ない。基督の智識は恰も明鏡に物影の映り、止水に明月の宿るが如きものでなく、日月其ものの光明の如く自明自照の智識であると思はれる。眞實の子たる意識には眞實の父を呼出す靈氣がある。基督には神子の實相があつた、故に天地の神を自分の父と呼び出し給ふたに相違ない。基督の意識に彼れと神と倫理的父子有親の智識があつた其の理由は彼れの性情に形而上的父子有親の關係があ

つたからであらう。基督に倫理的神子の實相ある其故は其性質に於て神と本體を同ふするものがあつたからといふことは疑はれない。基督は神に對しては子たるの情清く温にして其交に一毫の障礙がなく、又人類に對せられたときは、忽ち父母の至情を發して、天地萬有を撫育する所の天父の實相を示し給ふのである。予は基督に於て天父の實相を認識せないてはいられない。是れ彼れが眞に神の實相を有する神子であるからと思はれる。基督には二方面がある、即ち神に對しては人、人に對しては神である。此二方面を有するが即ち眞の神子の實相であると思ふ。

乍然予は更に一步を進めて保羅の如く、基督は天人の化身であると思推することは出来ない、何故なれば予は地人の標本たる天人界の存在を信ずること能はざるからである。又約翰傳の如く基督はロゴスの化身であるといふことは受け取られない、蓋しロゴスといふものが果して人格を以つて現存するや否や、是れ亦吾人が論明することの出来ないところである。保羅の時代は人間は墮落したものと觀想したのだからイエスといふ模範的人格の生出を以て、墮落以前の人に考へ及んだのであらう、神像を有する標本模範の人が上天に現存するとは當時の宗教及哲學界の一般に思惟した所であつたなれども、我々は人間進化の天則を見出した時代に生れたれば、彼の模範的人物は元始に存在せるにあらずして、むしろ

る史上に顯現すべきものだと考へる。故に人類の模範たる活理想が人格となつて史上に顯現し來つたことは決して異様には思はぬのである。基督初代の思想界は神と天地とは殆んど絶對的に隔離したものだと思惟したのであるから、其中間にロゴスの存在を推測したのだけれども、余は神の遍在を信するが故にロゴス論の必要を認めない、又神の遍在の思想が一轉して凡神教と變ずる杞憂をも有たないのである。故にロゴスといふ一種の存在に由らないでも、直に神に親炙することが出来ると思ふから、ロゴス論を持ち出す必要を感じない。況んや化身などいふ議論の如きは到底佛教の所謂權化たるを免かれないのである。若しロゴスの化身が一時に止まらば、人と神との一致は偶然的のもので、決して永久的のものとは考へられない、左らば基督教の拯救も亦偶然的のものであつて、決して永久的のものではない、斯る化身は神が人眞似して人の爲に人の標準を示し給ふたといふ一種の芝居に外ならないのである、從來の化身論は到底調和すべからざる様々の矛盾を呈し來つて難解又難解停止する所を知らざるに至る。

之に反して神は人類の中に現存し給ふて人性の至聖至善なる所は即ち吾人が神と尊崇するものと類を同ふするものと考ふれば、真人は即ち神像ではないか、本來の神とは固より本末の別あるとも、性を同ふし體を同ふするに至ては、即ち一であらう。基督の性格を以て人類の至善と觀すれば、其神たること亦自がら明瞭であらう。吾人はナザレの耶蘇に於て神の衷情を見ることを得たのである。神は天地萬有を以て吾人に語り給ふと雖も、彼れは基督の人格に由て其衷情を示し給ふた。予は基督に由て直に神の衷情を仰き見るとを得る。基督に在る神が天地萬有の主たらば、是に於て天地は始めて無限の恩愛の光明を現はして來る、故に予は基督に由て直に神に接するを得るのである。約翰傳が基督をして、父我れに在り、我れ父に在り、父と我れとは一なりと言はしめ。又ニカヤ信條が神より出た神光より出た光と論斷したが、予も亦基督に付いて此の如く言ふの外言ひあらはすべき言葉を知らないのである。

聖 靈

聖靈はキリスト魂である。基督昇天後は其門弟の間に一種の元氣が感發せられた。是れ即ち彼等の間の社會精神であつた。此元氣は彼等をして萬難を排して奮闘せしめた、唯外界に向つて彼等を驅つて奮闘せしめたばかりでなく、能く其肉情を征服して義の人とならしめたのである。彼等の情感は此元氣に動かされ、利を去つて愛憐の情念と化した、獨り其同教同主義の人々を愛するに止まらないて、仇敵をも愛する所の愛の人とならしめた、又

此元氣は彼等の智識を開き、舊來の謬見を去つて、新識見を發せしむるに至つた。基督教徒は此元氣を名つけて、聖靈といひ、基督の靈といひ、子の靈といひ、真理の靈といひ、神の靈といひ、又單に靈といつたが、是れは彼等の新實驗であつた。保羅の如きは理性の外に又靈性あることを感發したのである。此靈氣は天來の恩賜であつて、去來昇降なきが如く思惟したものであつたなれども、此聖氣たる正しくキリスト教徒徒社會の精神にして、此靈なきものは基督に屬するものにあらずと保羅は斷言した。基督教會をして進化發達止まざらしめ、彼信條を作つては復之を超越して更に新なる信條を作らしめ、此教會を設けて復之を脱離して更に新なる教會を建てしめ人類を靈化して一世紀は一世紀より新に駸々止まざらしむる所の生々の氣は即ち此聖靈である、基督教會の異教團體と異なるもの此聖氣の存するが爲である。此靈たるや人をして天を仰いては子女の父母を愛慕する如くならしめ、恐懼の状態を脱して、神を歡喜する自主の心情を有せしめ、同胞を見ては愛憐の友情を發せしめ、此間人種なく、國家なく、黨派なく、一視同仁の博愛を懷かしめ、個人をも團體をもナザレの耶穌基督と化成せしむるにあらざれば止まない。予は此聖靈を以て基督教會に於ける神の内在を證明せんと欲する、予は此聖靈が我れ的人格を造り、又基督教會の人格を造りつゝあるを知る。此靈の實在を實驗することに由て始めて神の我れ及

基督教會の中に現存し給ふことを認ることを得るのである。故に予は此靈を以て神其もの活動となさざるを得ない。然れども此靈が天に在つて一個のヘルソングであつて、永遠無始より神の一位を占むるものであるといふ如きは、予が實驗外のことでもあり、又推論も及ばざる所である。此の如き一種の神を立てんと欲せば、想像に訴ふる外はないと思ふのである。

#### 基督と聖靈

基督は活ける史上の人格であつて、聖靈は基督教會の最も神聖なる元氣である、此聖靈は基督の人格より迸り出て、流れて世界を靈化する所の活水となつた。故に聖靈は基督魂と思はれる、何んとなれば此靈は基督の凡ての徳性を吾人に與ふるものであつて、基督の聖業をして世界に完成せしむるものである。基督は昇天せられたるも、其靈氣は益大きくなつて世界を征服し、神の國の建設を完成せんとしてをる。神の靈といふ語は基督以前にあつた。古への預言者が感發した所のもは即ち此神の靈であつた。然れども此靈は未だ預言者其もの靈となつて、彼等の人格を成したるものではなかつた、此靈は去來常なきものであつた、又此靈は預言者をして神を天父と號呼せしめなかつた。従つて萬人を一視同

仁する所の博愛の靈ではなかつた。然るに基督の靈は神を仰いでは父と呼ばしめ、萬人を見ては一視同仁の至情を發せしむる、否萬人の爲には犠牲となるを歡諾せしむるものである。しかして其靈は基督の人格を完成したものであつて、基督の聖魂といふより外はない。爾來此靈は其人類の中に於ける猶ナザレの耶蘇に於けるが如くならんことを期するのである。かく聖靈は基督の人格をなして基督と聖靈とはもと一體である、基督が葡萄樹にして吾人が其枝たるを得るは、正しく此聖靈が吾人の人格を完成するからであらう。

### 三位一體

前陳の如くなれば天地萬有を創造して主宰する所の大能の神は、ナザレの耶蘇基督に在て恩愛限なき天父たるを啓示し、罪惡なる人類を愛撫養育して無窮に到ることを證明し、又聖靈は基督の精神を人類に賦與し、其愛と光と生とを發揮して、人類をして基督の像に靈化せしめ、基督の聖業を完成するのである。之を別言すれば、吾人が親愛なる天父として愛慕する神の恩愛にあづかることを得るは、則ち耶蘇基督に由つて其恩恵が啓示せられ、又聖靈の交際を辱ふし得るを以ての故である。吾人は史上の耶蘇基督と基督教會を靈化する所の聖靈とに於いて宇宙萬有に顯現する同一の神の顯現を認識するのである。獨一の眞

神は天地創造と人類救済と靈化との三種の顯現を以て吾人に抄合し給ふ。此三種の顯現は決して相矛盾することなく、互に相補充し相完成するのである。創造は救済の準備であり、救済は創造の完成であり、然かして又靈化は救済の貫徹にして天地創造の大進化である。大能と博愛と光明、此三種顯現の一致即ち萬有史上三期の一貫は、取りも直さず同一の神の三顯現一體なるのであつて、吾人の宗教的意識より取り去ること能はざるものである。此三種顯現あるは本來神の本體其ものに三種動機あらんとは哲學上の推測であつて、吾人が宗教的意識には必要を認めない所である。又一步を進めて此三種動機を三種の人格と思惟するが如きは、詩歌的想像に外ならないので、吾人の取らざる所である。

### 三位一體の教義と基督信徒の價値

三位一體の教義は神に父と子と聖靈との三身あるを論定さへすれば其れにて能事されるものであるかといふと、決して然らずと思ふ。三位一體論の大家であつたクレメント、オリゲナス、アサチシアスの如きは、人が神と一體たるの眞義を證明せんが爲に三位一體論を確定せんと苦心したのに相違ない。其神の第二位を占むる子なる神が人と成りたるは人をして神に成さんが爲であるといふたのではないか、是れ實に三位一體の教義の秘奥である。

と思ふ。クレメント、オリゲネス、アサネシアス、等の宗教的意識を察するに、其性情に明々白々の神性あるを認め、彼等は既に神と一體たるを意識して居つたのである、神人合一の意識を有して居つたのである、そして此神聖にして幽玄なる意識を哲理的に説明せんが爲に三位一體論を主張したのである、故にアサネシアス勝つてアリウス敗れ、三位一體の教義が基督教會の標準信條となつたのは、實に基督信徒が神人合一の意識を證明確定したものだといはねばならぬ。基督教は神人合一の眞義を實現する所の宗教である。

前段に述べたる如く天地の主なる神を父とするの意識は、普く凡てのキリスト信者を通じての意識であると思ふ、此意識は即ち耶蘇基督の意識に外ならないのであらう、其父の外に子を識るものなく、子及び子の顯はす所のもの、外に父を識るものなしといひ給ふた基督の言は則ち之を證する所のものである。此意識に於て吾人は基督と一體である。保羅はキリストの靈なき者はキリストに屬せずといつた、しかしして此靈は恐怖心を懷く奴僕の靈でなく、神をキリストの如くアバ父と呼ぶ子たる者の靈であると保羅は説明したのである、彼れがキリストを以て吾人の長兄といつたのは實に神子たるの意識を同ふするからであるとは疑いないのである。約翰傳はロゴス哲學を紹介し、キリストを以てゴロスの化身といひ、又ロゴスは即ち神なりと斷言したが、此キリストの生命は即ち吾人が亦受けらるべき、

亦うくべきものといつた、キリストの平安も喜悅も、智識も愛も榮光も皆吾人の所有とせらるゝものと主張した、ロゴスと基督信者とは一體たることを確言した。其の約翰傳を著したるも吾人が神子たるの意識が如何ばかり尊榮なるかを證明せんが爲めであつたらう。然らばナザレの耶蘇を第二のアダムとするも、ロゴスとするも、結局キリスト及吾人の意識に存する神的内容を解釋せんが爲に外ならなかつたであらう。

#### 禮拜 祈禱

左らば如何に禮拜し、如何に祈禱すべきかは自から判るであらう。吾人既に基督の意識を授けられた以上は基督の如く禮拜すべく祈禱すべきであるは論を待たない。キリストは誰れに祈禱し又何と呼び給ふたかといふと、天地の主に祈禱し給ふた、我父と號呼し給ふた。其の祈禱の眞義を一言にて盡せば、父よ我心にあらざ聖旨に任せ給へといふのである。實に吾人の祈禱は此聖なる祈禱の外に出づべからず、キリストが吾人に教示し給ふた其祈禱之れに外ならないのである。保羅は聖靈いふべからざる歎きを以て我等の爲に祈るといつたが、誰れに向つて祈るのであるか、天父に祈るの外ではあるまい。聖靈の感化を蒙り、キリストの意識を有するもの、亦キリストと偕にキリストの如く祈らずしては居られない。

聖靈を以て基督の名に由て祈るは即ち吾人の祈である。基督教初代の教父チヨスチン等は、ロゴスにも天使にも禮拜祈禱を捧げたいといひ、又天主教徒に至つては之れに加ふるに聖母マリヤと聖人とに禮拜を捧ぐるのであるが、吾人がキリストに由つて授けられた意識はキリストと偕に天父に祈禱するより外は出来ないのである。彼のキリストに禮拜と祈禱とを捧ぐるが如きは果してキリストの靈を有するものゝ行爲なりや疑ひなきことをえない。

結 尾

基督の靈を有する信者は基督に倣はざるを得ない、基督の意識を有する教徒は基督の言行を旨とせざるをえない。基督の宗教あり、基督を宗として建立したる宗教あり、基督信者は後者を脱し去つて前者を服膺すべきであらう。保羅以來の大家は吾人之を尊敬す、其言行倣ふべきもの甚だ多い。乍去彼等も亦時代の子であつて、萬世の師たることは出来ない。保羅もクレメントも、オィゴスチンも、ルーテルも、萬古に卓絶する人傑であるけれども、等しくキリストを宗とするものである。吾人はルーテル信者にあらず、オィゴスチン信者にもあらず、又クレメントと保羅の信者にもあらず、乃ち耶蘇の信者である、吾人身命を獻けて隨從せんと誓ひたるは耶蘇基督である、吾人も亦時代の子にして時代思想を以て我宗

教的意識を解するの外に爲すべき道あらずと雖ども、吾人の意識其ものは基督の意識たらざるべからず、吾人の靈其ものは基督の靈たらざるべからず、基督の靈なるかな、基督の意識なるかな。予天國の末席を辱しむるの榮を得、予が宗教的意識を解釋するに當つて不肖を顧みず敢て三位一體の教義に論及したるもの此の如くである、教友の高評を蒙り、更に予が蒙を啓くことを得ば幸甚。

左の一篇は海老名氏講義「約翰傳」中の一節を抜粹せしもの

### 附言　　ロゴス論の一斑

約翰傳第一章一より十八に至る總論は著者の宗教哲學である。此の宗教哲學を骨子として著者は基督傳記を著述したのである。此宗教哲學は則ちロゴス論に基因するものであつて、當時此哲學に通曉するもの甚だ多かつたと見える。著者はロゴスにつきて何の説明をも致さず、劈頭に元始にロゴスありといひ出した。日本の基督信者の如くロゴス論の何たるを識らない人々に向つて元始にロゴスありと絶叫した所が誰れも耳を傾くることはあるまい。此語たるや舊約聖書に多くあるでもないから、基督の十二門徒の如きは、此言を聞い

て其何の意味なるやを能く解することは出来なかつたのであらう。故に著者自からは申すまでもないが、之を讀む所の者も一通はロゴス論に通じて居らなくてはならない。著者は此ロゴスとナザレの耶蘇とを結び付け、耶蘇を以てロゴスの顯現と致したのであるから、ロゴス論の出處に付いて一通陳述して置くことも必要であると思ふ。

舊約聖書にロゴス論に關係を有すべき所がある。之れなくては突然こゝに此論を紹介する譯にはいかぬ。創世紀第一章一節第三節はロゴス論に多少關係ないではない、神が光あれと言ひ給へは光ありとある言は則ちロゴスであるといふ人もあれど、此處にては動詞であるから名詞と同一視する譯にはいかぬ。けれども詩篇三三ノ六、同一四七ノ十八の如きは動詞一轉して名詞となつて居る。斯く神の言葉は神の一種の力と見做され、恰も一個の存在者かのやうに思惟せらるゝに至つた。然るに此言葉と神の智慧とは同一視せられ、後者は神と偕に天地創造の事業にあづかることと思はれた。箴言八の二二より九の一〇までを参照すれば神の智慧が如何に神の悦樂し給ふ所であつて、天地以前に其存在を有して居つたことと明言してある。

基督以前一二百年の間に著述せられた名著は決して少くない、聖書中には加へてないが中々貴重すべきもので、其聖書に加へてないことが怪しく思はれる程である。是等の著書中

耶蘇西羅の智慧と題する書の如きは箴言にも劣らないやうに思はれるが、此書中の智慧は神と偕に存在する所の勢力で、神の創造の始めて、其住所は其撰民の中にある。更に一步を進めて此智慧は人格視せらるゝに至つた。歴山府在住の猶太人はギリシヤ文章を貴重して其思想に感染した所少々てなかつた。彼等は舊約書をギリシヤ語に翻譯したのであつたが、此譯本は七十人譯と申てギリシヤ語を使用する猶太人に愛讀せられた。之を譯するにギリシヤ人の解し得るやうに試みたから、或部は哲學上の熟字を使用し、神につける人形的形容を餘程取り除いてあるといふ。ギリシヤ思想の影響を受けて猶太人の思想も大に變更いたした。其祖先より受けて來た活ける神の確信は決して動かあかつたけれども、其説明の仕方は實にギリシヤ的となつた。

ギリシヤの偶像教と猶太の一神教とは其懸隔甚しかつたなれども、猶太の一神教とギリシヤ哲學とは甚だ類似して居つた所があつた。プラトンの哲學によれば神は絶對にして人の知り得べきものではない、物質は最下等であつた罪惡の根本である、神と物質とは二極端であつて、互に相接することの出来ないのである。此中間に多くの階級を造る活觀念がある。猶太教によれば無上の神より以下天使の階級があつて物世界がある。ギリシヤ哲學の一派で、ストイックといふ學派の主張する所によれば、天の精神であるロゴス即ち道とい

ふものがある。道に二義がある、一は思想、一は言語、言語は思想の顯現である。此道即ちロゴスは天地の理性である、否唯理法であるばかりでなく、活ける理的勢力である。凡ての天使や人間の如きはロゴス即ち道の分身であると主張せられた。此ロゴス論と猶太の一神教とを比較すれば、前者は内在の神を主張し、後者は外在の神を主張するのではあるけれども、結局は一神教である。然うして猶太教の主張する天使の如きはストイク學派の主張する多数の小ロゴスに似て居るのである。

此二哲學と猶太教と混和するに當つて始めて猶太人のロゴス論が生れたのである。此新ロゴス論の開祖といふべきは則ちフィローといふ猶太人で、基督と同時代の學者である。彼れは基督より早く生れて、基督より後れて死した所の歴山府猶太人である。此人の論ずる所によれば、神は絶對であつて、名状すべきものではない。人は神の存在其もの、みを知り得るばかりであつて、其餘は識ることの出来ない。此神より始めて生れて來るものを道即ちロゴスといふ。此ロゴスは未だ見るべき形あるものではない、一の思想に外ならないのであるから、理性とも理想ともいはれるのである。此ロゴスは神の長子である、否神の獨子である。之を人事に比すれば人の思想である。さて此ロゴスは此有形の天地を生み出すのであるから、天地萬有はロゴスの子であつて、神の孫といつてもよからう。人

事に比すれば此天地萬有は即ち言語である。語を換へていへばロゴスは天地の原型であつて、神の肖像である。さて人に至つてはロゴスの肖像であるから、ロゴスの媒介を受けて其原型を仰慕する向上心を有するのである。

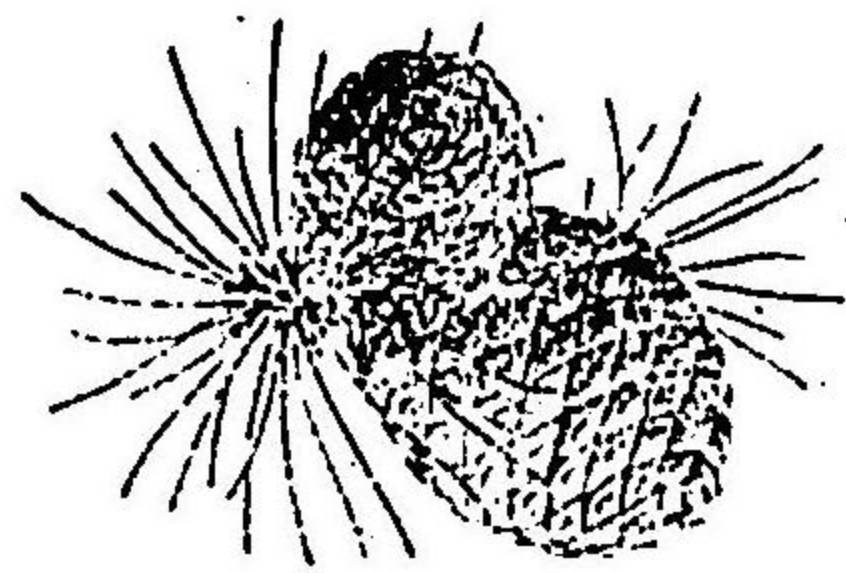
此ロゴス論は歴山地方は言ふまでもなく、小亞細亞地方にも廣く行はれて居つたのであつたから、約翰傳の著者は此ロゴス哲學を以て基督信者の宗教的新意識を説明せんと試みたのである。フィローのロゴス教とヨハネ傳との關係を猶細に對照して見れば更に亦驚くべきものあるを見出すであらう。(一)約翰一の三、四、九によればロゴスは萬物をいかし、分けて人類に光を與ふるもので、其種子は創世紀一の一、二、三に包含せらるゝのであるが、之れと相對照すべきものがフィローの書にもある。(二)フィローのロゴスは物質に干狀萬態の形式を與へて、天地を造作する勢力であるが、約翰一の三と相照すべきものである。(三)本來神とのみ存在を備にした所のロゴスが世界創造の事業を始め來つた所の(約翰一の二、三)の思想はフィローの所謂神の中に理想として存するロゴスと現實の天地と成つたロゴスとの區別あるものに比すべきものがある。(四)フィローのロゴスには二義ある、一は思想、一は言葉、此思想と言葉とは本來一であつて、又二に別たる。約翰のロゴスも萬有遍在の神力の如く、又神と成るべき一種の實在者の如く、二様の方面を有するやうであ



る。(五)約翰一の一にロゴスは即ち神なりとある神には定冠詞がない、フィローがロゴスを神といふた所にも定冠詞が省かれてある。約翰一の十八によればロゴスは父より生れたもので、父に劣ることは明白である。(約翰十四の六)フィローも父はロゴスより大なりといつた。(六)約翰一の三、十に此に由つてとあるを見れば、ロゴスは天地創造の媒介原因である、フィローも其の如くいふ。(七)子と生命と保羅師とを結付る所(約翰一の四、同十四の十六)フィローと同様である。(八)ロゴスに於て神の榮の輝き渡れるを觀すること(約翰一の十四)も亦フィローの言葉である。(九)ヤコブの楷子を以てロゴスに比するが如き(約翰一の五一)、(十)ロゴスを以て神顯の實體とするが如き(約翰十二の四一)、(十一)子は父に倣ひ父の指揮を受けて萬物を爲すといふが如き(約翰五の一九、二〇)、(十二)ロゴスが靈魂を生育するの譬喩の如き(同上六の三一至三三、同四九至五一)、ロゴスが義者の心裡にやどるといふが如き(同上十四の二三)、(十三)靈が罪人を懲罰し罪人を承服せしむる所の働きを(約翰十六の八至十三)即ちフィローが之をロゴスに歸した所の如き、獨り言葉及譬喩に於て約翰傳とフィローと相類似して居るばかりでなく、其世界觀に於ても亦大に相類似した所がある。

ロゴス論は天下を風靡しつゝあつた輿論であつたから、基督教徒も亦同じく此思風に吹かれたことは明白である。フィローは猶太人であつたけれども、其思想はギリシヤ人であつた當時は人種や思想の混和の時代で、基督教徒は其卒先者であつたから、フィロー思想が基督教徒の中に流行したのは亦自然の勢であつた。乍去約翰は何も彼もフィローに盲従はしなかつた。彼等はフィローを土著として別に一大見地を開いたのである。約翰のロゴスは創世紀の一、二、三に對照して言葉といふ方面を表とし、其理想の方面を裏としたものである。又フィローのロゴスは人類一般の上に翻々として普く遍在するものであつたが、約翰のロゴスは史上の一個人にやどり來つたのである。後者のロゴスは眞に人となつて、人類救済の大業を奏するものとなつた。約翰は三福音書の内容を本とし、保羅の神學を參照し、之れに加ふるにギリシヤ哲學の思想を咀嚼して一大見地を開いたのであれば、當時之れに優る大思想はなかつたであらう。フィロー哲學思想は深遠ではあつたけれども、之を實現する人格がなかつた。三福音のキリストは空前絶後の人格ではあつたけれども、之を世界に紹介するには深遠なる哲學を要するのであつた。猶太の王と尊崇せられた耶蘇は、保羅に由つて人類の標準模範であると主張せられた。そこで耶蘇は始めて人類の尊崇すべきものたることを證明せられた。約翰は更に一步を進めて基督を以て神の獨子、天地を創造したロゴスであると主張した。ユダヤの王メシヤはユダヤ民族を統一する人格、人類の

表準である基督は世界の萬國を統一する人格、そしてロゴスは即ち天地を統一する大能である。新約聖書中の基督論は民族的より一變して人類的となり、人類的より更に一變して宇宙的となり、即ちナザレのイエスとロゴスとを結び付けたる約翰傳のロゴス論に至つて、其發達の絶頂を極めたのである。



### 海老名彈正氏の告白を紹介す

福音新報社説

新人記者はついに基督に付きて其の信ずるところと其の持論なるべく思はるゝ三位一體説とを表明せられたり。此の告白を獲んが爲めに聊か苦心せる余輩は言ふまでもなく、多數の人を満足せしめたるべきを疑はず。海老名氏の立脚地從來に比ぶれば、多くの點に於て明かなり。或ひは今更の如くに驚くものもあらん。或ひは余輩の如く案の條是の如くなりと合點する向も少からざるべし。何れにせよ信仰の異主義を對照するの便宜を與へられたるは、余輩の喜ぶところなり。海老名氏の勞また多とするに足れり。余輩は福音新報讀者のために海老名氏が告白の大意を紹介すべし。之に對する批評の如きは、前日豫告し置ける基督論を草するに當りて自から分明ならんとを期す。今は僅かに二三の備考を附記するを以て満足すべし。

#### 海老名氏の教理史論

新人記者は第一に所謂化身論（讀者は余輩が此語に不満足なるを記憶せらるゝならん）三位一體説等の史的由來を説き、其の進化的順序を叙べんと企てたり。其の希望は以て此等諸説の全く時代的にして、永久の眞理に非るを證せんと欲するに在り。其の大意に曰く、

ユダヤ人の神は超自然的なり。此を以て神と天地との間に立ちて之を結び付くるロゴスなるもの無かる可らずと思考するに至れり。而して當時の基督信者ナザレの耶蘇基督に由りて至善の神と和合せりとの意識を抱くに際し、此の結合の媒介たるものはロゴス其のものならざる可らずと推測するに至れり。然れども此のロゴスにして受造物たらしめば、彼らは未だ永遠の神と一致和合せるものと見做さるべからず。此に於てロゴスなる基督を神と崇めざれば、其の宗教的意識を満足すること能はざりき。斯くてピタゴラスの靈魂輪回説其他プラトンの思想などの行はれ居たる當時の基督信徒は容易にロゴス化身論を主張することとなりしなり。ロゴス論已に勝利を得たる以上、聖靈は『造作もなく』之に次ぎて神の第三位を占め得たり。

是れ海老名氏が所説の大意なり。余輩は公平に適切に之を叙述せりと信ず。ハルナック、ヴァイス等の人々は新約聖書否な第四福音書すらもアレキサンデリヤのロゴス哲學に感染したる痕跡を見出さずと論じ居れり。フライデルの如きは新人記者と同一の意見なりしと記憶す。初代基督信徒の信仰が當時のロゴス説に由来すと做すは一個の臆断に過ぎず。使徒等を首め當時の基督信徒に實際疾くより或ひは意識的に或ひは無意識的に基督に神事し、之に祈り、之に禮拜し居たるが、漸く自家の信仰を説明せんと試み若くは之を廣く宣

傳せんとするに當り、世に行はる、ロゴス説を利用せしこと、宛かも余輩が儒教の天てふ語を一種の更に高尚なる意味に於て使用せるが如き有様なりしと思はる。海老名氏の想像する如く當時の基督信徒は思辨的に研究して、神と人とを結び付くる基督を先づロゴスとし、次ぎに之を以て神其ものとし終に化身説を案出せりとは何分にも余輩の合點し難きところなり。無乃先づ基督に祈り且つ神事したるよりロゴス論も化身説も其の自然の結果として發生し來れるに非ずや。冷靜に新約聖書を讀みて之を當時の事情に徴すれば、余輩の言必ずしも理なしと云ふ可らず。兎に角新人記者がフィロウのロゴス説其の他三位一體論の世に有り舊れたるを喋々せらるゝを讀みて余輩は人類の祖先を畜類に求めて其の宗教道徳を蔑視せんとする或る進化論者の迷妄を聯想せざるを得ず。海老名氏が其の弟子たるを以て榮とすと言はれたるヘゲルの言も思ひ出でらるゝなり。曰く、事物の出所は何れにても可なり。要は其の眞偽如何んと問ふに在るのみ。或る教理が新プラト的哲學に由来するを以て之を基督教外に驅逐し得たりと爲す人あり。此は大なる誤謬なるべしと。

#### 耶蘇及び使徒等の教訓如何ん

新人記者曰く耶蘇は唯だメサイヤたることを公言せられしのみ。メシヤとはユダヤの王を意味するのみ。其の再來を待ち望める十二使徒も然か信じたるに過ぎず。パウロは一步を進

め、ナザレの耶蘇を以て上天の標準的人格の化身と認められたれど、未だ曾て之を神と稱せざりしなりと。

噫談何ぞ輕々しきや。其の所謂天上の標準的人格の化身云々、此はバイシラフか加林多前書第十五章に第二の人は天より出てたる主なりとあるを牽強して唱へし説と同じく、其の基礎は極めて薄弱なりと謂はざるべからず。ヒイデルマン、フライデル等は之に同意すれども、ツァイス、ロイス、及びドゥルネル等多數の學者は、此の一節に據りて上天の標準的人格説かパウロの思想なりしと推測するを非難せり。パウロは其の書翰に於て神格を認めたりと見做さる可らざる多くの語を記せり。コリビ書第二章の如き其の最も著るき一つとす。約翰をはじめ當時の基督信徒が基督を禮拜し、之に神事し、之に祈りを爲せるは、紛れもなき事實なり。基督が文字的に自ら神なりと公言せられしことなきを喋々するは文を以て意を害するものなり。形式に泥みて精神を忘却せりと云はざるべからず。基督の言を適當に解釋すれば、之を神と見る外なきもの甚だ多し。彼は自ら人類信仰の目的なりと斷言して憚からず。人類に向ひて絶對の服従と此上もなき敬愛とを要求せり。彼は世界の審判者なりと稱し、二三人集れるところには我も共に在んとて其の遍在を宣言し、凡そ人に向つて爲すところのものは我に向つて爲せることなりと説かれたり。加ふるに耶蘇

の意識を知らんと欲せば唯だ其の片言隻語にのみ之を求むべからず。宜しく其の行爲をも研究すべきなり。主耶蘇の言説に耳を傾ふけ、其の爲すところを視、其の感化に觸れ、其の統治の下に生活するときは、我は神なりてふ一言を聽くに優りて明白なる證言を其の神格につきて發見するを得べし。當時の信徒のみに非ず、世々の基督信徒の實驗するところ斯の如し。其の神格につきて基督自身の教訓及び使徒等の所説は近きに掲載すべき基督論に於て之を細説すべし。

#### 海老名氏の研究及び其の結果

余輩は海老名氏か三位一體の教義につき、苦心慘憺研究歲月を累ねられしを讀みて、同情の念禁すべからざるを覺ゆ。其の志の篤き敬服すべきなり。氏は第一に神の君主たることを發見し、次に『最も聖なるゲッセマネーの主禱を實驗することを得』忽焉として神は我父にして我は其の愛子なりとの意識に到達せり。此の經驗に由り天地の主なる父を號呼せる耶蘇基督の宗敎的意識に同情と同感とを献ずるに至り、また彷彿の間に基督を見ることを得たりと云ふ。而して其の發見せる基督は如何なるものなるや。

曰く基督は自己と神との間に父子有親の意識極めて鮮明にてありき。基督は神子たるの實相を具へたり。彼と神との間には斯の如く倫理的に父子有親の關係成立せり。其の然るを

得しは、彼の性情に形而上的父子有親の關係ありしに基あす。基督は性情に於て神と本體を同ふせり。故に神に對しては人、人に對しては神なりと云はざる可らず。神と本體を同ふすと云ひ、形而上的父子有親の關係ありと唱へ、或ひは人に對しては神なりと説くの意義果して如何ん。余輩は此の點に於て新人記者が思想の脈絡不明了にして、前後の照應甚だ漠然たるを憾みとす。然れども眞に耶蘇基督を神とするの意に非るや明かなり。余輩左に掲ぐる海老名氏の言之を證して餘りありと信ず。曰く、

化身は（此の一段パウロの所説なりて天人の事につきて言ひしものなれど、余輩が此に之を使用せる方法當然なること疑ふべからず）神が人眞似をする芝居に外ならずと。基督をして眞に神ならしめんか。彼は二千年前世に生存せし歴史的の人物にして血もあり、肉もありしもの故、人となりし神と見做すの外之を考ふるの途有る可らず。然れども新人記者は其の所謂化身あるものを信せざるなり。又語を續けて曰く、

神は人類のうちに現存す。人性の至聖至善なる所は神と類を同うするものなれば、眞人は神と性を同ふし體を共にして、取りも直さず同一なりと云はざる可らず。此を以ての故に人類至善の性格を有せる基督もまた神なりと云はざるを得ずと。斯く見來れば基督が神と一體たりと見做さるゝ如く、吾人も正義なるだけに於て神を同一なり、否な直ちに神なり

と做すを得べし。海老名氏が基督の神性を信せらるゝてふ意義此に於て一層明白なり。其の萬有神教的信念また掩ふべからず。基督につきて余輩の取り得べき立脚點蓋し次の四つあるのみ。（一）基督の祝福を讚美し、其の人格につきては一切思想せざること。（二）基督を以て單に一個の人類と見做すに満足す。（三）基督の神性を認むと稱して、其の實神と人とを全く同一なるものと做す。（四）神實に人となりしてふ福音の眞義を奉ずる等の四種類即ち此れなり。而して海老名氏の基督論は其の第三種に屬す。其の弊や萬有神教に陥り、識らず／＼罪を無視して、佛教的の信念を抱くものとなる。歴史の教訓差ふことなし。般鑑近きに在りと謂はざるべからず。

余輩は新人記者の立場を明白ならしめんがために更に一事の記憶すべきものあるを覺ゆ。曰く、

吾人は基督と俱に天父にこそ祈るべけれ。彼の基督に祈りと禮拜とを捧ぐるが如きは、基督の靈を有するものゝ行爲なりや疑ひなき能はずと。海老名氏は基督を禮拜するを以て天主教徒の聖母マリアと諸聖徒を禮拜すると同視せらるゝものゝ如し。此れ古來基督教徒の珍重せる多くの讚美歌を唱ふるに當りて巫者となるの信仰なり。疑ひもなく、基督教徒の普通意識に交はりを絶つなり。海老名氏が基督現在の地位につきて如何なる信念を有せらる

るを知らず。彼は實に今日も尙ほ其の徒と共に在りて、之と休戚を同うし、之を照し、之を慰撫し、之と親しく交通しつゝありや。余輩が確實なる信仰を以て『吾がたましひを愛する耶蘇よ』（新撰讚美歌第百五十）を謳ひ得るほどに基督は遍在なりや。之に對し、明白なる答へを與ふること能はず、漠然基督の神性を呼號するものあらば、余輩は其の萬有神教の徒ならんを恐る。

基督は智慧なるのみならず、贖ひなり救ひなり

新人記者は基督に由りて光明の與へらるゝ、即ち神の性質を教へらるゝを喜ぶ。余輩此の喜び益深からんことを祈る。然れども其の告白を熟讀するに罪惡に關する觀念情緒餘り著明ならず。罪の救ひを基督に見出せるを感謝するの信仰を示せるものあるを見ず。贖ひは新人記者が思想の背後に隠れしに非るか。海老名氏の罪惡觀如何ん。其の救拯の意義如何ん。其の救ひは佛道の見性成佛に比して抑も何等の相違ありや。此の問題に答へ得ば、新人記者が宗教思想の秘密悉く暴露せらるゝを見ん。救拯の門より入れば、ユニテリアンの迷霧朝日に照さるゝ如く消えて跡無からんとす。シウルツ言はずや贖ひの事業は基督の完全なる神格を要す。

基督教と基督教徒

海老名正氏は宗教的人なり、二十有餘年一日の如く基督教の傳道に従事せらる。其の靈的なるや所謂多くの正統的基督教者の右に出づべし。余輩は海老名氏の信仰其の教理よりも善良ならんを望む。否亦然く信ずるの理由なきに非るを感謝す。然れども凡ての人は海老名氏の如く思想して海老名氏の如く靈的なること能はざるなり。斯の如きは非論理的の僥倖のみ。ユウルツの卓上談話に曰く、ユニテリアン説は基督教に非ず。然れどもユニテリアン徒にして基督教者たるもの少なきに非るべしと。

### 福音新報の紹介文を讀む

新人社説

福音新報記者は、該誌三百四十一號の紙上に於て、海老名氏の三位一體論を紹介すと題する、一篇の文章を載せられたり、吾人辱くうけて之を讀み去り讀み來れば、是れ其公言せらるゝ公平なる紹介にあらずして、むしろ一種の偏見を以てせる一箇の批評文なるを發見す。しかして其紹介せられし所、間々原文の意を誤り傳へ、時に或は全く正反對に出つることあり。吾人甚だ迷惑を感ぜざるをえず。今其誤解の點について、又記者が雜作なく加へ

られし短評について、記者の意の到らざる所を明にせんとす。

### 記者の史的智識

記者は、ハルナツク、グイス等の碩學も、第四福音書は毫も歴山府哲學に感染せし痕跡を見出さずと、論斷したるかの如く言はる。無論グイスの如き保守的神學者は、記者の言の如しと雖も、ハルナツクの如きは決して然らず、彼は之を一箇の疑問として殘せるなり。(Zeitschrift für Theologie und Kirche vol. II. S. 189, Harnack: Dogmengeschichte B. I. S. 93) 而して新人記者と同意見なるは、フライデレルの如きありといひて、單に一人をのみあげられたれども、此意見を有する著名の學者は決して一人にあらず。グイスツエツクル、ホルツマンの如き、マーティノー、デヒツドソンの如きは、皆フイローのロコス哲學の第四福音書の上に於る影響を認むる者なり。記者はいふ、初代基督教徒の信仰が、當時のロコス哲學に由來すとなすは、一箇の臆斷に過ぎずと。記者は何の意を以て此言をなせるや。基督教徒の信仰が、ロコス説に由來すとは、誰あつてか之を信せん、クリスチャンの信仰はキリストを信するにあり、其のフイロー哲學を信するより起りしにあらざるや、固より明けし。されど記者の所謂初代クリスチャンの信仰てふ意をして、基督教徒信仰の

教義を意味せしめば、それが當時のフイロー哲學に由來すといふも、決して臆斷といふべからず。希伯來書の如き、約翰傳の如き、其他パウロの書翰として殘るものの中に、歴山府哲學の影響の痕跡あるや、誰が眼にも歴々として疑ふべからざるなり。たとひ記者自らがグイス等の説に加擔すとすも、グアイヌツエツクル、ホルツマン、カイク等の説を單なる臆斷に過ぎずとして、一言の下に排し去る如きは、其臆斷も亦甚しといふべし。

### 誤れる紹介

記者曰く、海老名氏のいはる、如く、當時の基督教徒は、思辯的に研究して、神と人とを結びつくるキリストを先づロコスとし、次に之を以て神其物となし、終に化身論を案出せりとは、何分にも予輩の合點しがたき所なりと。これは誤れる紹介なり。予は三位一體論發達の節に於て、ゴロス哲學は基督教徒のキリストに於ける宗教的意識を説明せん爲に、採用せしものにて、之を採用する前、意識其物の内容は、已に業に發達し居たりといへり。故に三位一體論あつて基督教徒ありしにあらず、基督教徒あつて此教義成りしものなるを論辯したり。又ロコス論と基督教徒の意識との關係を論じたる節に於て、予は左の如くいへり、基督教徒が其神と一致和合せし宗教意識を説明するには、當時の哲學思潮の勢、イエスを以

てロゴス其の物の顯現と斷言すの外なかりしならん。これを以て見れば、新報記者が、「使徒等を首め當時の基督信徒は實際疾くより或は意識的に或は無意識的に基督に神事し、之に祈り、之に禮拜し居たるが、漸く自家の信仰を説明せんと試み若くは之を廣く宣傳せんとするに當り、世に行はる、ロゴス説を利用せしこと、宛も予輩が儒教の天てふ語を一種の更に高尚なる意味にて使用するが如き有様なりしと思はる」といひしは、正に吾人の意なるを、記者は吾人の説を別に造りかへ、之を攻撃するに、吾人の意見其物を以てせり。予に取つて豈に意外にあらざとせんや。

そも吾人が古代の三位一體論について喋々の辯を費やしたるは、之を輕蔑し去らんとにあらず、むしろ其歴史的價值及功績を承認すると共に、基督教徒の宗教的意識と思想とが、更らに漸々發達し來つて、キリスト意識に達せんとしつゝあることを、自覺し又希望するが故なり。しかるに新報記者は吾人を撃つに、人類の祖先を畜類に求めて、其宗教道德を蔑視せんとする、或る進化論の迷妄を聯想せざるをえず、とは何の言ぞや又ヘエゲルの語などを引き來つて、予が論議には更らに無關係なる言を弄せられしは、其何の意たるを知らず。

#### 使徒等の基督論

予が、パウロはナザレのイエスを以て、上天の標準的人格の化身と認めたり、と論斷したるに對し、新報記者は、ア、談何ぞ容易なるといはれぬ。しかして此議論たる、パイシユラハが、哥前書第十五章に、第二の人は天より出でたる主なりとあるを、牽強して唱へし説と同じく、其論據極めて薄弱なりと斷ぜられたり。記者は之れに對して、何故に其基礎の薄弱なるかを論ぜざるべからず、之を是れ爲さずして、たゞ薄弱なりとの一言もて鐵案を下されしこそ、極めて薄弱なる駁論にあらざるか。吾人は強ちにパイシユラハの説に倚賴するものにあらず、吾人は吾人の論據の動かすべからざるものあるを認めて、しかいふなり。今之を論ぜんとするに、紙面の許さざるものあるをもて、後日パウロの基督觀と題して、更らに詳論するところあらん。

新報記者は、又々之に對し、ワイス、ドルチル等、多數の反對者あることを、提供せられぬ。眞理は多數決に由つて、決せらるべきものにあらず、假令一人たりとも、其論ずる所眞理たらば、乃ちこれ眞理なり、吾人は必ずしも同意者の多數を以て喜とせざるなり。たゞ茲に念の爲め、吾人に先つて吾人と同一の議論をなし、人々が、僅にヒードルマン、フライデレル等に限らざることを辯じおかん。ワイスツアツケル、ホルツマンの如きは、新



約聖書學者として、ワイス、マルチルの上に出づるも、決して之れに劣らざるもの、而して此二人も亦フライデル等と、説を同うす。しかるを新報記者は、其議論の基礎極めて薄弱なりとか、或は牽強附會に過ぎずとか、臆面もなく論ぜらるゝは、少しく盲者蛇にもぢざるの大胆に類するなきか。

又新報記者はパウロがキリストの神たるを認めし、最も著しき證據の一として、腓立書第二章を擧げらるゝピリピ書が果してパウロの手に成るや否やは、大家の疑を容れし所、よし之れをパウロ書とするも、吾人の標準として掲げられたるキリストは、決して第二位の神を指すものにあらず、これ即ち標準的人格をいへるなり。さればこそ其爲すところ吾人の標準たるをうるなれ。第一のアダムは神たらんとして罪惡の人となりぬ、第二の人は神たらんと欲するの野心を抱かず、むしろ謙つて十字架の死をなめぬ、これに由つて彼が諸の名にまさる名を神より享けたり、としるさる。

記者又曰く、キリストが文字的に、自ら神なりと公言せられしことなきを喋々するは、之を以て意を害するものなり、形式に泥みて精神を没却せるものなりと。言固に然り。單に此一事を以て、其神にあらざるの證明とするは、固より満足の議論にあらず。記者等の議論常に聖書記載の文句を楯に取るが故に、吾人亦これを以て槍矢となすのみ。しかり而して、

キリスト御自身が自らを神と呼び給はざりしのみならず、其十二弟子等も一回として神の名を之に加へしことなし。又パウロの如き、崇めらるべき最も尊き名を、キリストに附したるに拘らず、なほ呼ぶに神を以てせざりき。又キリストの言動を見るも、決して其信徒をして自己を禮拜せしめ給ひしことなく、却つて人々を導いて天父に到らしめ給ひしなり。

新報記者は、二三人の集まれる所には吾れも俱にあらん、とのキリストの言を引き來つて、其遍在の證となさんとす。片言隻語にのみ其證據を求むとは、正に斯の如きをいふべきにあらずや。イエスは此世を去り給ふに當つて、弟子にあらざる後の事を托し給ひしにあらざるか。我れ再び來らんと言はれしにあらざるか。其去るといひ其來るといふ、如何でか遍在を證せん。二三人の集まる處には、吾れもまたあらんとは、パウロも能くいふを得し所。(前第五章四、五)又注意せよ、キリストは、吾が名に由つて二三人の集まれる云々、といはれしぞ、吾が名に由つてといふ句にこそ意味は籠るなれ。

#### 萬有神教的信念

判定せられたり、吾人の信念は萬有神教的信念なりと。記者は流石に吾人の信仰を以て、萬有神教の信念なりとはいはれざりき。しかも其的とは何ぞ。これ吾人が神人一體を主張

する故に、吾人を以て非基督教的なりと言はるゝなきか。これについては尙辯すべき所多かれど、今は基督教が實に凡神教的信念なることを一言して措かん。問ふ、エヘン書に、凡て神に満てるものを爾等に満たしめたまはんとあるは、如何なる義ぞ。又約翰傳の十五章葡萄樹の比喩の如き、神人一體を證するものにあらざるか。又キリストが所りて、父よ爾我れに居り、我れ爾に居る、かくの如く彼等も吾等に居りて一ならしめん云々、我れ彼等に居り、爾我れに居る、そは彼等をして一に完からしめん爲なり、といひ給ひし如きは、キリストと神と一體たる如く、キリスト信者と神と一體たりうることを、斷言したまひしものならずや。見るべし、多くの初代及中世の教父、并に近世の深遠なるクリスチャンの思想家が多く萬有神教的信念を有せしの宜なるを。オリゲンの三位一體論中にいへる如き、正に吾人が期する所の萬有神教的信念をあらはすものなり。曰く、時到りて、凡て靈に屬けるもの、神の智識に於て、子と同じく完きをえ、神の獨子のみが今有したまふ其の同じ姿にて、神の子供となり、父の神格を賦與せらるゝことによりて、全く神化せられん。かくて其時、神は凡てを以て凡てに満ちたまはん。と。(A History of Philosophy, ueberweg. Vol. I. P317)

#### 基督に對する吾人の態度

基督信徒はキリストを信ず、キリストを信ずとは、他なし、其人格其精神に結合するにあり。即ちこれと同感同情となり、之れと一致融合し、終に彼を以て、我に化し、我を以て彼れに化するにあり。これ即ち、我れ爾に居り、爾我れに居り、神と我れとの一なるが如く、爾等をして我儕と一ならしめんとの意に外ならず。吾人が基督の人格に於て、尊貴を見出し榮光に接觸し、遂に其中に神性を認むるに至るは、實にクリスチャンの福音にして、人性に具はる尊榮を喜び、人類の眞なる姿と大なる可能性と、其無限の未來とを仰慕する所以なり。吾人は茲に於てか、自己罪惡の耻づべく、厭ふべく、惡むべく、脱離せざるべからざるを感じ、人性の中に存する神性の如何に慕うべく、求むべく、受くべきかに動かされ、くだけたる悔改の念、痛切已みがたきものと共に、神の吾人に與へたまふはかりがたき恩寵の力に、牽引せられざるをえず。かくて吾人が眞理と正義とを愛するの情はキリストの中に神性の尊榮を見出さしめ、キリストの中に見出されたる神性の尊榮は、吾人をして益深くキリストに抱合愛慕せしめ、キリストに愛着抱合するの深きに從つて、吾人が其尊榮恩寵を認むること愈深く、吾人が眞理と正義とを愛するの情も、自ら其切なるを加ふるなり。吾人はキリストを神とし拜するの信仰に、情念の美はしきものあるを認む。

されど其美はしきは、猶マリア崇拜の中に情念の美なるものあるが如し、吾人は其美にして高潔なるものあるが爲めに、其幼稚にして未だ到らざるものなるを没却すること能はず。キリストを見よ、キリストに聽け、其目的は萬民を引いて彼に到らしむるにあらざりしや、吾儕をして彼れの居る處に居らしめんとにはあらざりしや。キリストを仰ぐは其道なり、彼れが導いて以て到らしめんとしたまふ所は、則ち父なる神の外はあらず。吾人にして、キリストの如く天父を拜するに至らば、これ吾人の最高の救にして、キリスト降生の大目的、十字架の大精神は實に茲に存す。(哥前十五章二十三——二十八、約十六章二十六、二十七參照) 噫當今の牧師傳道師、この神髓を忘れ、徒らに初代基督教が採用せし、哲學の形式を辯護宣傳せんとせば、基督教の生命と真理とは、何れの日が我國に樹立しえん。吾人は他く迄かの信條主義を打破せざるべからず。嗚呼見易きの理は、未だ神學に癡痺せられざる嬰兒の眼に明にして、却て自ら目敏しと稱する人々の眼にかくされたり。負うた子に教へられて淺瀬を渡るとは、現代宗教家の状態にあらざるか非か。

### 彼我相違の點を明かにす

福音新報社説

新人記者が宗教上の意見は既に其大體を紹介せり。之を要するに海老名暉正氏は其の屢明言せらるゝほどに基督を中心と做す者に非ず。氏は基督を宗とせる宗教を非とするに非ずや。其の採用するところのものは基督の宗教、即ち換言すれば、基督の自ら奉じ且つ世に傳へられし道を謂ふに過ぎざるなり。其の告白の末文明かに之を證す。曰く、  
基督の宗教あり、基督を宗として建立したる宗教あり基督信者は後者を脱し去つて前者を服膺すべきであらう

と。海老名氏は熱心に基督を稱讚せらる。其の言ふ所基督に對する忠誠の意を示すもの少からず。余輩大いに之を喜ぶ。然れども詮じ來れば、其の實氏は基督を先達の人と崇め、比類なき一個の先輩と見做すに満足せらるゝに似たり。新人記者は沈思黙想の結果『忽焉として神は我が父にして、我は其の愛子なり』てふ意識を得し、之に因りて耶穌基督が天地の父よと號呼せられたる宗教的意識に同情と同感とを獻ずることを得たりと唱へらる。宛かも基督實に余が心を得たりと感服せらるゝもの、如し。基督と海老名氏と相異なるは先輩後輩の別あるのみ。彼は先覺なり。是は後覺なり。彼は神に對する父子有親の情玲瓏

玉の如くに圓滿なり。此は未熟の境を脱すること能はずといへども、二者の間此外に何等の區別有るとなしと言はば、最も適切に新人記者の信仰を代表せりと思考す。彼の基督は大師表のみ。此の點に於て新人記者の地位は、ハルナツクか基督の人格を以て其の道の眼目に非ずと斷言し、基督の有神觀、天國論、道義說などのみを以て斯道の綱要なりと認めたるに同じ。海老名氏の基督は豫言者として輝く。其の王たるの點甚だ微かなり。其の祭司たるに至りては海老名氏の告白に其の痕跡だも認むべからざるなり。

新人記者は斯の如く基督の師表たるを崇む。其の基督は神の顯彰者なり。然れども世の罪を負ふて、之を贖へる救主に非ざるなり。余輩は之に反對して、基督もし世の罪を負へる祭司たらずんば、また神を顯彰するの豫言者たること能はずと斷言すべし。海老名氏曰く、吾人ナザレの耶穌に於て神の衷情を見ることを得たのである。神は天地萬有を以て吾人に語り給ふといへども彼は基督の人格に由りて其の衷情を示し給ふた。予は基督に由りて直に神の衷情を仰ぎ見ることを得る。

と。誠に然り。余輩も斯く信じて神に感謝するなり。然れども神の衷情は愛を意味す。愛は犠牲的なるに至りて最も切なり。基督の十字架は何を表彰するや。人の罪惡を救はんがために自らを犠牲に供せられしものなるか。而して基督の犠牲的生活と死は、取りも直さ

ず神の犠牲的生活また死なりと見做すを得べきや。之に對して明かに然りと答るものが基督に於て海老名氏の所謂神の衷情を認識すると、凡の義人皆な神性を有すてふ漠然たる意味に於て、覺束なくも萬有神教的に基督の神性を認る者が基督に由りて神の愛を識ると、其の間非常に懸隔せる所なくんば非ざるなり。基督の神格を是認せざれば、神の衷情を見るに於て、確かなること能はざるべし。之を神なりと信せずして、能く神の愛を喋々するは、蓋し二千年來養ひたる基督者の意識世に充ちて其の情力尙は盛んなるを以てのみ。實際は基督教の文學に教育せられたる頭腦か心にもわらぬ信仰的の言辭を無意味に弄するに過ぎざるなり。新人記者が精確なる基督論なくして漫然基督に於て神の衷情を見るべしと稱道するや其の言甚だ富めるに似たれども、其の内容頗る貧なりと謂はざるを得ず。故に余輩は基督の贖ひを忘却し、其の十字架の意味を埋没し、僅かに基督と神との間に親交ありしてふ事實に依り、其の宗教心に訴へて十分に神の衷情を認識せんと欲するは、殆んど木に縁りて魚を求むるの類なりと斷言するを憚からざるなり。

新人記者聖靈を論じて曰く、  
聖靈は基督魂である。基督昇天後は其の門弟の間に一種の元氣が感發せられた。……此の元氣を名付けて聖靈と云ふ。……予は此の聖靈を以て基督社會に於ける神の内在

を證明せんと欲する。

余輩は今聖靈のヘルソナ的なるを説かざるべし。又三一主義を論ぜざるべし。専ら基督を中心として新人記者の意見を叩かんと欲するのみ。其の解説に據れば聖靈は武士風もしくは日本魂の如きものにて基督の遺風餘韻儼然として世に存し、様々に活動するを謂ふ。此れ明白なる事實なり。然れども余輩の研究せんと欲する所は、新人記者の聖靈論に其端を示せる基督學上の見解なり。記者は聖靈を以て神の内在を證すべしと言はる。思ふに彼は聖靈を以て基督の内在するなりと斷言すると能はざるべし。基督の内在は、其神たるを證すればなり。海老名氏の聖靈論を仔細に吟味すれば、基督信徒は今日に於て直接に基督と自らとの間に活ける交通と契合とを持續すること能はざるなり。基督を禮拜すること能はず、また之に祈りを爲すべからずと説かる。一つの理由は、神格の證據なる基督の遍在内住を否認し、従つて其の直接交通を無視し、神秘的契合の有り得べきを疑ふに在りと思はる。海老名氏の告白は之をして余輩の言を打消すこと能はざらしむるの意味を有す。氏は基督の昇天なる語を使用せらるれど、其の意味は所謂雲隠れの如きものにて基督の世に在らずなりしを指すに過ぎざるべし。其の適當なる意味に於て基督の復活を信ぜざる新人記者は、神の右に座して天地の全權を掌握する基督の昇天をも信ずること能はざるべし。活

る基督が教會に内在して直接に作用くを認めず、日本魂の如くなる基督魂てふ遺風餘響のみ傳はりて世を刺激し社會を感化しつゝあるを信ぜらる。新人記者の聖靈論は基督學につきて斯の如き反應を示せり。基督の道は決して斯の如きものに非るなり。海老名氏は時代精神に重きを置く。而して基督の信仰は多く時代精神の化成物なりと主張す。

余輩は基督教の歴史的發達を認むといへども、其の信仰は天より出てたりと確信す。余輩は時代精神よりも神の作用に重きを置く。海老名氏は基督の神格を信ぜざるなり。其の基督教は基督を宗とせず、之を崇拜するものに非ず。

余輩は基督の神たるを信ず。基督は人となりし神なり。

余輩は基督の内住と遍在とを信ず。余輩は基督を禮拜し、また之に祈りを奉ぐ。

海老名氏は基督を師表として仰ぐのみ。

余輩は然かのみならず之を教主なりと信ず。

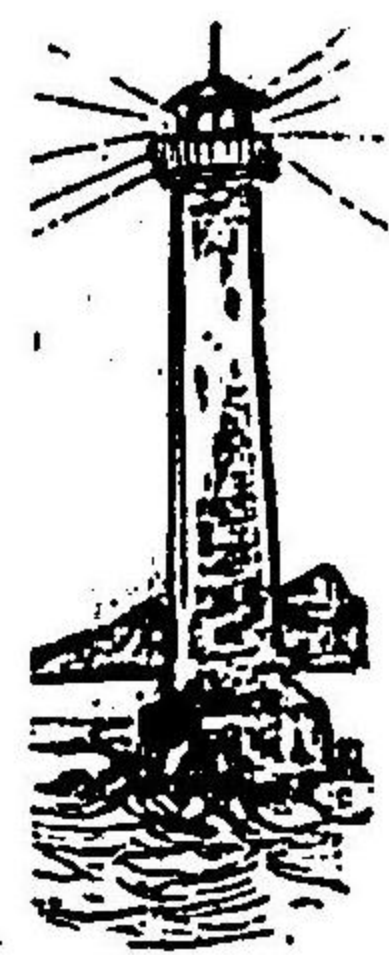
海老名氏の救ひは大悟するに重きを置かるゝに似たり。其の基督は見せしむるを尙ぶ。

余輩は此らの點に於て海老名氏に同意す。然れども更に進んで罪の赦し甚だ重要なりと信

ず。

海老名氏は基督に學ぶを重んぜらる。

余輩は生死ともに之を信じ、之と結び、之に依り、之に一任するを尙ぶ。



### 基督に關する論争を讀む

神學の研究

三 並 良

十數年以前にありては基督教の文壇甚だ賑かなりしに、教勢の沈滞と共に文壇も亦た振はずなりて、吾人をして轉た失望せしめたり。神學上の論争は必らずしも悦ぶべきとにあらざと雖とも若し人々神學を研究して自家の立脚地を發見し、而して更に之を琢磨するの結果、文壇にも自然花を開かすに至るとせば、神學上の論争は必ずしも悲しむに足らざるなり。過去十餘年の寂寞を破りて文壇を復活せしむる徴を昨年に呈したる者を海老名氏對植村氏の争議となす。吾人は此争論が昨年に於ては未だ吾人を満足せしむる程迄に進まざりしを遺憾とせり。然るに基督教界の老将焉むぞ何時迄も逡巡せんや。海老名氏は新年初刊の「新人」に於て、歩を進めて争論の中點に入り「福音新報」更に之を批評する所ありて、聊か吾人の意を強ふするものありたり。蓋し吾人は反覆して云はん、基督教界の論争は固より吾人の好む所にあらず、唯だ之れ神學研究の精神の反響にして、之れによりて基督教徒の意識瞭然たるを得るに至るを悦ぶにあるを。我邦の基督教徒の意識は未だ多く獨立の思辨熟考を経て成れるにあらず、唯だ泰西の教説を其儘吞込みしものなれば幾多の研鑽、鍛

鍊を経て自得するの必要あり、是れ神學研究の一日も忽にすべからざる所以なり。

### 争論の要點

海老名氏が「福音新報」の爲めに辨じ、以て自家の立脚點を表白せられたる大論文は題して「三位一體の教義と予が宗教的意識」と云ふ。然れども其の論文を讀み去り讀み來るに、「ゴス」論、化身論、神の子基督など云へる論點を主とする者の如し。知るべし其標題の「三位一體」の教義を主とする者にあらざるを。故に後段聖靈、三位一體を論ずるの意簡に失して結尾振はず、論旨に物足らぬ心地せらるなり。寧ろ題を變じて「基督論」となすに如かざるか。然りと雖ども基督論としては復た未だ甚だ盡くさるる所多きを遺憾とす。然るに福音新報の記者も亦漫然之を評し去りたるは甚だ輕舉と云はざるを得ざるなり。

固より基督論は三位一體の教義と關係なしと云ふにあらず。基督は三位一體の第二位なり。然れども三位一體の教義は則ち神の三位一體を論ずるものにして教義論の範圍よりせば神論に屬すべきものなり、基督論は則ち基督の人格を論じ其人性と神性の關係を云ふの區別あるを知らざるべからず。始めより範圍を漠然たらしむるは偶々以て論旨に無益の混雜を生ぜしむるもの、吾人の採らざる所なり。

### 基督論は史論なり

今日基督を論せんとせば史傳に依るの外他に道あらず。若し史傳を離れて而して基督を觀察せば其は各論者の理想を再顯するに過ぎずして、眞の基督を觀ずるにはあらず。此の弊は固より既に古代の基督教徒にもありたることにして、其の淵源早く新約書中にあり。然れども吾人は基督教より推して基督は斯くあらざるべからずと演釋すべからず、若し斯くせば得る所は哲學的推定のみ、空論のみ。基督は活ける人格なり、史上の活人格なり、故に吾人の研究も亦史的ならざるべからず。

然るに何ぞや、海老名氏の如きは「耶穌基督は眞に一毫の罪なきものであるとを信ぜざるを得ない」と云はる。是れ昔よりありたる「耶穌無罪論」に過ぎずと雖ども、此は既に史的地盤を離れたるの論なり。吾人此點に就ては何等確實なる憑處を有せず。

唯だ之れのみにあらず、史論を離れて基督の人格を虚構するの結果は氏をして更に「基督の意識に彼れと神と倫理的父子有親の智識があつた、其理由は彼れの性質に形面上的父子有親の關係があつたからであらう。基督に倫理的神子の實相ある其故は其性質に於て神と本體を同ふするものがあつたからと云ふとは疑はれない」と論ずるに至らしめたり。是に於

てか「福音新報」記者は乃ち舉足を取つて曰く、「神と本體を同ふすと云ひ、形面上的父子有親の關係ありと唱ふるの意義果して如何、余輩は此點に於て「新人」記者が思想の脈絡不明にして、前後の照應甚だ漠然たるを憾みとす」と。固より新報記者も云へる如く海老名氏は真に耶蘇基督を神とするの意にはあらざるべしと雖ども、神と本體を同ふすと云ひ、形而上的父子有親の關係ありと云ふ如きは、哲學的基督論にして史的基督論にあらず、且つ舊派の教義の基督を神と見る者も用ふるの語なれば語弊あるを以て注意せざるべからず。殊に神と本體を同ふし、形而上的父子有親の關係あるは基督に限れるにはあらず、希臘哲人の云へる如く吾人も神の性を有すべし。若し斯かるとに論及せんとせば少くとも歴史的立脚地より基督を論定しての後となすべし。然らざれば架空の論とならん。

新報記者に至りては更に勝手の議論を爲す甚だしきものあり曰く「約翰をはじめ當時の基督信徒が基督を禮拜し、之に神事し、之に祈を爲せるは、紛れもなき事實なり。基督が文字的に自ら神なりと公言せられしとなきを喋々するは文を以て意を害する者なり……基督の言を適當に解釋すれば、之を神と見るの外なきもの甚だ多し」と。是れ證明なき獨斷の主張のみ。否記者が基督を神なりとする前提より演繹し來れるものにして、決して史論にはあらざるなり。されば基督を神なりとする論者ありて「約翰をはじめ初めの基督信

徒は基督を神とし拜せず、又之に祈を爲さざるは紛れもなき事實なり、基督が自ら神に非らずと公言せられしとなきを喋々するは文を以て意を害するものなり、基督の言を適當に解釋すれば人と見るの外なし」と斷言せんも容易なり。福音新報記者は何を以て之に答へんとするか。畢竟吾人は獨斷的空論を廢めて肉あり血ありて活動せし史的基督を觀察せざれば何等の得る所あらざるなり。

#### 基督自身の言行を研究すべし

基督論は史論なり。故に基督に就て明白なる思想を得むとせば、何よりも先づ耶蘇其れ自身は如何に己れを見たるかを觀察するを要とす。「ロゴス」説と基督論とは如何なる關係を有するや、アレキサンドリヤ哲學と基督教との關係は如何の如き問題は第二に考究すべきものなり。ハルナツク、ヴアイス、ブライデレル、ロイス、ドルチル、ヒールマン、バイシラフ等諸學者が是等の問題に關し如何なる説を有するやは、其時詳論すべきものなり。否是等の諸學者が唯一の専門學者にあらず、獨乙に於ても此外尙幾多之れと肩比すべきものあり。其等人々の諸説は福音新報記者の爲せる言の如くに誰々は斯く云ふが其説は可なり將た否なりなど一言にて論斷を附すべきものにあらず。緻密に商量して吾人の立脚地を



定めざるべからず。然れど此ことに就きては記者「基督の神格につきて基督自身の教訓及び使徒等の所説は近きに掲載すべき基督論に於て細説すべし」と約束せるを以て吾人は近き將來に於て之を評論するの時あるべし。

基督は禮拜すべきものなるか

基督を禮拜するや否やは福音新報記者の好むて問ふ所なり。此度も之をなせるが、三四年前と覺ゆ、記者が獨乙宣教師シルレルの説教を批評したりし時にも此事を論ぜり。固より此問題たる記者が大切視するは至當にして、オルソドックス派と自由派の區別のある所なり。オルソドックス派の者は基督を神と做すが故に之を禮拜もするならん、其靈と信徒の靈との交通もありとなすならん。唯だ自由派の者に至りては然らず。基督を以て史的人格となすが故に之に禮拜せざるなり。之れと靈の交通ありとせざるなり。唯だ禮拜し靈の交通ある者は唯一の神あるのみ。

基督は神にあらざるか

福音新報記者の如きは基督を神となすや勿論なり。然らば基督に於ける人性と神性との關係は如何。空論に走らば、如何様にも強辯するの路あらん。然れども其恐るべきものを見るに昔の教義は極めて不可思議なる條文を樹立せり。アタナシウス信條に曰く、

「吾等は真正の信仰を有す、故に吾等は、吾等の主耶穌基督は神の子、神にして人なりと信仰し又告白す。彼は世界の以前に於て父の本質より生れたる神なり、世界に於て父の本質より生れたる人なり。完全なる神、智識的なる精神と人間的なる體を有する完全なる人間なり。彼は神性によれば父に等しく、人性によれば父よりも小なり。又彼は神と人となりと雖とも、然れども二にはあらず、一の基督なり、神性は神性に變化せるにあらず、神性は人性を取りたるによりて一なり。兩性混同せるにあらず、彼は唯一の人格を爲せるによりて一なり。蓋し體と靈とは一個の人間なる如く、神と人とは一個の基督なり」

是れ即ち古よりの基督論なり。何ぞ其れ奇怪なるや。神人兩性なれども二にはあらず一なり。一なれども兩性混同せるにはあらざれど一の人格をなせるなりと。論理的智識を有する人能く之を思辨し得るか。吾人は之を明白に考へ得ざるを遺憾とす。三位一體説の如きも亦之れに等しく、

「吾人が一神を三位に於て、三位を一神に於て拜禮するは真正の信仰なり。……父は

神なり子は神なり、聖靈は神なり、而も是れ三神にはあらず一神なり、故に父は主なり、子は主なり、聖靈は主なり、而も是れ三主にはあらず、……神は造られず、又創られず、又生れず。子は父より造られたるにあらず、又創られたるにあらず、生れたるなり、基督は父と子より造られたるにあらず又創られたるにあらず、又生れたるにあらず、出で行きしなり。故に一父にして三父にあらず、一子にして三子にあらず、一聖靈にして三聖靈にあらず、此三位中孰れ第一者たるにあらず、孰れ最後者たるにあらず、孰れ最大、最小者たるにあらず、三位皆な等しく永劫にして等しく大なり」

三ペルソナの別ありと雖も一神なり、一神なりと雖も三ペルソナなり、父、子、聖靈皆な主なれども三主にはあらずと云ふが如きも前の基督兩性論の如くに等しく智識は之れに對して何等思辨の能力なきなり。否之れに對して智識は沈黙すべし、雖だ之を信ぜよとは古來の強求なり。福音新報記者の如きは容易に之れに應ずるとをも得べし。吾人は不幸にして僅小の論理的頭腦を有す、之を度外視して非論理的の怪物を妄信するを得ざるなり。

(新人七號所載)

### 福音新報記者の基督論

三 並 良

余輩は本誌の前號に於て、海老名氏對植村氏の基督に關する爭論に就て、聊か批評を試みたり。素より余輩は海老名氏の所論にも全然左袒するに非らず。多少意見を同せざる所あるを見る、然れども福音新報記者の所論に至りては大に立脚地を異にせり。之を以て余輩の意見を開陳し、以て江湖の諸賢に質す所あらんと欲したるなり。

爾後福音新報記者は其の豫約に従ひ、續々基督論を掲げ始めたり。是れ吾人の甚だ多とする所にして、此の如くにして始めて眞に神學的研究の進歩し且つ有益となるを信するなり。

### 新報記者の論法

然れども今迄に出でたる文によりて、新報記者の論法を見るに、極めて獨斷的にして、從て唯だ演繹的なり。此の如き論法にも一理あるべしと雖ども、徹頭徹尾之を用ひて憚らざるは、今日の議論としては甚だ幼稚なる感あらずんばあらず。

## 其 前 提

記者が以て動かすべからずとなす前提は「基督教は基督なり、基督に於ける最大要點は其の神格と受肉降世なり」(第七卷四八六頁三段九行以下)と云ふにあり。基督教は基督なりと云ふとは余輩も亦賛同し得べきの言なりと雖も、其意味に至りては素より同じからず。記者が基督教は基督なりと主張する所以のものは、基督は神格を有し、此神格が受肉降世せるものなるを以てなり。然れど記憶せよ、是れ獨斷的前提にして、記者は何等の辨明をも之れに就て與へざるあり。

## 其 論 の 進 歩

記者は只だ一意以上擧げたる所の前提を反復するのみにして、余輩は寧ろ其議論の進行上何等の論歩を進めたる所あるを見ざるなり。記者は今日に至る迄號を重ねる既に三なりと雖ども、其の呈出する所は、重に基督の神格を信じたる古人を紹介するにあり、曰く「フラウニンク、曰くゴルドン將軍曰くマルチン、ルツテル曰くテニン曰くアウグスチン曰くポーロ其他諸多の先哲あり。余輩は之を讀みて感ぜたるは今更なるにあらぬど、記者の博

學にして多識なるにあり。然れども更に之を讀みて骨董店に入りたらん如き感の起るを禁ずる能はざりき。

## 證人何等の用をなすか

議論を爲すに當り先哲の言を引用するは決して悪しきにあらず、自家の立説を一層有力ならしめんが爲めには誰れもなすとなり。然れども先哲の言を幾ら引照したりとて、之を以て他説を探る者を説服確信せしむるには足らざるなり。

余輩は新報記者が引照せし諸先哲は等しく之を尊敬する者なり。然れども之を尊敬すればとて其所説は悉く余輩も之を信ずべしとはなさないなり。若し之を爲さんか、そは妄信のみ吾人が獨立自尊の識見なる者は何處にありや。余輩は思想の自由を尊び、自家の確信あるを要す。若し夫れ基督を神なりと信せし者を擧ぐれば二千年の歴史中極めて許多ありん。福音新報に一年や二年書き續くるの材料は優にあるべし。然れども斯く多數ありたりとて、吾人には何等の用を爲さざるなり。彼等が之を信じたりとて、吾人も亦之を信ぜざるべからざるの理由毫もあるなし。

新報記者はルツテルの信ぜし所は吾人も亦信ずべしと爲す然らばルツテルは嘗て悪魔の存在を信じ、ワルトブルクに在りて聖書の翻譯に従事するや、悪魔來りて妨害をなすとし、且つ其形貌を見たりとし、之に投ずるに、インキ壺を以てし、其墨痕今猶ほワルトブルクの城中に舊蹟を止む。記者も亦たルツテルに悪魔の現出し來りたるを信ずるや。記者或は之を信ずるをも得む。余輩廿世紀の科學を信ずる者は能はざるなり。

ルツテルは嘗て晚餐式のパンは變じて基督の肉となり、葡萄酒は變じて基督の血となるを信じたるのみならず、此教理を非常に重要なものとなし、ツァングリーと一致するを拒みたり。新報記者も亦たルツテルの如く吾人が晚餐式に用ふるパンは變じて基督の肉となり、葡萄酒は變じて基督の血となるを信ずるものなるか。

余輩と雖ども古の哲人豪傑は之を尊重す、然れども哲人豪傑なるが故に其所説は悉く信ずべしとはなさないなり。故に記者の爲すが如き引照は余輩を導て他の立脚地に至らしむるを得ざるなり。記者の爲す所は寧ろ徒勞に屬するを遺憾とす。

## 古の世界観と今の世界観

古の世界観は無輪天動説なりき、故に地球は動かざるものとして説を立てたり。然れども今日は然らず、カリレオ以來地動説は遂に勝利を得たるなり。彼の福音新報記者の如き立説の方法を見るに先づ地動説真なるか將た天動説あるかを攻究せず。空しく天動説を前提として、而して古人の天動説をなせる者を引照したるが如きのみ。是れ寧ろ餘事にして、要は單刀直入其の前提を究明するにあり。

古の基督教徒は奇蹟を信ぜり、然れども今の學術的神學は之れを排斥して容れず、蓋し其の根本は古人の學問と宗教との關係に就いての觀念と今のとは大いに相違すればなり。古は宗教的真理と學術的真理なる二者ありて相對峙すと成せるなり。而して如何にせば之を調和し得べきやとは教會の師父なる者を始め、教義を考究したる者の苦慮せし所なり。此の調和の任に當りて成立せる者を神學と云ふ。教義史は則ち此の調和論とも見らるべきものなり。

超自然的天啓は絶對的の真理を有し、人間の自然的智識は相對的真理を有すとは則ち基督教的思想のありてより以來、常に稱道せらるゝ所にして、基督論、三位一體説の如きは則ち此絶對的真理と相對的真理との和合として成立せしもの、中特に著しきものとす。耶穌は神性と人性を有すとば則ち超自然的、絶對的真理と自然的智識を結合すと云ふ者にあらず

や。「ロムス」と云ひ神性と云ふは前者にして、人性と云ふは後者なり。余輩は別に説ありと雖ども、此際ヨハネの「ロムス」はアレキサンドリヤ哲學の影響を受けたるや否やは餘り多くの關係を有せずと信ず。然りと雖ども超自然的にして絶對的天啓なるものありや否やは今日に於ては未定の問題なり、否今日の學術的神學は之を否定すべし。是れ今日の學問の趨勢上然か云はざるを得ざればなり。蓋し今日の學問は宗教的真理の絶對なる者と人智的智識の相對時すと云ふの説を採らず、學術は宗教の真理をも科學的に攻究するに至りたり。是に於て神學の前提とせる超自然的天啓なる者は依然として其の儘に成立する能はず、宗教も亦た一般精神界研究に用ひらるゝ方法によりて研究せらるゝに至り、基督教も歴史的心理的に論ぜらるゝことなりたり。

此の如くにして絶對的真理の顯現なる者は歴史的心理的にある能はずとして排斥せられ、よし百歩を譲りて是れありとするも、猶に小判にして誰れも之を解するをえず、有れども無きに等しとせらる、又教祖を以て神人合一の體となすは、基督教にのみ限れるにあらず、是れ宗教歴史の過程上諸種の宗教に説く所にして、佛も其宗徒よりは然か倣されツオロアステルも然り。然らば何を以てか、耶穌を獨り神人合一の者なりと云ひて、他を然らずとなすか。是れ決して今日の學術を有する者の爲さる所、而も猶ほ基督教々義の稱ふ所を

のみ是となす者あるに至りては是れ唯だ一種の宗教的妄信ありて然るのみ。

#### 吾人の立脚地果して薄弱なるか

人或は云はん、吾人の立脚地は甚だ薄弱なり、絶對的真理にあらざる者によりて、安心立命を得むとは不可能のことなりと。然れども絶對的真理を有すと爲すものは、其絶對真理なることを何によりてか知れる。之れ彼の智識若しくは精神の然りとすに由るにあらずや。其智識若しくは精神の然りとす所は果して眞なるや否やは何によりて知るを得べきかを極むるに至らば其主張も畢竟主觀的確信に過ぎざる事となるべし。況んや前にも云へる如く絶對的真理あるも、其は決して吾人の認識する所にあらざるに於てをや。吾人は唯だ宗教の現象に對し歴史的、心理的攻究をなし、而して吾人の僅かなる實驗を加へ主觀的確信を得て之れに満足すべきのみ。而も此の立脚地は決してオルソドックス派の立脚に比して薄弱にはあらざるなり。(新人入號所載)

## 海老名彈正氏の三位一體論を讀む

毎週新誌主筆

小崎 弘道

海老名彈正氏が本月一日の『新人』に掲げたる「三位一體の教義と予が宗教的意識」なる論文は實に近來の大議論となすべし。嘗に之が十餘頁の長篇なる故にしか云ふにあらざ、其實質に於て、其内容に於て、實に然るなり、殊に之が我國の基督教會に及ぼす影響の大なる吾人の疑を容れざる所なり。

昨年十月以來海老名氏は植村氏に對ひて論戰を開きたれども、今日迄の處にては、唯枝葉の辯難抗擧に止まりて未だ其本論に入らざりしが、思ふに海老名氏が今回大膽に卒直に其信仰意見を發表せられたるは、此論戰の本論に入りたるものにて、今後兩氏の間にて面白き辯論を見るのみならず、延ては諸教派の間に於て一時論議の花を咲すに至るや疑ふべからず。

吾人は氏の論文を以て明治二十四年六月に金森通倫氏が『日本現今の基督教并に將來の基督教』と題し其信仰意見を發表せしもの、又は横井時雄氏が明治二十七年十二月に『我邦の基督教問題』と題し氏の所謂新神學に關する意見を發表し、以來の大議論にして、其論の歸着する所略同一徹に出るものとなさざるを得ず。唯、海老名氏の所論の右二氏と異なる

所は、金森氏の著書は批評的にして聖書の解釋に極端なる高等批評の原理を應用し、にあると横井氏の意見は倫理的にして倫理思想を以て舊神學を破壊し新神學を建設せんとするにありたれども海老名氏の思想の傾向は哲學的若しくは神學的にして、兩氏に比すれば更に宗教的なるにあり。尙ほ兩氏に比して海老名氏の異なる所は、兩氏は其意見を發表せしむ之を實行せんとするの勇氣なく、却て其意見を發表すると共に基督教に對する信仰も自然に冷却し去り、恰も其著書を以て基督教に對する訣別の辭とあしたるが如き觀あり。然れども海老名氏は之と全く其趣を異にして、己の發表せる新神學新信仰を以て益進んで傳道を試み之を以て我國の宗教思想を風靡せしめんとするの概あり。又海老名氏に至つては決して右兩氏の如く其意見を發表し忽ち傳道事業を辭し去るが如きことなきは吾人の斷言を憚らざる所なり。

殊に海老名氏と金森、横井の兩氏と異なる所は其信仰意見を發表せるの場合と境遇同ふせざるにあるなり。兩氏の場合に於ては我國信徒の信仰の動搖せる、宗教思想の甚だ不取締なる、差して今日と讓る所なかるべきも、全體より云へば其信仰思想共に甚だ幼稚なりし。されば兩氏に於ては獨り他信徒に離れて魁をなし胎兒の時未だ至らざるに生れ出てたるが如き形狀ありて、兩氏が其信仰意見を發表せしのみにて之を實行する能はず忽ち斃死せし

が如き有様なるは、自然の勢にして別に怪むべきにあらざる也然れども海老名氏の場合はこれと異り基督教會の全體より云へば七八年前とさしたる相違あらざるべきも、少くも組合教會の一部分丈は（或は大部分なるやも知るべからず）必ず海老名氏の信仰思想を歓迎するの場合なれば、兩氏の如く流産に終るが如きことなきは疑なき處なり。

而して海老名氏が其信仰思想を發表せる場合境遇が金森横井兩氏と異なる所は、吾人が兩氏の著書よりも、海老名氏の意見發表に更に重きを置かざるを得ざる所なり。吾人は最初より明白に吾人の立場を明言し置かざるを得ざるが、吾人は多くの點に於て海老名氏と其信仰意見を異にするものなり、されば氏の如き信仰思想が果してキリストの眞實なる教旨と併馳し我國に於ける健全なる基督教の發達と相伴ふことを得るや疑はざるを得ざるものなり。これ吾人が殊にキリストに對する忠勤の精神より忠實に嚴肅に氏の思想を爰に評論せざるを得ざる所以なり。

熟ら教會史を按ずるに時に當時の神學思想紛亂を極め異說僻論猖獗を逞ふし、眞正なる信仰が異端謬説の間に葬り去られんとするの時代なきに非らず。ニカヤ大會の當時の如き即ち其一例なり。當時キリストの性質に關する思想は紛亂して一ならず、殊に彼を以て人からず神にあらず神人間に位する一種の受造物となすエリヤスの説は教會の多數を占め居

たるも、ニカヤの大會に於てアタネシオスの奮闘を以てキリスト神性説稍々勝利を占め以て基督教會千有餘年の思想の傾向を一定せり。英國に於ては十七八世紀の頃「デオズム」の宗教思想跳梁を極め自然と超自然の間に渡るべからざるの淵ありとなし、凡ての超自然の信仰を排斥し、基督教會は一時自然宗教に化し去らんとしたるも、バットレル、ペーリー等の諸學者ありて漸くにして其潮勢を防止するを得たり、獨國に於けるラシヨラリズムの跋扈米國に於けるユニテリアン協會の奮起の如き、實に基督教會の危機たりし時代となさざるを得ず、我國の今日或は之に類する所なからざらんか。教會の設立日猶淺く信徒信仰の脩養猶ほ稀薄にして、其思想亦た雜粕なるを免れず。此際吾人に於て大なる信仰を養ふと共に大に學ぶ所なくんば、或は一時の新説の流行により岐路に迷ひ我國に於ける基督教會の健全なる發達を妨ぐるに至ることのあるを免れざるべし。

海老名氏の基督教及三位一體論に對し評論を下すの前に於て先づ吾人をして氏の大體の基督教觀を評せしめよ、吾人をして遠慮なく云はしむれば、氏は基督教の根本的思想に於てイエス直接の弟子たる使徒等は勿論基督教會千九百年の信仰と所信を異にするが如し。何をか基督教の根本的思想と云ふ、即ちキリスト彼自身の信仰を以て基督教信仰の中心と爲すにあり。イエス曰く「我に従へ」、曰く「我に來れ」、曰く「我を信ぜよ」、曰く「我を學べ」、

曰く「我は眞理なり、途なり、生命なり」。基督教が他の宗教に異なる所他にもあるべしと雖も、開祖の教へし所を主とするにあらず、開祖彼自身を主とするにあるなり。而して海老名氏の主と爲す所はイエス彼れ自身よりも彼の教へし所にあり、氏は其論の結尾に曰く「キリストの宗教あり、キリストを主として建立したる宗教あり、基督教者は後者を脱して前者を服膺すべきであらふ」と。氏は斯る断決を爲し使徒等を始めとし基督教歴代の聖賢も亦其信仰を誤りたるものと爲し、言を續きて「保羅以來の大家は吾人之を尊敬す、其言行倣ふべきもの甚だ多い。乍去彼等も亦時代の子であつて、萬世の師たることは出来ない。保羅もクレメントもオーゴスチーンも、ルーテルも萬世に卓絶せる人傑であるけれども、等しくキリストを宗とするものである」と云ふて彼等の信ず可らざることを表明せり。吾人として決して彼等に盲従するものにあらずれども、些細の點に於ては如何なるにせよ、斯る重要な根本信仰に於て彼等が悉くキリストの眞意を誤りたりと爲すは吾人の斷じて信ずるを得ざる所なり。勿論海老名氏に於ては共観福音書の基督教觀はパウロを始めとし基督教會今日の信仰とは其趣を異にすと云ふならん。フライデレル、マルティノ、其他ユニテリアン主義の神學者に於ては斯る觀察を爲すは通常の事なれども、公平に眞率に聖書を研究するものは其内に種々の傾向あるは認むる所なれども、其大體に於ては互ひに一致す

る所あるを見る難きにあらずるべし。  
 第二に氏の基督教觀に於て福音書を始めとし使徒以來基督教會の信仰と其所信を異にせらるゝが如き所あるは氏の罪と救に關する思想なり。氏の論文を一覽にするに殆ど一言の罪の意識に及ぶものなきが如し、從て氏の思想に救てふ觀念あるを見ざるは當然の事なり。キリスト及び使徒等の教ふる所は基督教信徒の自覺する所は吾人の罪人たる事なり。吾人の罪惡は如何にして赦さるゝを得る乎、吾人は如何にして其罪惡を脱するを得る乎、是れ救の必要な所以なり。而して神の子イエスは世の人を罪惡より救はん爲めに世に降りし是れ基督教の根本的思想と云ふべし。然るに氏の基督教觀には殆ど罪と救なる思想の根跡あるを見ず、唯基督教の主とする所は父の神を吾人に示し吾人に子たる心を起さしめキリストの如く父子有親の關係を有せしむるにありとなせり。イエスが父の神を吾人に示し給へる所は實に重要なり。然れども吾人は如何にして父の神を見るを得る、唯獨生の子にして父の懷にあるキリストの生涯と死に於て之を見るのみ。而してイエスの生涯が終始献身犠牲愛の生涯たる所は即ち父の心を知る所あり。



吾人は前號に於て海老名氏の大體の基督教觀の如何を掲げたるが、吾人は之より進で本論に立ち入り先づ氏のロゴス論に就て批評を試る所なかる可らず。

海老名氏の論文の骨子はロゴス論にして初めに「ロゴス論の出處」はユダヤ教の獨一神と異教の八百萬神とを結付るに一種の能力を認定せねばならぬ所より出てたりと爲し、次にロゴス論は善惡を解釋する連鎖なりと爲し、夫より「ロゴス論と天地創造」、「ロゴス論と基督教徒の意識」、「ロゴスの化身」等と順を追て基督論并三位一體論の起源及發達を序て「三位一體論の發達」に至て氏の歴史的觀察を結びたり。古來氏と殆ど同様の意見を有しロゴス論を以て基督論の解説を圖らんとしたるもの少からず。昨年の始に死去せられたるマルチノ博士の如きは其一人にして、博士が「宗教に於ける權威の位置」なる書に於て「イエスの人物に關する考説」の一章に於て論ずる所、大體に於て氏の説と大差なきが如し。然れども其説の可否は差し置き海老名氏が簡單に明瞭に且つ巧みに解説を試みられたる所は吾人の感服せざるを得ざる所なり。

諸て基督教の教理に歴史的の開發あるは今日となりては何人も之を承認せざるものなからん。宗教上の眞理と理科上の眞理の間に大なる區別を立て、宗教上の眞理は天啓に出づるものなれば始より完備せるものにて之に開發進歩の餘地なしと爲すが如き、到底近世思想と

相容る可らざるものなり。十數年前の事なりと覺ゆ、當時エチンボローにて發刊せし「ハンプレスピテリヤン雜誌」に神學に進歩あるや否のシムボシオム(圖文)出てたるとありたるが、神學思想進歩の大なる今日に於て到底斯る問題の起ることさへ想像成り難き程なり。吾人の會て首唱せし所は理科學に於ては進化、歴史に於ては開發、宗教に於ては聖靈此三のものは同じ眞理の一面を顯すものにて、互に一致せざるを得ざることにありたり。さればキリスト論に於てもまた三位一體論に於ても始より完備せる教理として啓示せられたる者にあらず「初には苗、次に穂出で穂の中に熟したる穀を結ぶ」とは唯神の國の開發のみ然るにあらず、教理に於ても亦然らざるを得ざる也。殊にイエスの聖靈に關する教旨は此眞理を開示せるものにて、其言に曰く「我名に托りて父の遣さんとする訓慰師即ち聖靈は衆理を爾曹に教へまた我すべて爾曹に言ひしことを憶起さしむべし」又曰く「彼即ち眞理の靈の來らん時爾曹を導きて凡ての眞理を知らしむべし」。故に使徒時代には單に父と子と聖靈の三あるを認めたるのみにて其性質並に關係の如何は彼等の知るを得ざりし所なりしが、三四百年を経て漸く此教理の開發を見るに至れり。

而して教理の開發に對し希臘思想が大なる影響を及ぼしたるも明白にして、近時に於て希臘思想の教理の發達に及せる影響を詳論したるはオックスフォードのベッチ博士のヒツ

ペルト講義なり。然れども希臘思想が基督教の教理を産み出したりとすは真理の一面を以て全部の解説を圖らんとするものにして、決して公平の判断となすべからず。フェールペルン氏の如きは、基督教理の發達に外にありて一の勢力となりたるものは希臘哲學と羅馬の政治思想と當時の通俗宗教思想の三なれども、之が中心點たるはキリストにして彼に由りて與へられたる思想が外來の思想に由りて其形を備ふるに至れりとなせり。殊に希臘思想が基督教と交接せるに至りたるは二世紀の後半期以後のことにして、其以前に於ては殆ど其影響の痕跡だも認むべきものなし。ロゴス説の如きもアレキサンデリヤに移住せるユダヤ人中に起りたるものにして、此思想を開發したるは殆どキリストと同時に居たるフワイローなりとす。而してフワイローにしてキリストのを知ざるのみならず、またキリスト及び弟子等に於てもフワイローの之を知らざりしは歴史上明白の事實なり。約翰傳の記者は「太初に道あり道は神と共にあり道は即ち神なり」と云ひ、ロゴスなる言を以てキリストに應用したるも、果して記者が其思想をフワイローより得たるや一の疑問なり。獨逸の學者パレンステットが十九世紀の初めに於て『フワイローとヨハネ』なる書にて兩者の關係を論じヨハネは必ずフワイローに學びたるなるべしとの考説を立てたる以來偏理派の神學者は之を以てヨハネ傳の解説並にキリストの化身論の起原を説明するの材料となした

れども唯兩者の間に類似の點を見出すことあるの外、歴史上之に何等の關係ありたるや、その證據一も存するものなきが如し。彼の教會史の大家にして、自由討究を以て有名なるハルナツクすら此兩者の間に歴史上何等の關係あるを認めざるが如し。

且つ希臘思想が教理の發達に及せる影響大なるにせよ、之が影響を受けたるは最初の基督信徒にあらずして二世紀以後の信徒なるを見る時は之を以て最初の信徒の意識を説明せんとするは恰も二十世紀の理科學思想を以て中世紀の宇宙觀を説明せんとするが如く、歴史の事實を轉倒することゝなさいるべからず。海老名氏はロゴス論は當時の信徒の一般に懐く所の哲學思想にして此思想に由りて當時の信徒が其宗教的意識の解説を試みたるが如くなせども、パウロを始として當時使徒等に於て此の如き思想なかりしは新約書に明なる所なり。

海老名氏は三位一體の教義并化身の教義はキリストも使徒等も毫も知らざりし所なりと容易く斷言したるか、果して氏の言の如くなるや否、吾人は先づ聖書に就て研究せざる可らざれども、本誌に餘白なければ之を次號に譲らん。

海老名氏は基督教會の三位一體論はロゴス思想を有したる當時の基督教徒が其宗教的意識を説明せんが爲め考へ出したる教義にしてキリストの自ら啓示せられたるものに非ずと斷言し、此教義の發達の順序を述べて曰く、

基督は嘗て三位一體の教義を以て人の是非曲直を定めたまふたことはなかつた、又之を以て信徒未信徒の別を爲し給はなかつた。三位一體の教義の如きは其念頭にだも浮ばなかつたてあろう。(馬太傳結尾に父と子と聖靈云々は教會の聲であつて後年附加したものである)。耶穌は唯其メシヤたることを公言し給ふばかりである。メシヤとは唯猶太の王といふ義、又神の子といふもメシヤといふ義と同一で、萬々ロゴスの意義ではなかつたキリストの十二使徒は耶穌の公言を信じ、彼のメシヤたるを認めて、其再來を翹望したに過ぎぬ。當時基督教徒たるを表白する信條はナザレの耶穌が猶太の王メシヤであるとの一ヶ條であつた。パウロは一步を進めてナザレの耶穌を以て上天の標準的人格の化身と認めたのである、しかし彼れは基督を以て其主であるといつたのみで、曾て神を尊稱したことはなかつた。約翰傳の著者に至り始めてロゴスとナザレの耶穌とを結び付けたのである、しかし其ロゴスは神と稱してはあつたけれども、ドコまでも天父に劣れるものと

せられた。

以上は海老名氏ロゴス論の結論にて、最も重要な點と爲すべし。而して其論の大體はニテリヤン神學の大家なるマルテノが「宗教の權威の位置」なる書に論ずる所と異なるなし。マルテノは其書に於て使徒時代にイエスの人物に關し凡そ四種の説ありたりと爲し、第一はメシヤ、第二は復活の主、第三は靈のアダム、第四はロゴスの化身したるものにて、共觀福音書のイエスは第一若しくは第二なれども、パウロに至りては自ら歴史上のイエスに接せざりし故其イエスは理想化して第三となり、約翰傳に至り歴史上の事實を去る愈々遠く當時アレキサンデリアに行はれたる新プラトニ哲學の理想の結果として第四即ちロゴスの化身となりて現はれたり。マルテノはイエスの人物に關する思想の變遷を序て共觀福音書のイエスは單に人なれども、パウロのイエスは天人の下降せるものなり。曰く「彼天使の間にありと雖も天使の一人にあらず、我儕の弱點を體認するとを得る性を有し自ら人の爲め卑り吾人を其靈によりて榮光に導けるものなり」(四二三ページ)。約翰の福音書に至りては其境遇全く前者に異なり、イエスの誕生は有限の時期にあらずして無限の「太初」にあり、彼はナザレのイエスにあらずして無限なる恩寵と眞理の充ちて父の懷にあるロゴスの化身なり。此論を評するに當りて第一に攻究せざる可らざるはヨハ子傳著作

の時代なり。マルテノーはヨハネ傳に見る所の思想の大體よりして之が著作の年代を第二世紀ヂヤステン、マルタルの時代とせざるを得ずと論じたるが、近時の批評家は多くは之が著作を以て斯る後年に置くを許さざるなり。然れども吾人は爰にヨハネ傳著作の年代を論ずるの暇なければ、之を他日に譲り先づパウロのキリスト論より之を評せん。

パウロのキリスト論は上天の標準的人格の化身なりとは海老名氏と同説なるマルテノー一派の主張する所にして、其根據は哥林多前書第十五章四十五—四十九節、中にも四十七節に「第一の人は地より出て土につき、第二の人は天より出たる主なり」との解釋より出たるものなるが聖書の一言一句を以てかゝる説を案出するは頗ぶる疑ふべき論法なりとす。パウロの書簡は普通之を三種に分つを常とす。第一は加拉太、羅馬及び哥林多前後書にして、第二は腓立比書、第三は以弗所哥羅西等のキリスト的書簡なりとす。パウロのキリスト論が完全なるキリスト神性説にあらざるとなすの人々は此第三の以弗所及哥羅西書を以てパウロの著述ならずとなす。吾人は爰に此等の書簡に關する批評論に立入るとなく、パウロの書簡全體の傾向を以て彼のキリスト論如何を見る時は彼はキリストの神性を承認したるに疑ふべき所なし。勿論彼の書簡に於てキリストを以て直に神なりと断定せし處は羅馬書九章の五節を除くの外他に之あるを見ず而して此五節の解釋に就ては註解者の中にて解釋

を異にするもの少なからず、「代々讚美を受くべき神なりアーメン」とあるはキリストを指したるにあらざキリストを與へたる神を讚美したるものなりとなす、解釋者ありて容易に孰れも定むるを得ざれども、パウロのキリスト神性論は此一句を以て定まるべきに非らざる也。哥前多前書の八章の五、六節には「神と稱ふるもの或は天或は地に在りて多くの神おほくの主あるが如しと雖も我儕に於ては唯一の神すなはち父あるのみ、萬物これより生り我儕に歸す、又ひとりの主即ちイエス、キリストあり萬物これに由り我儕も之れに由れり」とあり。また羅馬書の十四章の九節に「キリストは生けるもの死せるもの、主なり」とありて彼を以て父の神と同様吾人の絶對的主權者となしたるは明なり又舊約書にてエホバとあるものをキリストに應用し「凡て主の名を願求ものは救はるべし」(ヨエル三〇十。羅馬十〇十三。申命記三十二。二十一、哥前二〇十六)とあるが如き、彼は之を以て當然のことなりとなす。此外彼の書簡の前後に加へたる祝禱に於て孰れも父の神と主キリストの恩寵を唱へざるはなし。願くば我儕の父なる神主イエス、キリストより恩恵と平康をうけよアーメン(羅一〇七、哥前二〇三、哥後一〇二其他の書簡)キリストの恩寵爾曹と偕にあれアーメン、「願くば主イエス、キリストの恩寵と神の愛と聖靈の交り爾曹すべてと偕にあらんことをアーメン」(哥後十三〇十四)願くば榮彼(キリスト)に歸して世々に至れアー

メン」(加一〇五)此の如き祝禱の言を見る時は、パウロに於て明白に論理的にキリスト神性の信仰を發表せざるも、彼が此の如き信仰を有したるは毫も疑ふべき所あらざる也。

パウロのキリスト論は以上述べざるが如くなるにせよ、其觀福音書のキリスト論にして然らずとせば、海老名氏の云ふ所大に理なりとなすべし。海老名氏はキリストは嘗て三位一體の教義を教へたることなきのみか已はたメシヤたるを公言したるのみにて、而もメシヤとはユダヤの王と云ふ義また神の子と云ふもメシヤと同意義なりとなせり。イエスが三位一體論の教義を教へたるとなしとは勿論のとなれども、其教に此教理が含み居たるは彼の言にて覺るを得べし。其一例を擧ぐれば馬太傳十二章三十一、二節に「此故に爾曹に告げん、人々すべて犯す所の罪と神を潰す所の罪は赦されん、されど人々の聖靈を潰すことは赦さるべからず。言を以て人の子に背くものは赦さるべし、されど言を以て聖靈に背くものは今世に於ても亦來世に於ても赦さるべからず」とあるが、此一にはイエスが父と子と聖靈の三者を並べあげ比較したるものにて、自ら己を以て神と等しくしたるの證據となすべき也。又馬太傳結尾の「父と子と聖靈」云々は後年附加したるものにて、キリストの言にあらざるとなせども、こはただかゝる思想は後世に起りたるものとなすよりの推理にて、極端なる高等批評の論者が往々採用する論法なるが、反對の證據なき以上は吾人は俄かに

之に首肯するを得ざるなり。此一節に就き「神の子の化身」なる著者たるアルチデーオン(近頃監督となれり)ゴールが云ふ所左の如し。

此一句に就ては勿論これが唯新約書に一度見るのみにて他の處に此の如き字句なきより屢々反對せる所なり。然れども此反對説に幾分の價值を有することなりとするも、近時十二使徒教訓の發見により大に減せられたりとなすべし。彼の書は或人々は新約書よりも猶初代の基督教を表彰するものとなすか、これに三重「父と子と聖靈」の名を以てパテスマの文句となす所二ヶ所あり。

三位一體の教理は後に發生したるものとなすも、そが萌芽がキリスト及び使徒の教に存するは疑ふべからざる所なり。

海老名氏は主イエスがたゞメシヤたるを公言したるのみにして、メシヤとはユダヤの王と云ふの義又神の子と云ふもメシヤと同義なりとなすが、イエス自身のキリスト論如何は何人も聞かんと欲する所にして近時之を研究するのみならず。ゼームス、スターカーの「イエスのキリスト論」(一千九百年の出版)の如きは即ちその一にして、彼は先づ其觀的福音書のみ於てイエスの已に就て教へたる所を研究し、先づイエスが如何なる名を用ひたるかを究め「人の子」「神の子」「メシヤ」「贖主」及び「審判官」の五に就てイエスの教ゆる所の如

何を詳細に研究せり。吾人は爰に今此の著に就て其詳細を擧ぐるの開あらざれども、其論の歸着する所は吾人の平日主張する所と略同一なるを以て其一部を紹介すべし。

第一イエスの用ひ給ひたるメシヤある名稱の義は單にユダヤ人の王なりとの意にあらず、ユダヤ人が平日用ひ來りたる受膏者に新しき意義を加へたるものにして、特別の意義を有するは、イエスがダビデの子と云ふことに就てパリサイ人に反問せるが如し馬可傳十二章の三十五—七節にキリストはダビデの子なりと云ふ意義は學者の云ふ所と異にしてダビデの主たるメシヤを指すなりとなし、詩篇百十の一節を引用して「主我主に云ひけるは、我爾の敵を爾の足凳となす迄我右に座せよ」とダビデは云ひたるが、かくダビデ自ら主と唱へたりされば如何でその子ならんや」と、イエスのメシヤたるの意義はユダヤ人のメシヤにあらずして特別の意義にて神の子たるメシヤたるを知るを得ん。

次にスターカルの「神の子」なる名稱に就て論ずる所最も味ふべし。先づ「神の子」なる名稱は聖書に種々の意義に用ひられたるを見る。第一は天の使(約百三十〇八)、第二は第一の人アダム(路三〇三十八)、第三はヘブル人(出四〇二十四)、第四はイスラルの王(母下七〇十四)、第五は基督信徒(約一〇十二。太五〇四四四五)これなり。又他の人が此名をイエスに用ひたる所多くあるが人々によりて其主義一ならず。路一〇三十五に「爾が生む

所の聖なるものは神の子と稱へらるべし」とあるは特別なる意味に解するを得ん。可十五〇卅九に百夫の長が「誠に此人は神の子なり」と叫びたるは單に彼を以て偉人となしたるや知るべからず。此外又彼の有名なるペテロの信仰の表白なる「爾は生ける神の子」は可及路には單にキリストのみを揚げれば、メシヤと同意義に用ひたるやも知るべからざれどもユダヤ人のメシヤに非るや明なり。然れども彼のイエスがガリラヤの海に於てイエスが海上を歩みし時ペテロを助けし時に船に居しもの彼を拜し「誠に爾は神の子なり」と云ひたるは彼等がイエスを以て超自然の人となしたるや疑ふべからず。又イエスの祭司の長の廷に於ける最後の表白には神の子とキリストとを重ねあげたるが、馬太傳路加傳共にイエスの表白を以てユダヤ人が神を瀆すこととなしたりとあるなり。若し「神の子」にして單にメシヤの意義なりとせば彼等何故に之を以て神を瀆すこととなしたるや解し難し。其言に曰く「祭司の長その衣を裂きて云ひけるはこの人は瀆すことを云へり何ぞ外に證據を求めんや爾曹も亦たその瀆したることを聞く」とありたり。

吾人は前編に於て「神の子」なる名稱の用例并に當時の人々が如何なる意義にて此名稱をイエスに加へたるかを論じたるが、これより進んでイエス自ら之を如何なる意義に用ひ給ひしかを究むべし。

第一は馬太傳十一章二十七節に見る所の一句なり、曰く「父は我に萬物を與へ給へり、父の外に子を識るものなく、又子及び子の顯はす所の者の外に父を識るものなし」。此一節は約翰傳のイエス(約三〇卅五。同一〇十八)と同様のイエスを示すものなれば、共觀福音書のイエスと約翰傳のイエスとは天壤の相違なりとなす人々の最も解釋に苦むもの也。ウエント、ホルツマン等は之に對し種々の意見を附會したれども、自然の解釋はイエスと天の父との關係は吾人と天の父との關係と全く其類を異にし特別なる意義に於て父子の關係ありたりと見るの外他あるべからず。約翰傳はイエスを以て太初に神と共にありたる道にして父の生み給へる獨子となしたるが、此一節に見る所の子も亦獨生の子と解するの外他に解すべき道なし。

第二は共觀福音書共に見る所の農夫の比喻(太廿一〇卅三—四十六。可十二〇一—十二。路廿〇九—十九)なり。この比喻は三福音書共に出るものなれば之が歴史的最も正確なるものなるや疑ふべからず。此比喻にては或人が葡萄園を農夫に貸し與へて其期至るに及んで

收穫を得んとて其僕を遣したるに、一人は之を捕へて打撲きて追ひ返し、一人は之を石にて打傷け辱めて返し、一人は之を殺し、又外に多くの僕を遣し、かども或は打ち或は殺したるに、遂に一人の愛子ありけるが、此我子は必ず敬ふならんと云ひて之を遣し、が、彼等また之を殺せりとあるなり。此葡萄園の主人は神にして僕等は、預言者なるは疑ふべからざるが、爰に一人の愛子とあるはイエスを指すものなるや明なり。而してイエスは預言者等を僕となし己を神の愛子となしたり。若しイエスにして他の預言者と同様單に聖靈を受けたるものとなさば、彼に於てかゝる譬を用ゆるは最も僭越にして神を瀆すものとなさざるを得ざる也。

第三はユニテリアン主義の人々が屢反對の證據に用ゆる所の世の終に關し己の無智を表白せるイエスの自白なり、曰く「其日其時を知るものは唯我父のみなり、天にある使も子も誰も知るものなし」(可十三〇卅二、太廿四〇卅六)。此一節に就てスダーカルの辯論せし所頗る興味あり。此一節に四種の智識あるを見る、人間の智識、天の使の智識、神の子の智識、天父の智識これなり。イエスは爰に己を以て全く人類外に置き給ふのみならず、己を以て天の使と天父との間に置き給ふ所最も味ふべき也。彼にして特別なる意義にて神の子たるに非ずんば如何てかゝる言を吐くことを得ん。彼の「神の子」の意識が吾人の神の子

たる意識と全く其類を異にするは最も明白なり。以上は「神の子」なる名稱に關しイエスの意識如何を辯じたるが、イエスが自ら己を以て人間以上の者となしたるは單に共觀福音書のみを照すも全篇に通じて殆ど一點の疑ふべき所あるを見ず。試に其二三の例を擧ぐればイエスは自らモーセよりもダビデよりも、ソロモン若しくはヨナ其他の預言者よりも大なるものとせり（太十二〇四十一、二）。また彼は己を以て神の宮殿よりも安息日よりも大なるものとせり（太十二〇六十八。可二〇廿八）。殊に馬太傳の十一節に於てヨハチを論じ給へる所に此の如き言あり、「誠に爾曹に告げん婦の生みたるもの、中未だバプテスマのヨハチより大なるもの起らざりき。されど天國の最少者も彼よりは大なる也」。天國の最少者がヨハチよりも大なるは天國の主たるイエスの大なるに依るなり。これ即ちイエスが人類の最大人物も己に比すれば履の紐をも解くに足らざるものとなし到底比較のなし難きことを公言せるものなるが、自ら神の獨子となすに非ざれば如何てか此の如き言をなすを得ん。

イエスは彼を受くるは神を受くると同じとなす。馬太傳一章四十節には「爾曹を接くるものは我を接くるなり、我を接くるものは我を遣ししものを接くるなり」とあり。又イエスは神と同じく己の遍在と永遠なることを證言せり。彼の馬太傳十八章に教會の祈禱に就

て約束し給へる言に曰く「我名の爲に二三人の集れる所には我もその中にあればなり」と。これ彼が在さざる所なきことを證言せるものにて、馬太傳二十八章の終の一節「それ我は世の終まで常に爾曹と共にあるなり」とあるは、彼の永遠なることを證言せるもの也。此外自ら天の父と同じく人の罪を赦すの權ありとなし、また己は即ち萬民の審判者となすのみならず、自ら父と聖靈と共に同格なることを表白せる所（太九〇一十七。可二〇三十一。路五〇十八。廿八。太七〇廿二、三。同廿五〇十一。十三。同廿五〇卅一。四十六。太十二〇三十一。三十二）は如何なる註解者も聖書を寸斷分碎するにあらざれば到底解釋し去るを得ざる所にして、公平なる聖書の讀者は決して之に首肯するを得ざる所なり。此外イエスの處女よりの誕生、復活、彼の行ひ給ひし多くの奇跡、異能、彼の宗教的意識等は孰れも彼が特別なる意義にて神の子たるの意識を有したることを證明するものにて、共觀福音書の記者等もパウロ、ヨハチと共にイエスを以てロゴスの化身となし之を神人と崇敬したるや疑ふべき所なし。共觀福音書のイエスを以てパウロの書翰若しくはヨハネ傳のイエスと異なるものとなすは畢竟牽強附會の見解たるを免れざる也。

海老名氏が三位一體の教義を研究するに自ら非常なる苦心をなしたることを掲げたるは同情の至りに堪へず。吾人も亦同氏と同じく多年之が爲に辛酸を嘗め苦闘をなしたるものな



り。唯吾人が今日迄到着したる所は同氏の宗教的意識と全く所見を異にし、吾人はトマス  
の如く一度ならず幾度もイエスは誰なりやの間に就て疑を起したることあれども、遂に彼  
と同じくイエスに對ひて「我主よ我神よ」と叫びて彼の前に首を垂れたるもの也。

使徒以來ニカヤ大會の當時に至る迄教會の間に見たる基督論は凡そ四種なり、曰くエビオ  
ニズム、(イエスを普通の人と爲す説) 曰くエリヤニズム (イエスを以て人間以上と爲すも  
神に送られたるものと爲す説)、曰くドクテイズム (イエスを以て神が一時世に現はれたる者  
と爲すの説) 曰く神人説、これなり。一時教會は諸種の基督論に由りて使徒以來の道統の  
傳を失はんとしたることありたれども、ニカヤの大會にて爰に其方針を一定し以て今日に  
至る迄の基督教會の信仰を持續せり。今海老名氏の基督論を見るに右四種の中孰れに屬す  
べきか、一見頗る漠然たる所あり。例へば「キリストには神子の實相があつた」とか又は  
「イエス、キリストは眞に一毫の罪なきものなるを信ぜざるを得ない」とか、また「キリスト  
には二方面ある、即ち神に對しては人、人に對しては神である」とあるが如き、彼の超自  
然性を承認するが如く見ゆる所もあれどもまた他の一方にはパウロ及びヨハネの基督觀を  
非認し彼を以てユダヤの王と云ふ義のメシヤたるを公言したるのみにて他の意識なかりし  
と爲し、基督教會共通の信仰なるインカルチーションの教義を非定する所を見る時は、氏

の説のエビオニズムたる疑ふべからざるが如し。殊に海老名氏はイエスに禮拜と祈禱を捧  
ぐるを以てキリストの靈を有するもの、行爲とは爲し難しとなし、之を以て天の使、聖母  
マリア及び聖人に祈禱禮拜を捧ぐるものと同じく、後世の迷信に出でたる如くなす所は、  
全く使徒等は勿論千九百年來の教會の信仰と其趣を異にするものにして、氏の基督論のエ  
ビオニズムたる殆ど疑を容るべからざるが如し。エビオニズムなる語の起源に就ては學者  
の間に異論少からず。其字義は貧賤なりとのことなるが、或はイエスを單に預言者と認む  
るの説は貧賤なるユダヤ的基督信徒の間に行はれたるものより起りたりと云ひ、或はイエ  
スに關する思想の甚だ貧賤淺薄なるよりかくは設けたりと云ふものもあるなり。孰れにせ  
よイエスの生前の存在を否定し彼の神格を拒むの説は決して豊富なるキリストの解説と見  
做すを得ざるなり。

吾人は以上四篇に於て海老名氏の大體の基督觀、ロズス論、基督論に對し批評を加へた  
るか、これより進んで氏の三位一體論に論及するは議論の順序なれども餘り論點の多岐に  
互らんことを恐れ三位一體論は之を他日に譲ることとせん。終りに臨み一二言の之に加ふ  
べき者あり。一は海老名氏が「吾人も亦時代の子にして時代思想を以て我宗教的意識を解  
するの外爲すべき道あらず」と爲し三位一體論に新しき解釋を加へんとしたるの精神は吾

人の賛成せざるを得ざる所にして吾人も亦斯る解釋を試みつゝあるものなれども、唯吾人が海老名氏と見解を異にする所は海老名氏はキリストの意識のみに依頼して使徒の意識を棄却すれども、吾人はキリストの意識は勿論使徒を始めとし千九百年間の信徒の意識をも合せ採り使徒等の意識はキリストの教旨の自然發達せしものにして兩者の間に海老名氏の云ふが如き差別なしと爲すに有り。二は多くの人々は神學と信仰は混ぜべからず、神學說にして如何に極端なりと雖ども、其人にして信仰さへあれば差問なしと爲す。これ眞理の半面を見たるものにて、或點までは吾人も是に對し異論あるなし。即ち人を論することを主とせば其言行、信仰を主として其人の思想を是非すべからず、然れども思想即ち論說を主とする時は其人の言行、品性信仰によりて決して其說を可否すべからず。而して吾人の忘るべからざるは神學と信仰の關係の最も親密なるものにして殆ど實際に於ては之を分つべからざるることなり。

由來神學論は餘り建徳に益を爲すものにあらず、時には之が爲め而白からざる個人間の紛争を引き起し之が爲め少からざるの害毒を當時の教會に流すことあり、然れども今回の論戰たるキリスト論の如きは基督教會の生命に關するものなれば、吾人の傍觀坐視するを得ざるなり。吾人豈に辨を好むものならんや、實に止むを得ざればなり。

### 基督教的意識と神に關する三位一體の教義

ツ、イ、アルブレクト

「東京毎週雜誌」記者予に勸むるに「新人」第二卷第六號に出でたる、海老名彈正氏の論文「三位一體の教義と予が宗教的意識」を批評せんことを以てせらる。予氏の論文を熟讀し興味を覺ゆること頗る大且つ深なるものあり、殊に其文中には予が衷情より同意を表すべき點尠からざるのみならず、全文宗教的精神に充ち満てるを以て、予は予が同意の點を指摘し之を高調せんことを欲せざるに非ずと雖ども、海老名氏は既に「新人」紙上に於て教友の批評を求めらるゝあり、故に予は海老名氏の言説と同意し得ざる數點を陳述せば、是或は教友諸氏の参考に供せらるゝ事もやあらん。今や之を爲すに當り明言し置かざるべからざる事あり、予の海老名氏の論文を批評するや毫末も氏に反抗せんとするの精神に動かされて之を爲すに非ずと云ふ事なり、予は天地の神に支配せらるゝを以て一生の悦樂と觀ずる人イエス、キリストに忠節を盡さんことを明言する人、イエス、キリストを以て「神より出た神、光より出た光」と斷定する人とは我心實に合一なることを知る、予若し此種の人と異なる所ありとせば是單に頭腦の差異たるに過ぎずと云ふべし。予は尙ほ海老名氏に謝すべきことあり、近時多辯なる日本の或哲學者は三位一體の教理を以て更に基礎なき不合理

のものと斷言して敢て憚るの色なしと云ふ、斯る時勢をも意に介せず海老名氏は此問題を論ずるに當りて極めて公平無私、而かも能く尊敬の精神を保持せられたるは吾人之を海老名氏に多謝せざるを得ず。

予は是より海老名氏の論文を熟讀するに當りて、予が注意を喚起したる數點のみを簡略に記載せんと欲す。具さに細微の點に亘りて之を批評せんこと固より能くすべきにあらず其の之を能くせざるは主として新聞紙體論文の不満足なるの罪に歸せずんばあらず。

吾人が最初に攻究すべきは基督教的意識の本性及び作用に在りとす。海老名氏は自己一個の宗教的意識を以て三位一體の教義の可否を判決し、三位一體の教義の權能を假らずとも、尙ほ能く氏が一個の宗教的意識を解釋し得らるゝの故を以て海老名氏は直ちに三位一體を拒否せらるゝ、論じて此に來れば忽ち吾人の腦中に浮び出づる二箇の問題あり何ぞや。

第一、一個人の宗教的意識は如何なる真理或は教理にても、其正不正を試験するに足る信憑し得べき判決者なるや否や。

第二、吾人は基督教的意識は吾人に三位一體の教理を給與すべしと期するを得べきや否や。

世上の學者此二疑問に對して如何なる返答を試みるや、是予の與り知る所に非ず、予一個に取りては此二疑問の何れに對しても否と答へざるを得ず。予深く基督教的意識の價值を重んず、此二疑問に對して否と答へたればとて、是れ直ちに辯證論を構成するに當りて其系統中より全然基督教的意識を無視せるヘーレー及びハットラル輩の昔時に逆戻りせんとするの愚を學ぶ者に非ず然りと雖ども一個人の宗教的意識を以て或教理の眞偽如何を試験するの標準と斷するは是れ正しく「プロテスタント」主義として唱へられたる福音的自由を誤用するの甚だしきものと爲さるべからず。此種の斷定は個人主義の最も危険なるものにして、之を主張する人に之を無意識的に主唱するにせよ、其斷定の事實なると危険なるとは毫も有意識的に之を唱ふると何の差異あるを見ず、一個人の宗教的意識も此に至りて殆んど驕傲と等しき僭越と化し去らんを恐る。哲學者の「常識」を以て哲學問題を判決するの標準と爲すや、彼の所謂常識は自己一人の識見を指すに非ずして、必ずや哲學問題を精査攻究せる學者間に共通せる識見を指すものたらざんば非ず。基督教的意識も亦此の如し吾人基督教的意識を以て真理の標準と見做さんと欲せば此意識たる夢にだも單に一個の基督教徒の意識と爲すを敢てせざるべし。即ち基督教的意識とは基督教の真理と認定せるものと、其精神とを最も深く味ひたる而已ならず。亦能く其真理と精神とに陶冶せられ、之を實踐躬行せる歴代の基督教徒等の經驗を指すものと見做さずんば非ず、是を以て若し余が宗

教的意識にして千有餘年の久しき、假令種々異様の形式を取れるにせよ、今に至る迄基督  
教内の卓絶せる人傑に眞理と認定せられたる教理と齟齬するとありとせんか、余は謙虚の  
精神に左右せられ左の如く自問する所あるべきは理の當然と云はざる可からず、

予は如何なる経験の缺乏するが爲め古今に卓絶して神と親炙せし人傑の有せし如き、宗  
教的意識を有せざるやと。

「プロテスタント」基督教にありては、聖書を以て信仰及び行爲に關する事柄を判決する  
に當りて、終極的無上の權威あるものと認定するものなるが、若し吾人にして一個人の宗教  
的意識を以て事物の眞偽を試験するの標準と爲すに至らば、是れ全く新教主義にありて占  
有し居る位置より聖書を移轉せしむるものなりと云ふべし。蓋し新教主義によれば基督教  
的意識なるものは、之を全然聖書と分離して使用すべきにあらず。吾人強て之を試みんか  
是れ正しくケカル派の偏頗と誤謬とに陥るものなり。思ふに吾人基督教的意識なるもの  
を正當に解釋せば、吾人は聖書を以て基督教の眞理を含蓄せる源泉と見做すの止むなきに  
至るべし、故に聖書を以て靈的明照 (Illumination) よりも更に價値ありと見做すに至る亦  
自然の理と云ふべし。此の如く解釋せられたる基督教的意識に従へば、聖書は單に基督教的  
生涯が客觀的に示現せられたるの事實を記述すと見做さるゝ而已ならず基督教的眞理が基

督教徒の心意に働きて正當に及ぼせる結果を記述せるものと承認せらる初代の基督教徒  
が、主イエス、キリストと親密なる交通をなし、亦眞理の靈なる聖靈の教導を得たるが爲  
め、彼等の信仰と思想の上に如何なる變化の生じ來りしやは、吾人之を聖書に散見するを  
得べし、されば、若し吾人の所謂基督教的信仰と生涯とか、聖書中に記載せられたる信仰  
と生涯とに符合する事なからんか、吾人は尙ほしも已が信仰と生涯とを斷じて聖靈の教導  
によると定むるの妄に至らば、是れ自己を欺くものと云はざるべからず、是に由て之を觀  
れば、單に一個人の資格を以て云ふ予が宗教的意識は、如何なる基督教の教理にても其眞  
偽を試験するの安全なる標準たるべからざるや明なり。第二、疑問即ち吾人は基督教的意  
識を以て、吾人に三位一體の教理を給與すべしと期するを得べきものなるや否やに對して  
は、予が返答は極めて簡略にして、而かも消極的たり。夫れ基督教的意識は吾人に給與す  
るに事實を以てするも、教理を以てすることなし。抑も教理なるものは客觀的默示によ  
りて吾人に給與せられたる事實を考へたる後、基督教的意識に訴へて確實なりと判定せら  
れたる、基督教的思辨の結果なれば、教理は基督教に内在する事實を哲學の模型に入れて  
之を哲學的ならしむるものとす。是故に我宗教的意識は予に告げて曰く汝は罪人なりと、  
然りと雖ども我宗教的意識は未だ曾て罪に關する説を告ぐる事なし、我宗教的意識は予に

確むるにイエス、キリストは我教主なる事を以てすれど、未だ會て何等の贖罪説をも給與する事なし。我宗教的意識は予をして聖靈の教導の我身に優かなることを感謝せしむるにも、未だ會て聖靈も主イエス、キリストとの間に存する相互の關係を明示する事なし。此故に予は我理性を満足せしめんが爲めに、更に歩を進めて基督教的意識に給與せられたる事實より推理して、一定の教理を形成する事あらんか、此時に當りて其教理の眞偽如何を批判する標準は實に基督教的意識なり、此故に思辨の魔力尋常の外に迸はしりて、罪を以て純全遺傳性に歸するの教理を案出し、若しくは人の自由を容るゝ事能はざるが如き神の主權説を唱ふるに至るあらば、基督教的意識は之を拒否するに至る自然の數と云ふべし。然りと雖ども吾人の宗教的意識は或教理を要求せざるが故に、吾人之を排斥すと斷ずるに至らば、是れ實に意識を思辨力と混淆せるの譏を免かれざるべし、蓋し宗教的意識なるものは全然教理を要求するものに非ず、之を要求するものは吾人の理性なりとす、是に由て之を觀れば吾人の論點は正に左の問題に歸着すべし。

吾人若し一個人及び基督教會内の宗教的意識に給與せられたる事實を基礎として推理せんと欲せば、神を三位的に存在すと見做す教理は穩當なる歸納なるや否や  
予が海老名氏の論文に批評を加へんとする第二點は氏は三位一體の教理を以て、純全たる

哲學的思辨の結果と見做すに似たるのみにあり、若し予にして誤ると無からしめば、海老名氏は三位一體の教理の發生せるは、紀元後三四百年間、基督教會内に流布せる三位一體的思想の旺盛なるにありとせらるゝが如し、是故に其當時希臘及びエチオピアに於ける哲學的思想にして、三位一體の教理も發生すること無かりしなるべしとは自然の推論と云はざるべからず。予を以て之を觀るに、海老名氏の斷定は稍々過分なりと云はざるべからず。固より三位一體の教理の形成せらるゝや、當時の哲學思想の之に影響せる所夥しかるべきは、更に論なしと雖ども、哲學思想、獨力にて三位一體の教理を生産したるものと斷定するは過言とせざるを得ず。蓋し三位一體的思想を胚胎せる衝動は、吾人之を教父等が奉持せる哲學思想に求め得べきにわらず、吾人は之を教父等の心中に内在せる基督教的意識に發見せざるべからず。吾人本論を爲すに當りて須らく或信仰を合理的なりと觀し、之を裝ふに哲學的言語を用ゐて、一個の定式と爲すと、更に一步を進めて此信仰を發見すると同時に之を確立せしむるとは、兩者間少からざる逕庭あることを忘るべからず。夫れ神宇宙に超越するか或は宇宙に内在するかの哲學的問題なるものは、三位一體の信仰の發生するに何等の關係も有る事なし、固よりロゴスに關する思想の如きは、吾人は單に之をフアイロソフの思辨に發見するのみならず、彼以前既にストイック派の

哲學及びヘラクテイタスに散見するを得べきを以て、ロゴスの希臘哲學思想を左右するに與りて力あること更に辯論を要せずと雖ども、吾人の察聞なる未だ三位一體の信仰がアゼニス或はアレキサンドリヤの地に深く其根を下せしを聞かず、吾人三位一體の信仰の發生地を探求せんと欲せば、アゼニス及びアレキサンドリヤの地を去りて宜しく、パレスティナの地に行かざるべからず、思ふに基督教徒をして三位一體を信せしめし所以のものは、主として哲學的思辨に由るにあらずして、職として神の默示に由るものとす。予は是より簡畧に予が今明言せる斷定を事實に引照して證明する所あらんと欲す。抑も此默示たるや吾人はそは聖書中に記述せらるゝを知る、故に聖書の成文となるに先ち、默示なるものは既に世に實在せると論を俟たず、歴史に於ける神は默示を爲し、聖書に於ける神は福音宣傳者及び使徒によりて事實を記載し、教會に於ける神は教内俊傑の智力に光明を與へ事實を解釋し、更に解釋の結果を智力的概念の形式に入れて、世に發表する事とはなりぬ。予は固より解釋の時代既に去れりと思ふものに非ず、將た是れまで到達せる解釋の結果が、真理の總體を包含すと見做し、今後毫も増減を要すること無しなど、思ふの滑稽を學ぶ者に非ざると雖ども、さりとて余は從來到達せる解釋の結果が全然首尾轉倒せざるに至るべしとも信ずる者に非ず、予は其大要に於ては從來解釋の結果が變化すべしと信ずること能はず、

ユニテリアン派の學者と雖ども今予が云へる所に略ぼ同意するや明なり。吾人默示の事實を精査せんと欲せば、宜しく第一、基督の人格及び言語より、第二、初代基督教徒の證明より之を蒐集せざるべからず、此二要素は初代の基督教的意識を發表するものにて其中にありて基督の證明最高の意識たること論を俟たず。

海老名氏はイエスが自己を以て特殊無類の意義に於て神の子なりと自覺せしことを承認せらる、然り氏はニカヤ信條中の語を能く玩味せられ、遂にイエスを呼ぶに「神より出た神」といふ句を用ゐらる、然と雖ども予が判斷にして大過なからしめば、海老名氏の此句を用ゐらるゝや從來基督教會にありて慣用し來れる意義と全く異なる意義にて使用せらるゝに似たり。固より氏は神とキリストとの間に存せる倫理的關係を説明せんが爲めには、兩者間に形而上的關係の實在せしを承認すと雖ども、氏の神を以て人と「一體」と見做し「神人合一の意識」を説くを見れば、氏の意の那邊にあるやを察すること蓋し難からざるべし。思ふに教理上特殊の意義を有するに至れる語句例へば「神より出た神」の如き句を從來慣用し來れる意義と異なる意にて用ゆる時は思想の混亂爲めに甚たしく生し易きを常とすれば吾人は務めて斯る曖昧の使用法を避けざるべからず、然りと雖ども予は今予が下したる判斷の誤りなからんことを欲し、併せて海老名氏に望むに氏が世界の公同教會が、等しく

イエスを以て「神より出た神、光より出た光」と信ずると同意義にて、主イエス、キリストを信せらるゝ事の事實ならんことを以てせざるを得ず、若し海老名氏にして世界の公同教會の解するが如く「神より出た神、光より出た光」の句を釋義したらんには、神を以て三位的存在ありと見做すは蓋し海老名氏と雖ども、之が客觀的歴史上の事實より歸納したる至當の斷定たることを承認せらるゝに至らん。イエスの自己を以て神の子なりと意識するや、是れ他の受造物に適用し得べからざる無類の意義にて此句を用ゐたるものにて現今之に彼是の疑を挿むの餘地あるを見ず、イエス既に此意識のあるあり是を以て民衆に告げて「我に來れ、我爾を息ません」と明言するを得、彼が自ら罪を赦すの權あることを主張するが如き、或は當時猶太人の悉く信じて神より賦與せられたりと爲せる祖先傳來の律法よりも、尙ほ自己一個の語に權威あるを以て、人々之に服従すべき義務ありと説くが如き、或は彼が死者を甦らしめ、之を審判すと明言して、毫も憚る色なきか如き、何れも自己の特殊無類なるを意識せしに起因せずんばあらず。イエスは實に人の子にして亦能く神の子たり、吾人は此種の意識は單に純乎たる人間の意識なりと見做して以て、敢て正鵠を得たる説明法なりと安んじ得るや、自由派の學者中キリストと神との間に存せる相互の倫理的關係を以て「吾人人類間に發見し得るものよりも、更に、一層高級なる形而上關係の發顯に

して此の如きは吾人々類社會に到底其類例を求め得べからざるもの」と斷するの止むを得ざることを明言するもの一二に留まらざるなり。現にロイスの如きは實に此種の自由派神學者なりとす、輓近ハルマン、シユミット。キリストの道德性を論じて曰く「キリストの道德性には其根底に於て一種の特質、特殊の本性、即ち意志の媒介を要せざる本性の存するあり、別語以て之を云へばイエスの生涯は明かに形而上的土臺ありて然るなりとの結論に達する蓋し避くべからざるなり」と。予は此見地を強めんが爲めに、第四福音書より語句を引用するを得べしと雖ども、予は敢て之を試みず、單に三福音書中より學者間に毫も疑はれざる文辭のみを考證して満足する事とせん。單に三福音書のみに限るとするも既にイエスの内部意識に關し、大問題の起るを禁ずべからざるものあり。更に使徒及び其繼承者たる教會内の神學者を研究せんか、彼等がイエスの意識を正當に解釋せんとして務めし事實は至れり竭せりと云ふべし。神を以て三位的存在ありと見做す説の如き正しく此種の解釋法其絶頂に達せる者と云ふの外なし。固より此教理に隨伴せる或方面は過言に失せりと見做ざる可からざるものも或は是あらん、然りと雖ども之を以て全然神の三位一體的存在を廢棄するものに比すれば、此教理に表はれたる解釋は頗る意を満たすに足るものと云はざるべからず。

吾人はより教會内に於ける基督教的意識の發して文辭と成れるものを攻究せん、使徒保羅腓立比書二章六節にキリストを論じて曰く「彼は神の體にて居しかども、恰も戦士が掠奪品に執着するが如く自ら其神と匹くあるところの事に執着することなく、反て己を空ふし僕の貌をとりて人の如くなれり」と。人或は怪み問はん腓立比書は使徒保羅の筆になれるものなるやと讀者請ふ記憶せられよ聖書批評學上自由派の先進指導者たるキルツマン教授すら、以下の如く斷言せることあるを「此書は吾人が攻究の目的となれる使徒の遺書なり」と吾人は哥林多後書八章九節にも稍々之に類する語句あるを見る、哥羅西書一章十七節には「萬物彼に由りて造られたり、且その造られたるは彼が爲めなり、彼は萬物より先にあり、萬物彼に由りて存するを得るなり」との文辭を見る予又明言す自由派の批評家は近來益々哥羅西書を以て保羅の手になれるものなりと結論するに至れることを、紀元後八十年頃の著作と思はるゝ希伯來書も亦神の末日には其子に託りて人類に神意を啓示せる所ありたるを述べたる後、神子を以て「父の榮の光輝、其實の眞像」ありと斷定せり（希伯來書一章三節）

予は以上の如く聖書の語句を引用したれども、之に由りて以て三位一體の教理を證明せんと欲するの意毫もあることなし、前述の引用は偶々以て使徒時代の基督教的意識にありて占有したる基督の位置の重要なるを示すに足るのみ。予は之を示さんとするにも以上の引用を以て基督教的意識を最も強く發表せるものと信ずること能はず、數年以前死去したる博士テールの語を假りて、予が思を表はさんか以上の引用は「恰も潮退き去りて後沙上に残れる塩々たる結晶體の如きか、結晶體は鹽の結晶したるものなれば是固より海水に鹽分あるの證據たるに相違なしと雖ども、是最強の證據に非ず、最強の證據は吾人之を海水其者に見ん、吾人海水を汲まんか其分量の少き僅かに一小提桶に過ぎずとするも、鹽能く水中に溶解して一杯の水だも尙ほ鹽分を含まざることなし」キリストも亦此の如く、使徒時代の基督教會内の意識に能く溶解しありたるを以て、吾人は使徒時代より吾人に傳はり來れる書翰中到る所に、キリストの在すを見る別語以て之を云へば初代の基督教徒に取りてはキリストは實に肉と成りて現はれたる神たりしなり、その肉に現はれたる神なりと云ふや、決して海老名氏も多少同意を表し居らるゝと察せらるゝ近世流行の凡神的思想に見るが如き意義に於て然るに非ずして、神キリストに在りて親ら人類間に現出し世をして己と和らかしめたりと云ふにあるなり。



三位一體の教理中、聖靈は果して如何なる關係を有するものなるや、新約聖書中之に對して基督教的意識を發表する所極めて稀なりと雖ども、是れ敢て怪むに足らず。蓋し初代基督教徒の意識に絶えず浮び來れる思は、實に神基督にありて人類を救ふと云ふの點に存したれば、聖靈は救に何等の關係ありしや未だ之を思ふの邊あざりしなり。海老名氏は聖靈を以て基督の門弟を勵ましたる「元氣」と斷じ、或は「彼等の間の社會精神」なりと見做さるれど、是れ氏が基督の門弟間にありては、聖靈なるものは如何なる意義に解されしやを全然誤解せるものと爲ざるべからず、若し海老名氏にして使徒行傳或は保羅の書簡を讀むに際し「聖靈」なる語の出づる毎に、之に代ふるに「元氣」或は「社會精神」なる語を用ひなば氏と雖ども自己の註釋の成立し難きを觀るに至らん。試みに左の數句を引用し其の中に散在する「聖靈」なる語に代ふるに「元氣」或は「社會精神」なる語を以てせん。讀者は予が言の決して誣ふるにあらざるを知らん。

故に爾曹自ら慎み且爾曹が元氣(或は社會精神、原文には聖靈とあり)に立てられて監督となれる其全軍を慎み……

(使徒行傳二十二章二)

我儕は祈るべき所を知らざれども元氣(或は社會精神、原文には聖靈とあり)自ら云ひ難きの慨歎を以て我儕の爲めに祈りぬ

(羅馬書八章二十六節)

人の心を察たまふものは元氣(或は社會精神、原文には聖靈とあり)の思をも知れり蓋は彼(元氣或は社會精神)神の心に遊ひて聖徒の爲めに祈ればなり、(羅馬書八章二十七節)予は心を虚ふし氣を平らかにして、使徒保羅の書簡を讀まんとする人に問はんと欲す彼の所謂聖靈てふものは唯だ單純なる「元氣」或は「社會精神」と見做して以て保羅の意を得たるものと爲すを得るや。別語以て之を言へば、聖靈なるものは初代基督教徒の有せる氣質、或は心意の状態或は當時の基督教徒に特有なる品性を指して云へるものなるや、固より何人と雖どもキリスト及び、聖靈に關し、保羅若くは初代基督教徒等有せる思想を以て全然誤謬に出でたりと斷ずるを得べきは論を俟ざるものにて、吾人は保羅及び新約聖書記者の意見を採用するか或ひは保羅及び新約聖書記者に優りて更に正當の見地を抱持すると自認する近世批評家の所説を採用するか其何れを去り其何れに就くかを決するは吾人各自の自由なりとす。然らば保羅の理解せる所によれば聖靈なるものは果して如何なるものぞ、其意義如何、今予は之を闡明せんが爲めに教授ホルツマン氏の語を引用せんと欲す、氏其著「新約聖書神學」に論じて曰はく「聖靈は基督教徒を動かす力にして甦りたるキリストの代人たるなり、其聖なりとせらるゝや是れ神の靈なるが故なり」と又曰はく「保羅は當時の猶太人の普く思へるが如く聖靈を觀して感發(インスピレーション)及恩寵の賜物(Charismata)を

主管する原なりとせり」と是れ固より保羅及び猶太思想に準へば聖靈は純然神の人格より、獨立して存立せる人格なりと云へるにはあらずと雖ども、神の靈の神に於ける關係が少くとも人の靈が神に於ける關係の如きものにて、之が決して基督教徒間に存せる主觀的心意の情態ならざりしことは火を賭るよりも明なり（哥林多前書二章四節を看よ亦十二章十一節を同章六節と比較せよ）

是に由て之を觀れば初代基督教徒の意識に準へばキリストは肉にて現はれたる神にして聖靈は心中に活動せる神なること明なり、之を以て聖靈は父或はキリストの中に埋没して更に識別し得べからざる如き者たらざりしや明なり、此三者は常に鼎立して其間上下の別なきこと猶ほ哥林多後書十三章十四節に記されたる祈禱に於て然るが如し、其語に曰はく「願はくば主イエス、キリストの恩と神の愛と聖靈の交際爾曹衆と偕に在らん」とをア・メン」と哥林多前書十二章四節より六節に至れる文辭は古來三位一體的思想を表明せるものと爲らる、これ亦父キリスト聖靈の三者鼎立するの姿を呈するものあり、斯く云へばとて予は固より新約聖書中より發達せる三位一體の教理を探し出し得べしと信するものに非ずと雖ども予は新約書時代の教會が父、子、聖靈を以て神が生命と力との泉源と見做したることは毫も疑なしと信せざるを得ず是他なし當時の基督教徒は其實行的生涯に於ては能く三位一

體を承認せりと雖も基督教徒の思想當時熟達せざるを以て三位一體の信仰が未だ教理的形式とは化せざりしなり、されば當時既に三位一體説を構成するに足る原料的思想の實在せしや明なりと雖ども、思想の幼稚なる能く原料的思想を整備統一し得ざるを以て、原料的思想が秩序なき混沌の状態に存じたりしと云ふまでなり、此間にありて基督教徒等が堅く立ちて以て、動かざりし信仰は神は獨一なりと云ふにありたり。

以上論究せる所は之れを要するに三位一體の教理は其發生するや哲學の思辯に基するに非ずして初代の基督教徒及び教父等が有せる基督教的意識に胚胎せりと云ふにあり、予素より不文なりと雖ども蓋し此意を判明し得たりと信ず、想ふに初代基督教徒等が神肉となりてキリストに在せしと觀せし信仰は三位一體の教理の因て起りたる泉源にしあれば、後世三位一體の教理なるものが遂に智識的に構成せらるゝに當りて、哲學より助成せられたる事、頗る大なりとするも、哲學の助力たるや單に下流に過ぎずと云ふべし。事實既に此の如し、而して海老名氏も明言せるが如く此の信條が遂に「羅馬帝國の思想界を征服することを得」たり、吾人單に此一事を以てするも是れ三位一體の教理が其大要に於ては眞理なる事を證明するものに非ずや、抑も基督教の世に出づるや時恰も哲學旺盛の機に會したれば基督教内の學者盡能く當時流布せる希臘羅馬の哲學を研究し其眞理は之を容れ、其妄は之

を發き、以て哲學者輩の基督教に反對せる所に應ぜんと務めたりき此時に當り基督教内の學者は世の識者たり思想家たる人々に向ひて基督教の合理的なるを辯明し漸く思想界に立脚地を樹立するを得たり。然り基督教の世に出づるや諸種の哲學と智力上の戰鬥を爲し哲學に存せる眞理を能く含味すると共に亦等しく其誤謬を排せざるべからざりしなり、彼等之を爲すに際し據りて以て彼等の楯と爲したるものはキリストにありて現はれたる神に關する三位一體の教理とキリストによりて完成せられたる救たりしなり、吾人は彼等が此の兵器によりて遂に戰勝を奏するに至れること深く記するに足るものありと云ふべし、吾人は單に此一事のみを以てするも世人の喋々するが如く三位一體の教理虛妄淺薄ならざるを證し得て餘ありと信ぜざるを得ずヘゲル曾て云へる事あり「哲學にありては自然及び精神界の内容は何れも皆絶對的眞理と見做すべき此中心に集注す」と蓋し哲學が三味一體の教理に重きを置く所以のものは主として此教理には神を概念するに當り其内に存する統一の要素と自己を識別するの要素とが共存するが故なり。固より時と所の異なるに隨ひ此眞理を表明せんとて用ゐらるゝ哲學的形式は種々變化することありとするも、神には三種の永遠なる區別ありしと見做す是吾人の斷定なり。然り此區別あるが故に神は父、子、聖靈として自己を人類に啓示するを得たりと斷ずるは是れ蓋し神の永遠なるが如く永遠なる眞

理たるべしとは予の堅く信ずる所たり固より今日となりてはバルツナなる語は既に陳腐に屬す語義漸く變じ來りたるに今に至るも尙ほ此語を用ゐる時は稍々誤解を招くの媒介とならんことを恐る然りと雖ども神學者輩が三位一體論を爲すに當りてバルツナてふ語を用ゆる時は是れ彼等是一種特殊の意義にて此の語を術語として用ゐるものなる事を忘るべからず目下吾人は三位一體の教理を執ると雖ども是れ此の教理を以て神を最とも精覈に叙述せるものと明言するものに非ず、フイリプスブルツタスの云へるが如く吾人の目的は貨物を登録するが如く神を目錄書きせんとするにはあらで、神が自己に關し啓示せる事實を根據として論斷すれば、吾人の神に關する智識は如何なるものとなるやを記述するにあればなり、吾人熟ら考ふるに近世科學が深遠なる生命の法則に關して明示する所其大要に於ては亦此三位一體の教理と能く和合するものあるを覺ゆ、何ぞや、抑も近世科學の告ぐる所に據れば生命なるものは高級の位置に上進するに従ひ、生命の内には複雑と統一とが益々能く併立するに非ずやロバートソンが「神の偉大は夥多を統一するに存せずんば非ず」と云へるも蓋し此意を明言せるに外ならざるなり。

思ふに吾人神を三一的に概念するに非ざれば何等の教理を案出すとも到底基督教的意識を満足せしむるの時なからん、蓋し吾人の思想は超越的神を要求す吾人の心情の欲する所亦

之に外ならず、神若し世に超越する事なからんか吾人は遂に神を禮拜し得ざるべし、然りと雖ども吾人は亦内在的神を要求す吾人の罪を犯すや人を憐み給ふ神を欲す、吾人の荏弱なるや人類と同情者たり得る神の近きに在して敢て其身を吾人の卑きに就しめ吾人と休戚を與にし、能く愛の力によりて吾人を率ゐて己の許に至らしむる神の存せん事を要求す、此故に吾人は如何にもして聖なる神と罪に浸潤せる人とを結合せしめざるべからず、蓋し此二者を結合せしむるを能くするもの獨り神あるのみ而して神は實に之をイエス、キリストにありて完ふせられたり。論じて此に至れば予は敢て海老名氏に告げんと欲す、海老名氏よ貴下も予も共に等しく罪を犯したれば貴下も予もキリストと同一の意識を保有せんことと是れ全然不能事なり、吾人若し罪てふ一語に含蓄せらるゝ意義を全然了解し來らんか其意義の明かなるに従ひ吾人の保全すべき正義なるもの、神より出でざるべからざるの必要を感ずること愈々切なるを覺ゆ、更に進んで吾人此正義を實有せんと欲し、尙ほ勇進して神の生命にまでも昇らんと欲せば吾人は實に理想的人物以上の者を得ずんば止まざる蓋し自然の勢なりと云ふべし是を以て古今に亘れる基督教の意識は皆等しく此理を感ぜしものにて神は人類を自己の高きに引き揚げんとてキリストに在りて反て自己を卑きに就かしめたりとの事を承認せざるはなし、吾人は聖靈を以て神の吾人に内住するものにて「神その

善旨を行はんとて我儕の衷に働き我儕をして志を立て事を行はしむる」者なりと信ず。以上の如く神を以て超越的なりとし亦内在的なりとし更に自啓的なりと見做すものは是れ正しく三一的神にして最も能く吾人が靈魂上の深遠なる思想を充たすに足る、此故に神自己を啓示するや三種の方法を執れりと断定するは是れ神が三重に實在せりと観するも毫も差異なきや明なり、何となれば事物の實在するが如く他に向て之を啓示せざる時は之を啓示と稱するの極めて虚妄なるを知ればなり。



## 海老名彈正氏の三位一體論

護教主筆 高木 壬 太郎

海老名彈正氏の三位一體論出てより福音新報は既に二回の社説に於て之を評論し、毎週新誌記者亦前週より論評の筆を染めたり。海老名氏の論文は毎週新誌記者の云へる如く、實に近來の大議論にして我國の基督教會に及ぼす影響も定めて大なるとなるべし。思ふに氏の議論は我國神學界波瀾の導火線となりて、是より論議の花を咲かすともあるべし。吾人は讀者が此等の現象に注意せられん事を望む。

吾人は既に前號に於てロゴス論の出處に關する氏の所見の端緒を紹介したり。即ち氏の所見に従へばロゴスの思想なるものは神と天地、超絶神と萬有、猶太教と異教とを結合する爲め案出せられたるもの也と云ふに在り、而して此思想は如何にして吾人に適用せらるゝに至りしや、須らく氏に聞くべし。氏云く、

當時の基督信者は其宗教的意識を前述の哲學思想に由て解釋せんを試みた。其思想といへば即ちナザレの耶穌キリストに由て至善の神と一致和合することを得た所のものである。耶穌キリストは實に神と人とを結合した所のものであればさて其の性情人格は何であらうか是れ彼等が論究せずには居らぬ所であつた。神と天地とを結合するの力は即ちロゴスであれば神と人とを結合する人格も亦ロゴス其ものでなければならぬといふは最も推測である、基督徒が其神と一致和合した所の宗教的意識を解釋するには當時の哲學思潮の勢をうけてイエスを以てロゴス其物の顯現と斷定

するより外はなかつたであらう、さて此ロゴスが若し受造物であつたならば基督信者は未だ永遠の神と結び居るさはいはれない、乍去其意識に尋ねるときは確實に神と結び居るや疑ひなかつたならばロゴスは假令如何なる尊嚴を有するものであつても受造物である上は基督教徒の意識を満足に解釋することは出来ぬのである、アリヤン派のロゴス論が(ロゴスを受造物と主張する論)敗れてアタナシヤ派の主張が勝利を得たのは取も直さず基督教の勝利といふべきである、蓋しアタナシヤ派はロゴスを以て神より出でたる神光より出でたる光と主張したからである、爰に天地の上に超絶する父と天地の中に偏在する子とが一身同體の神たること認識せられて始めて猶太教にもあらず異教にもあらず基督教有神論が明確に認定せられたのである又基督信者の新意識は明に一神崇拜の意識である、然るに當時彼等は基督崇拜をなすつたあつたから若しロゴスが神其ものでないならば彼等は多神教の信徒たる譯だけれども多神教は彼等の厭惡する所であつたからロゴスを以て神其ものとせずにはあらなかつたのである、そこでロゴスと基督とを一身同體と認定するに同時に亦ロゴスと神とが一神同體であることを認定するに至つた、基督教徒の宗教的意識は永久絶對の安心を自覺する者である、此安心は耶穌基督に由て得た所の者であればもし基督が無上の神と同體なるロゴス其ものでないならば其安心は決して絶對の安心とは謂はれない、絶對の神に由れる安心であつてこそ始めて永久不易なれ、若し受造物によるものならば假令天使長の尊榮を有するものであつても未だ以て眞の安心とはいはれない、是れ其キリストとロゴスを結び付け又ロゴスを以て神の分身と尊崇したる譯である、又基督教徒はキリストに由て絶對の安心を得た以上は其信奉する所の宗教の絶對的價值あることを論證せねばならぬ古の聖賢が永恒の眞理を教示して人々に安心を與へた事は基督教徒の承認する所であつた、然かして其眞理は天地の理性なるロゴスの感化に由て發揮せられたものだといふことは異教哲學の風に論及したのであつたから基督教徒は此世界を照らしつゝあつた所のロゴス其ものは絶對的に又圓滿に耶穌キリストとなつて現はれ古聖賢に由つて闡明せられた片々の眞理は悉くキリストの一身に具備完成せられたと論斷せざるをえなかつた、左らば基督はロゴス啓示の絶頂である、故に基督教の集合し來る燒點であつて即ち絶對的宗教なること明白である、嗚呼大なるかなロゴスと耶穌とを結び付たる思想、羅馬天下の思想界を併呑した偉大の思想即ち此思想であつた、靈魂が人體を取つて人間界に生活するといふ思想は當

時哲人の殆んど普く採用した所でヒタゴラス派は靈魂の輪廻説を主張しプラトン派は上天の英靈が罪惡を犯したるの故を以て肉體を以て人界に墮落したと論じた、人魂過去の存在は獨り異教哲學の主張したばかりでなく猶本人フィロソフは創世紀第一章の神の肖像を有する人第二章の塵埃を以て作られたるアダムとの間に區別を立て前者は後者の標準にして上天に存在するものであるといふたボロは此理想標準なる天上の人が肉體を取て世上に顯現したるもので取りも直さずキリストと思つたのである、左らばロゴスが肉體を取つて人間に生活するが如き思想は容易く了解せられ得べきものであつて當時化身論は何も六ヶ敷問題ではなかつた、唯ナザレの耶穌が活ける神の化身であつたかいつたかといふことが信者未信者の區別せらるゝ所であつた異教哲學はアポロニオスのチエラを以て活ける神の化身と主張したのである、

以上は即ち海老名氏のロゴス化身論也。一言にして之を約すれば當時既にヒタゴラスの靈魂輪廻説、プラトン、フィロソフ等の思想普く行はれ居りし時なればロゴス化身論を信ずると決して難事に非ず、而して當時の基督信者はナザレのイエスに由て神と一致和合せりとの意識を有するに至りしかば、此和合の媒介たるものはロゴスならざる可らずと推定するに至れり、然れ共ロゴスにして受造物なりとせば完全に彼等の意識を満足すると能はず、是に於て遂にロゴスなる耶穌を神と崇むるに至れる也といふに在り。氏がロゴス化身論の進化的發達をどくと誠に巧也といふべし。然れ共是れ果して公平に史的事實を解釋したるものなりや。若し新約聖書の歴史的價格を否定せば即ち止む。苟くも之を是認すとせば書中の記事は明に當時の基督信徒が疾くより基督に信事し、之に無限の服従を爲したりしを示

せるを知るべし。海老名氏は蓋し事實を顛倒せり、氏以えらく當時の基督教徒は先づ思辯的に研究して神人和合の媒介たる基督をロゴスとなし、次に之を神となし、斯の如くしてロゴス化身論を案出せる也と。然れ共事實は之に反せり。彼等は先づナザレのイエスに於て神を見たり、之に信事したり、而して彼等は此信仰を説明せんとして當時流布したるロゴス論を假用したる也。故に試に當時流布したる思辯的ロゴス論と基督教のロゴス思想とを對照せよ。其間に著しき相違あるを認むべし。例之約翰ロゴス思想の出所也と假定せられたるフィロソフの神なるものは全く超自然的なれ共、約翰の神は愛也。フィロソフのロゴスは人格を備へたるが如く、又備へざるが如く至て曖昧なれ共、約翰のロゴスは明白に人格を備へたる基督也。フィロソフのロゴスは理性を意義するに過ぎざれ共、約翰のロゴスは神の道也。フィロソフの化身的感念は全然ノステックなれ共、約翰の感念は全く之に異れり。要するに約翰は基督なる一大人物を記載するに方りロゴスなる名辭を假用したるものにして、其思辯的思想を襲用したるものに非ず。然るを基督教の思想を以て思辯的の結果に出でたりとなすが如きは事實を誤れるものといふべし。

氏は進んで三位一體論の發達に就て述べて云く、

基督教は基督より發生して今日に至る迄二千年の久しき尙其生長發達を止めぬ所の偉大なる宗教である、ロゴス論は

基督教を以て永世顯現の事實を解釋せんことを欲したる時代思想であつて基督の自ら啓示せられたものではなかつた、是れ吾人が最初から承知して置くべきことである、基督は曾て三位一體の教義を以て人の是非曲直を定め玉ふたとはなかつた、又是を以て信徒未信徒の別をなし給はなかつた、三位一體の教義の如きは其念頭にだも浮ばなかつたであらう（馬太傳結尾に父と子と聖靈云々は教會の聲であつて後年附加したものである）、耶穌は唯其メシヤたることを公言し玉ふたばかりである、メシヤとは猶太の王といふ義、又た神の子といふもメシヤといふ義を同一て萬々ロゴスの意識ではなかつた、キリストの十二使徒は耶穌の公言を信じて彼のメシヤたるを認めて其の再來を翹望したに過ぎぬ、當時基督教徒たるを表白する信徒はナザレの耶穌猶太の王メシヤであるとの一ヶ條であつた、彼等固より三位一體の教義は知らなかつた、パウロは一步を進めてナザレの耶穌を以て上天の標準的人格の化身と認めたのである、併し彼は基督を其主であることのみで嘗て神と尊稱したことは勿つた、彼もニケヤ信條の主張者ではなかつた、約翰傳の著者に至り始めてロゴスとナザレの耶穌とを結び付けたのである、併し其ロゴスは神と稱してあるけれどもドゴ迄も天父に劣れる者とせられた故に著者はロゴス從屬論を主張する者であつたことは間違ない、ニカヤ信條の確定せらるるまで實に三百年の久しきロゴス論は基督教會内に於て異説紛々であつた之に由て之を觀れば三位一體の教義あつて而して後基督教徒あつたではない基督教徒あつて而して後此教義の言明せられたといふことは明白である云々

即ち氏の説に依れば耶穌は唯自己のメシヤたることを公言し玉ひしのみ、其メシヤといふも神の子と云ふも單に猶太の王といふ義に過ぎず、十二使徒なるものも唯メシヤたる耶穌の再來を翹望したるものにして彼を神と崇めたるとなし、保羅は一步を進めて彼の標準的人格の化身を認められ共會で神と稱したるとなし、約翰傳著者のロゴスなるものも神に從屬せる者たるに過ぎずと云ふに在り、是れ果して忠實に新約聖書の記事を解釋したるもの

なりや、凡そ公平なる歴史家なるものは事實を研究する前に何等の哲學的見解をも有すべからず、夫のパワーが初代基督教會の發達を序するに方り大なる誤謬に陥りたるものは彼がヘーゲル派哲學の感化を受け一種の思辨的見解に由りて之を解釋せんとしたりしに由らざればならず、海老名氏が先づロゴスの思想は畢竟當時の時代思想にして猶太教と異教の思想を調和せん爲に案出せられたるものに過ぎずとの前提を置きて其三位一體論を立てたるは、是れ先づ一種の思辨的見解を立て、歴史の事實を解釋せんとしたるもの也其歴史的事實を觀察するの粗漏にして誤謬多きは恠しむに足らず、吾人は今左に氏の所論の甚だ脆弱なる所以を示すべし、氏が「基督は曾て三位一體の教義を以て人の是非曲直を定め玉ふとはなかつた」云々と云へるは是れ正しく吾人が既に讀者に紹介したりしハーナック博士の所論と同一にして、吾人も亦氏と共に基督が三位一體なる文字を用ひ、又之を以て信徒未信徒の區別を爲したるとなしとの事を承認するもの也、三位一體の教義が後世教會の發達に係るは云ふ迄もなし、然れ共吾人の論點は此處に在らず、基督は果して神也との意識を有し無限絶對の服従を要求したりしと之れなかりしや如何と云ふに在り、若し之れありしとせば假令彼が三位一體の文字を用ひざりしとするも斯る教義の發達するは自然の數也といふべし。海老名氏は以てらく、耶穌は唯メシヤなることを公言し玉ひしのみにして、メシヤ

と云ふも神の子と云ふも猶太の王といふ義に過ぎずと、氏は造作もなく此の如き断定を下したれ共、苟しくも斯る重要な點に關して一の斷案を下さんとせば須らく慎重の態度を取り最も明白に之が證明を爲さざる可らず、氏が耶蘇が自らを神の子也と稱したりしはメシヤ的觀念を顯はしたるに過ぎずと云へるが如きは粗笨極まれる斷定也といふべし、抑も「神の子」なる明辭は決して新なるものに非ず、舊約聖書に於て既に使用せられたるものにして、舊約に在ては單にメシヤ的觀念を顯はしたるものに過ぎざりしは明也、新約聖書に在てもナタナエルが「ラビ、爾は神の子也」と云ひ、ペテロが「爾はキリスト活る神の子也」と云ひしが如きは單に彼を以てメシヤとなしたるに過ぎず、而して基督は己を神の子と呼びたりしのみならず、又天父の旨を行ふ者をも均しく神の子と呼びたりしとは明也、然れ共彼は又一種特別なる意義に於て自らを神の子と呼びたり、彼と天父との關係は超越無比也、即ち彼は屢々神を呼びて「我が父」となせり、(馬太七の廿一、十の卅二、卅三、十五の十三、十六の十七、十八の十九、卅五、廿五の卅四、馬可八の卅八)而して彼は其弟子等に向ひては神を「我等の父」と呼ぶべしと教へたりしに拘はらず、自らは曾て斯の如く呼びたりしとなく、常に明に「我父」と「爾曹が父」とを區別したり、又人類は神の子供也、然れ共基督は子也、即ち人類は神の旨を行ふとに由りて神の子供となり得べしと

雖も是れ唯比較的の意義に於てのみ然り、基督に於ては即ち然らず、彼は最も高尚なる創始的の意義に於て「神の子」たる也、馬太傳十一章廿七節は即ち基督と神との特一なる關係を云ひ顯はせるもの也、吾人は之に依りて彼と父との關係を二様に觀察し得べし、即ち(一)子の外に父の奧義を知るものなし、(二)父の外に子の性質の奧義を知るものなしとの事是也、是れ明に基督が絶對的の意義に於て「神の子」たりとの意識を有せるもの也、然れ共此聖句は果して基督が自ら神也との意識を有したりし證據となし得べきやに關しては古來異説なきに非ず、バインシラックが之を以て單にメシヤたるの意識を云ひ顯はしたるに過ぎずとなせるは云ふまでもなし、ザアイズの如き三位一體の教理を信するものさへ之に依りて直ちに神と基督の同體を假定するが如きは非歴史的解釋說に過ぎずと云へり、去れば吾人は以上の聖句は基督が神たりとの自覺を有したりしとの事を十分に證明すると能はずと假定すべし、而かも吾人は之に依て直ちに基督が斯る意識を有したりしとなしと断定すると能はず、何となれば吾人は福音書を讀で更に驚くべき基督の自覺を發見すれば也、是れ即ち罪なしとの意識にして彼が此の如き自覺を有したかしは誠に驚くべき事實といふべし、尤も吾人は共觀福音書中に基督自ら之を明言したる跡を見る能はずと雖も、彼が此意識を有したりしは其平生の行爲に於て之を見るを得べく、且彼が一生の事業は畢竟此自



覺に基せるを發見すべし、是れベイシラツクさへも否む能はざる事實にして若し果して罪なしとの自覺を有したりとせば彼が人間以上の性質を有したりし事も亦明也、使徒保羅は復活の事實に依りて基督の神性を證したり(羅馬一の四)、然るに基督は自ら其復活の事實を豫言したり(馬太廿の十九)即ち彼は甦るべしとの事を自覺したる也、此の如き自覺は果して人類の有し得べき處なるか、又基督は其遍在を明言せり(馬太十八の廿)、是れ豈人間以上の意識を有するものにして初めて有し得べき所には非ざるか、抑も亦彼が人類に向けて絶對的服従を要求したるが如き(馬太十の卅七—四十)、人の運命は彼に對する態度の如何に依て定まるべしとの事を確言したるが如き(馬太廿五の卅五、路加十二の十一、廿七)其再來を豫言したるが如き(馬太廿四の卅)、又天使の上に權を有するの自覺を有したりしが如き(馬太廿四の卅一)、豈彼が人類以上の意識を有したりしを證するものに非ざるか、夫のバプテスマの様式(馬太廿八の十九)の如き海老名氏は之を以て教會が後代に至り附加したるもの也といふ、假りに此説をなして眞ならしむるも一神教を信じたる猶太人より成れる初代教會が斯る觀念を有したりしは基督自ら之を云ひ顯したりと信ずるに非ずんば解するに能はず、故に之を以て直ちに基督の言也となすも吾人其不可を見ざる也、吾人は以上の理由に依りて海老名氏が造作もなく耶蘇は唯メシヤたるとを公言し玉ひしのみと斷

定せるを以て公平に歴史的事實を觀察したるものに非ずと斷言するに躊躇せざる也若し夫れ十二使徒等の基督觀に至ては更に次號に於て論ずる所あるべし。

吾人は前號に於て基督の意識に關する海老名氏の所論を評したり、今は進んで使徒の基督觀に關する同氏の所見を吟味すべし

基督の十二使徒は耶蘇の公言を信じ彼のメシヤたるを認めて其の再來を翹望したるに過ぎず當時基督教徒たるを告白する信仰はナザレの耶蘇は猶太の王メシヤ也との一ヶ條なりきとは海老名氏の所論也、然れ共最も公平に最も冷靜に新約聖書を讀むものは氏の所論に満足すると能はざるべし、何となれば新約聖書の記事は明に初代使徒が耶蘇を以て唯にメシヤとなしたりしのみならず、彼等の爲に其生命を棄て死より蘇りて神の右に座し玉へる主也となしたりしを證すれば也、假令ステパノが其死するに臨み、祈りて「主イエスよ我靈魂を納け玉へ」と云ひしが如き(使徒行傳七の五十九)、使徒ペテロがコルネリオに向ひて「此イエスは萬物の主たる也」と云ひしが如き(同十の卅六)當時既に耶蘇を以て主となし、神となすの信仰使徒等の間に起りたりしを證するに非ずや、而して此主なる言の原語クリオスはエホバなる希伯來語に代用せるものなりしを知らば又以て彼等が耶蘇を主となしたりし信仰の那邊に存在せしかを知るべき也、

吾人は更に進んで初代使徒の代表者とも云べきペテロの認めたりしと信せらるゝ其書翰に就て彼が基督觀を見るべし、彼得後書に關しては其確實を疑ふものあるを以て吾人は之を措て取らざる可し、唯其前書に就て之を見るも吾人は彼が耶蘇を以て唯メシヤとなしたりしのみ非ざるを知る也、彼云く「爾曹嘗ひて主を仁ある者と知りたらんには斯の如くすべし、主は人に棄てられ玉へと神に選ばれたる貴き活石也」と(二の三、四)「嘗ひて主を仁ある者と知る」と云へるは即ち詩卅四篇八節の言にして素よりエホバなる神に就て云へるもの也、然るをペテロが之を移して耶蘇基督に適用せるは彼を以て主也となすが故に非ずや、ペテロは又云く「イエス、キリストは天に往きて今神の右に坐せり、諸の天使權威ある者能ある者彼に従ふ也」(三の廿二)と、是豈耶蘇に至上の權あるを認めたるに非ずや、其他ペテロが一章十一節にキリストの靈預言者等の衷に在りと云へるは基督の豫在を示せるものにして、一章二節に「父なる神福音に順はしめイエスキリストの血に灑がれしめん」とし其預め知り玉ふ所に循ひ靈の聖潔をもて選び玉ひし人々」云々と云へるは殆ど三位一體を承認するが如しと云ふも不可なし、吾人若し仔細に是等の聖句を點驗し、且初代使徒等が基督に對せる態度如何を學ばし彼等は實に耶蘇を以てメシヤとなしたるのみならず、又實に彼を主とし救主とし神としたりしを知るべき也、吾人が紹介しつゝある「ハナツク

博士も此點に關し亦實に左の如く云へり、云く「初代教會が耶蘇を主と呼びたりし所以のものは彼が彼等の爲に其生命を棄て、死より蘇りて神の右に坐し玉へりとの事を確信したれば也、初めて基督の死及び其蘇生の重要なる事を明示したりしは使徒保羅に非ず、彼は唯之を承認するに於て初代使徒と同一の立場に立ちたりしに過ぎざりしとは最も確實なる歴史的事實也」と、又云く「吾人は人類歴史の何處にか其主と共に飲食し、彼の人間たる特點を認め、而して之を以て唯に大預言者、大教師となすのみならず、歴史の主治者、萬物の創造者、新生命の源と仰ぐが如き例を求むるを得んや、或は云く、是れ唯メツシヤ的觀念を耶蘇に移したるのみと、然れ共此の如きは未だ以て此事實を解釋するに足らざ」と、蓋し海老名氏は耶蘇復活の事實さへ之を疑ふに似たり(曾て新人紙上に載せたる氏の説教に由りて推察するに)、氏が此等明白の事實を認めずして初代の使徒は耶蘇を以て單にメシヤ也となしたるに過ぎざると断定するも驚くべき事に非ず、然れ共是れ決して公平なる歴史家の取るべき位置に非ざる也、吾人は尙次號に於て保羅及び約翰傳著者の基督觀に關する海老名氏の所論に就き論ずる所あるべし。

海老名氏が使徒保羅の基督觀に關する所見は即ち左の如し

パウロは一步を進めてナザレの耶蘇を以て上天の標準的人格の化身と認めたのである、

しかし彼れは基督を其主であると云つたのみで、嘗て神と尊稱したとはなかつた、福音新報記者が此點に關し「此はベイシラックが哥林多前書第十五章に第二の人は天より出てたる主也とあるを牽強して唱へし説と同じく、其基礎は極めて薄弱也と謂はざるべからず云々」と云へるに對し海老名氏は本月刊行の新人紙上に於て「吾人は強ちにベイシユラハの説に倚頼するものに非ず、吾人は吾人の論據の動かすべからざるものあるを認めしかいふ也」と云へり、是れ如何にもしかあるべき事にて、海老名氏程の人物が徒に他人の説に依頼すべき等なく、必らずや吾人を信服せしむる程の大議論あるべしとは吾人の信ずる處なれ共、唯吾人の之を聞くを得ざるを遺憾とするのみ、然れ共ベイシラック、パウロ、ホルステン、フライデル等が哥林多前書第十五章四十七節の言を以て、保羅が耶蘇を以て上天の標準的人格の化身と認めたる也と爲せるは果して正當に保羅の思想を解釋したるものなりや甚だ疑はし、蓋し此等の諸學者が斯る結論に達したるものは、夫のフィロソフが創世記第一章に記せる神の肖像を有する人と、第二章に記せる塵埃を以て造られたるアダムの間に區別を立て、前者は後者の標準にして上天に存在せるもの也と解説したるより、保羅は基督を以て直に此標準的人格の肉體を取りて地上に來りたるものとなせる也と思惟したるに在り、海老名氏は此外如何なる論據に依りて保羅はナザレの耶蘇を以て上

る點が此處に在りしは氏自ら言ふ所に依りて徴すべし、然れ共此等諸學者論點の薄弱なる所以は第一、如何にして第二のアダムは初めに造られたる第一のアダムより化成し得たりしやを詳にする能はざるに在り、次には元來此フィロソフの思想なるものはプラトンの觀念論より出て來りたるものにしてプラトンの觀念は理想と實在の間に彷徨せるもの也、然らば此の如き觀念は如何にして標準的人格となり、而して遂に歴史的基督と同一視せらるゝに至りしや、是れ吾人の解釋し得ざる處也、而して第三には保羅の思想中にはフィロソフのロゴス思想は其痕跡だも發見し能はざる事也、蓋し哥林多前書十五章四十七節に「第二の人は天より出てたり」(「主也」の文字は信據すべき原本になし、ウエストコット及びホードの採用せる希臘文然り、英語改正譯亦之に従ふ)とあるは基督の化身的人格の根源を指せるに非ずして、復活せる基督の根源天に在るを云へるものなるも明也、基督の如く人類の爲に贖罪の道を聞き、蘇りて天に昇るとは肉より生れたる人類の爲し得べき處に非ず、唯天より來りたるものにして初めてなし得べき也とは即ち保羅の云はんとしたる意義也、之を以て直ちにフィロソフの所謂標準的人格の肉體を取りて地上に來りたるを云へる也となすは決して保羅の思想を正當に解釋したるものに非ざる也、今假りに一步を譲りて論者の言是也とするも吾人は唯此一ヶ處に依りて保羅の思想を斷定すべからず、吾人は更に基督に

天の標準的人格の化身と認めたる也と云ひ得るか吾人之を知らずと雖も、氏の論據の重なる關せる保羅の多の言を點驗し、其書翰全體の傾向に依りて彼が基督論の如何なるものなりしやを斷定せざる可らず、夫の羅馬書九章五節に保羅が「肉體に依て云へばキリストも亦彼等より出づ、彼は萬物の上に在りて世々讚美を得べき神也、アーメン」と云へる言に就ては註釋學者の間に異說少からず、近時サンデーは希臘語の文法學上より前後思想の關係より及び保羅全體の思想より推究論斷して是れ疑もなく基督の神性を公言したるもの也と斷定したれ共、マイヤーの如き有名なる註釋學者は寧ろ之を以て神を讚美したるものと解釋するを以て可也となせるを以て吾人は斯る疑惑ある言語に依り保羅の思想を斷定せざるべし、然れ共假令之を外にするも吾人は保羅の基督神性論を疑ふと能はず、何となれば保羅全體の思想は明に基督を神と認むることを示せば也、例之羅馬書一章四節に「聖善の靈性に依れば甦りし事に由りて明に神の子たること顯はれたり」と云ひ、同八章三節に「己の子を罪の肉の狀となして罪の爲に遣はし」と云ひ、又加拉太書四章四節に「期至るに及びて神其子を遣はし玉へり、彼は女より生れ且律法の下に服したり」といふが如き何れも特別なる意義に於て基督の神子たるを認めたるもの也、更に明なるは保羅が天地創造を以て基督に歸したると也、即ち哥羅西書第一章十五、六、七節に左の如く云へり、云く「彼は人の見ることを得ざる神の狀にして萬の造られし物の先に生れし者也、彼は彼に由て萬物は造られたり、天に在るもの地上にあるもの人の見ることを得るものを見ることを得ざるもの或は位ある者或は主たる者或は政を執る者或は權威あるもの萬物彼に由りて造られたり、且其造られたるは彼が爲也、彼は萬物より先に在り、萬物彼に由て存つことを得る也」と、是豈基督の神なる權威を認めたるものに非ずや、又腓利比書二章六節には「彼れは神の體にて居りしかども自ら其神と匹く在る處の事を棄て難き事と思はず反て己を虚ふし僕の貌を取りて人の如くなれり」と云へり、爰に「體」と譯せる原語モルフィーは本質の顯現と云へる義にして、即ち元來神の本質を所有せるの義也、亦以て保羅の基督が唯に標準的人格の如きものに止まらざりしを知るべし、然るに海老名氏は此點に關し福音新報に答へて「ピリピ書が果してパウロの手に成るや否やは大家の疑を容れし處、よし之をパウロの書とするも吾人の標準として掲げられたる基督は決して第二位の神を指すものに非ず、是れ即ち標準的人格を云へる也、去ればこそ其爲す處吾人の標準たるを得るなれ、第一のアダムは神ならんとして罪惡の人となりぬ、第二の人は神ならんとするの野心を抱かず、寧ろ讓りて十字架の死をなめぬ、之に依て彼が諸の名にまさる名を神より享けたりと記さる」と云へり、先づ第一海老名氏がピリピ書がパウロの手に成るや否やは大家の疑ひし所と云へるは皇張誇大

を得ざる神の狀にして萬の造られし物の先に生れし者也、彼は彼に由て萬物は造られたり、天に在るもの地上にあるもの人の見ることを得るものを見ることを得ざるもの或は位ある者或は主たる者或は政を執る者或は權威あるもの萬物彼に由りて造られたり、且其造られたるは彼が爲也、彼は萬物より先に在り、萬物彼に由て存つことを得る也」と、是豈基督の神なる權威を認めたるものに非ずや、又腓利比書二章六節には「彼れは神の體にて居りしかども自ら其神と匹く在る處の事を棄て難き事と思はず反て己を虚ふし僕の貌を取りて人の如くなれり」と云へり、爰に「體」と譯せる原語モルフィーは本質の顯現と云へる義にして、即ち元來神の本質を所有せるの義也、亦以て保羅の基督が唯に標準的人格の如きものに止まらざりしを知るべし、然るに海老名氏は此點に關し福音新報に答へて「ピリピ書が果してパウロの手に成るや否やは大家の疑を容れし處、よし之をパウロの書とするも吾人の標準として掲げられたる基督は決して第二位の神を指すものに非ず、是れ即ち標準的人格を云へる也、去ればこそ其爲す處吾人の標準たるを得るなれ、第一のアダムは神ならんとして罪惡の人となりぬ、第二の人は神ならんとするの野心を抱かず、寧ろ讓りて十字架の死をなめぬ、之に依て彼が諸の名にまさる名を神より享けたりと記さる」と云へり、先づ第一海老名氏がピリピ書がパウロの手に成るや否やは大家の疑ひし所と云へるは皇張誇大

の言と云はざる可らず何となれば腓利比書の確實なるとは殆ど凡ての批評家の許す處にして唯之に反對したる大家ともいふべきはパウロあるのみ而してパウロの反對なるものも其基礎薄弱にして取るに足らざるはフリーク、ヒルゲンフェルト等の夙に論じたる處也、そは兎に角氏が保羅の此語を以て基督の神性を承認したるに非ず、唯彼が標準的人格を指せるのみと云へるは大膽も甚しといふべし、前既に云へる如く「神の體」とは神の本質の顯現の意にして氏の所謂標準的人格の義あるとなし、且夫れ保羅が此處に述べんとしたりしは基督の謙遜也、若し氏の云へる如く基督は神に非ずとせば彼の棄て難き事と思はざりしと保羅の云へりしは果して何物なりしや、若し標準的人格なりしとせば肉體となりし基督は標準的人格以下の人物なりしか、要するに氏は吾人の既に屢々云へる如く、一種の哲學的思辯を持し、聖書を取て之に附會せんとするが故に斯る勝手なる解釋をなすとなれ吾人は先づ氏に向て今一層グラマチコ、ヒストリカル方法に依りて聖書を解釋せられんとを望まざるを得ず、其他保羅が其書翰の前後に加へたる祝禱に於てキリストを父ある神と並列し其恩寵を祈りたるが如き氏の所謂標準的人格としては吾人の到底了釋し能はざる所也、海老名氏は約翰の基督論に關して實に左の如く云へり、云く、

約翰傳の著者に至て始めてロゴスとナザレの耶蘇とを結び付けたのである、しかし其ロゴスは神と稱してはあはれども、ロゴス迄も天父に劣れるものとせられた、故に著者は第四福音書記者がフィロのロゴス哲學の影響を受たりしや否とは、海老名氏と福音新報記者との間に開れたる面白き論戰の一也とす、福音新報記者は以爲らく、ハーナック、ブライズ等の碩學は第四福音書の歴山哲學に感染せし痕跡を認めずと、海老名氏は云く、ブライズの如き保守的神學者は記者の言の如しと雖もハーナックの如きは決して然らず、彼は之を一箇の疑問として残せる也と、斯くて氏は自己と同意見を有せる學者の名を掲げ來りて福音新報記者の史的知識を疑ひたり、然るに福音新報記者は海老名氏の指示したるハーナックの教理史を擧げてハーナックは明にフィロの宗教哲學が初代の基督教徒に影響したる證跡なしと斷言せりと云へり。ハーナックは即ち兩氏の間引張瓶となりし也、誠に奇觀也といふべし、約翰は既にフィロのロゴスと第四福音書のロゴスの間には如何なる相違の存したりしやを指摘せり、素より第四福音書の著者に關しては古來學者の間に議論あり

パウロが之を第二世紀の産物也と主張したりし以來之に附和せる學者甚だ多かりしと雖も近時歴史的研究の結果は之を以て使徒約翰の著作也となすもの多きに至れり、(海老名氏は素より之に同意せざるべし)、今假りに之を以て使徒約翰の著作也とせん、傳説に由れば

約翰は其晩年に及んでエペソに住したりといふ、而して此傳説は歴史的事實として殆ど凡ての學者の承認する處也當時エペソは小亞細亞有名の一都會にして埃及との交通も繁かりしとなれば、歴山哲學も隨て入り來りたりき、此の如き都會に住して約翰が全く之れに無頓着なりしとは思惟し難し、假令グライズが約翰思想の根源を以て單に舊約に在りとなすも吾人は悉く之に同意すると能はず、然れ共吾人は又之と同時に約翰の思想を以て思辨的結果となすと能はず、吾人の既に指摘したる如く、フィローの思想と約翰の思想との間には著しき相違あり、而して一は全く哲學的にして他は全く宗教的也、一は全く思辨的にして他は全く默想的也、要するに約翰の思想は自ら基督に親炙して得たる直覺的、實驗的信仰より來れるものにして、唯此思想を顯はすに歴山哲學の形狀を以てしたる也、換言すれば約翰は自己の思想に衣するにフィローの哲學的衣服を以てしたる也、

海老名氏は約翰傳のロゴスを論じて、其ロゴスは神と稱せらるれ共天父に劣れるものとせられたり、即ち著者はロゴス從屬論を主張せる者也と云へり、吾人が約翰傳のロゴスを論ぜんとするには先づロゴスには二個の方面ありとの事を知らざる可らず、即ち一は豫先存在のロゴスにして、他は化身せるロゴスは也、化身せるロゴスは即ちナザレの耶穌にして耶穌は肉體を有せる人也、バインラックの如きは人なる基督の方面を過重し、約翰傳中の

耶穌は其觀福音書中の耶穌と同じく單に人の子にして、自ら神たるの意識を有したるものと云へり、吾人も亦其觀福音書中の耶穌との間に大なる區別を設けんとするものに非ずと雖も、人たるの意識を看過して、神子たるの意識を看過するに至りては吾人の同意する能はざる所也、抑も海老名氏は如何なる點に於て、又何れに於て約翰傳記者がロゴスを以て天父に劣れる者となしたりと云ひ得るや、氏は明に其箇處を示さざるを以て吾人之を知ると能はずと雖も、バインラックは約翰傳中耶穌が全く人たる意識を云ひ顯はせる箇處を取り來りて、耶穌の天父從屬論を主張したり、假之耶穌が「我が天より降りしは己の意の任を行はん爲に非ず、我を遣はしつゝ者の意のまゝを行はん爲也」(約八の卅八)と云ひ、又「我れ己より言ふに非ず、我遣はし、父我言ふべきと我語るべきとを命じ玉へる也」(十の四十九)と云ひしが如き、又彼が天父に祈りしが如き(十一の四十一、十七の一)は何れも耶穌が天父に從屬せるを自覺したるものと云へり、然れ共吾人が前に云へる如く、是れ唯約翰傳基督觀の一方面のみ、徒に之を過重し、其他の半面を看過するは公平に福音書を解釋せるものといふべからず、他の半面とは即ち豫先存在の觀念にして、耶穌自ら之に關して明言せる箇處は少くとも四箇あり、是れ即ちバインラックの擧げたる處にして「若人の子の故の處に昇るを見は如何」(六の六十二)、「我はアブラハムの在らざりし先きよ

り在る者也」(八の五十八)、「父よ今我をして爾と偕に榮を得させ玉へ、即ち創世より先に爾と偕に在りし所の榮を得させ玉へ」(十七の五)、「世の基を置かざりし先に爾我を愛したれば也」(十七の廿四)とのど即ち是也、此等は著者が耶蘇の口に置ける言にして、著者は自ら其序文に於て其ロゴスの豫先存在説を明にせり、バイシラックは理想的存在の説を造り出して、以上の箇處を最も巧妙に説き去りしと雖も、著者は明に創造の事業を以てロゴスに歸したり、而して此ロゴスは人格を有せる實在にして、單に神の理想の中に存在したるものに非ず、果して然りとせば第四福音書は一方に人なる基督を認むると共に、他方には明に神なる基督を認むる也、其或點に於て天父に従屬せるが如き言語を發見せるは至當のみ、何となれば彼は神の子にして父に非らず、ロゴスの化身にして天父自らに非ざれば也。海老名氏は基督及び使徒等の基督觀に就きて其所見を述べたる後、自己の宗教的意識を公にせられたり、前者は即ち氏の歴史的觀察にして、後者は即ち氏一己の立場也、氏の歴史的觀察に對する吾人の意見は上來述べ來りたるが如し氏一己の立場に對しては如何、吾人は假令氏と信ずる處を異にするものあるも、氏が多年の實驗に依て得たる結果を發表せられたるに對しては滿腔の同情と尊敬の念を以て之を迎へざるを得ず、嗚呼我國基督教會先輩と稱するもの甚だ少からず、而かも能く其神學説を明にし其所信を公にして吾人後進を

導きたるもの果して幾人かある、吾人は或人の如く海老名氏を以て思想の人となし、哲學的頭腦を備へたる人となすと能はずと雖も、氏が孜孜として眞理を研鑽し、而して最も大膽に其所信を公にせらるゝの勇氣に至ては深く敬服する所のものなぐんばあらず、而して氏が今回公にせられたる宗教的意識と稱するものは氏が廿有余年の宗教的實驗の結果に出てたりとせば、吾人は之に向て最も大なる尊敬を拂はざる可らず。

抑も氏が苦心慘憺多年の研究と實驗とを積み得たる結果如何、氏は之に就て語りて云く「余が基督信者となり得たる第一の實驗は天地の神は我君主也と感得したるとにして、第二はゲツセマ子の主禱を實驗したると也、此時忽焉として余が心底に發生したるものは則ち神は我父にして我は愛子なりとの意識にして、此二個の實驗と意識とに依て基督の意識を窺ひ、於是天地の主なる父よと號呼し玉ひし基督の宗教的意識に無限の同情と同感とを獻ずるを得彷彿の間基督を見るとを得たり」と、宗教の極意は神人調和に在り、自己の神子たるを自覺するに在り保羅の所謂「我儕が受けし靈は奴たる者の如く再び懼を懷く靈に非じ、アバ父と呼ぶ子たる者の靈也、聖靈自ら我儕の靈と偕に我儕が神の子たるを證す」との實驗を有するに在り、是れ實に基督教徒の意識と實驗たらざる可らず、海老名氏が得たりと云ふものは即ち是也、吾人不肖と雖も亦聊か此間の消息を解す、吾人の疑問は海老

名氏の彷彿として發見したりと稱する基督は如何なるものなりやとの事是也。  
氏は實に其基督觀を述べて左の如く云へり、云く、

基督には彼れと神と父子有親の意識があつたとは予は疑ふとは出来ない、彼れには最も高遠幽玄なる意識があつた、父の外に子を識るものなく、子の外に父を識るものなしといふ意識は圓滿無碍なる父子有親の境涯に生活するものでなくば決して有するもの出来ないものである、圓滿なる父子有親は何に依て得らるべきかといへば情愴の清かなる外にはあるまい……眞實の子たる意識には眞實の父を呼出す靈氣がある、基督には神子の實相があつた、故に天地の神を自分の父と呼び出し給ふたに相違ない、基督の意識に彼れと神と倫理的父子有親の意識があつた其理由は彼れの性情に形面上的父子有親の關係があつたからであらう、基督に倫理的神子の實相ある其故は其性情に於て神と本體を同ふするものがあつたからといふとは疑はれない、基督は神に對しては子たるの情清く温にして、其父に一番の障礙がなく、又人類に對せられた時は忽ち父母の至情を發して天地萬有を擁育する所の天父の實相を示し給ふのである、予は基督に於て天父の實相を認識せなしてはいられない、是れ彼が眞に神の實相を有する神子であるからと思はれる、基督には二方面がある、即ち神に對しては人、人に對しては神である、此二方面を有するが即ち神の眞子の實相であると思ふ

氏の此告白を讀むものは氏も亦基督の神性を承認するものなるを識得すべし、然れ共基督は如何なる意義に於て神性を有せりや、是れ議論の分るゝ所也、吾人は先づ氏の此告白に於て氏の思想の甚だ不明なるものあるを認めずんばならず、抑も氏が所謂形而上的父子有親の關係とは何ぞ、其性情に於て神と本體を同ふするものありとは何ぞ、一方に倫理的父子有親と云ひ、他方に形而上的父子有親と云ふ、兩者の關係如何、神と本體を同ふする

ものは神には非ずや、若くは神に非ざるものが神と本體を同ふするを得べきや、是等の點に關して氏の所論は甚だ明白を欠けり、然れ共氏の所信は甚だ明也、即ち氏は凡ての義人皆な神性を有すと云へる意義に於て、基督の神性を認むるのみ、古來基督教徒の信じて來りし神子化身の如きは氏の斷じて取らざる所也、氏云く、

乍然予は更に一步を進めて保羅の如く基督は天人の化身であると思惟するこゝは出来ない、何故なれば予は他人の標本たる天人界の存在を信するに能はざるからである、又約翰傳の如く基督はロゴスの化身であるといふとは受け取れない、蓋しロゴスといふものが果して人格を以て現存するや否やは亦吾人の論明するもの出来ない處である、

而して氏は更に進で、進化の法則より之を論ずれば模範的人物は元始に存在せるに非ずして、寧ろ史上に顯現すべきものなりと云ひ、余は神の遍在を信するが故にロゴス論の必要を認めずと云ひ、もしロゴスの化身が一時に止まらば人と神との一致は偶然的のものにして永久的のものに非ず、斯る化身は神が人眞似して人の爲に人の標準を示し玉ふといふ一種の芝居に外ならずと云ひて化身論の信じ得可らざるを論ぜり、氏が化身の思想を信するに能はざる理由は即ち(一)天人界の存在を信するに能はず(二)ロゴスなるものあるや否や論明するに能はず、(三)進化の理法に適はず、(四)神は遍在なるが故に化身の必要なし(五)斯る化身は偶然的のものなるが故に信じ難しといふに在るが如し、吾人は此説の當否を點檢するに當りて、先ず一言すべきものあり、何ぞや、云く、凡そ思想の範圍に於ては



單に解し難しといふの故を以て之を拒否すべからず、少くとも宗教の範圍に於ては然りと  
 の事是也、吾人は天人界の存在をもロゴスの存在をも證明すること能はざるべし、然れ共  
 證明すると能はざるが故に之を信す可らずとせば、吾人は神の存在をも、靈魂の不滅をも  
 拒否せざる可らず、是れ豈宗教家の事ならんや、吾人は氏が天人界の存在、ロゴスの存在  
 を論する能はざるの故を以て、直ちに保羅及び約翰を拒否せんとするは寧ろ輕易に失す  
 るに非ざるやを疑ふもの也、抑も亦化身の思想は氏の云へる如く進化の理法に背けるもの  
 と云ふべきか、吾人の既に云へる如く、保羅は氏の云へる如く基督を以て天人の化身也と  
 なしたるに非ず、約翰と共に神子の化身也と信じたるものなるが故に、此點に關しては必  
 ずしも論ずるを要せず、然れ共假りに氏の云ふ處を以て眞也とするも保羅の思想は進化の  
 理法に背けるものに非ず、何となれば進化の理法は萬事を解し得べきものに非ず、此宇宙  
 には又退化の理法なるものも存在すべければ也、若し氏の云ふ如く、進化の理法は摸範的  
 人物の元始に存在するを許すと能はずんば、此の如き人物の史上に存在するをも許すと能  
 はざるべし、何となれば歴史は常に進歩して止まざるものなれば也、豈此の如き理あらん  
 や、氏は云ふ、神は遍在なるが故に化身の必要なしと、而して氏は之に附加して云く神の  
 遍在の思想一轉して凡神教と變ずるの杞憂を有せずと、何ぞ知らん、氏が此説は即ち純粹

なる凡神論なるを、吾人は素より古代の猶太人の如く超絶神論を信するものに非ず、然れ  
 共又神子の化身を以て無用也と信ずると能はず、氏は云く、ロゴスといふ一種の存在に由  
 らざるも直ちに神に親炙するを得べしと思ふが故に、ロゴス論を持ち出す必要を感せずと  
 氏は爰に至て矛盾せり、氏は自ら云はずや「予が宗教的意識は本來彼を信じて得たるので  
 あるが、其解釋も亦基督に由て確定するを得た」と、ロゴスに依らざるも直に神と親炙  
 し得べくんば、亦何ぞ基督を要せん、モーセにて可也、預言者にて可也、釋迦にて可也、  
 孔子にて可也、否此の如きものをも要せず、吾人は直に神と交り神と調和すべき也、而し  
 て是れ吾人の宗教的意識と實驗が實際に於て承認し得る處なるか、海老名氏が一方に於て  
 神は遍在す、故に我は神子の媒介を要せずと云ひ、而して他方に於て、我が宗教的意識は  
 本來彼を信じて得たるもの也といふを見れば氏の議論もあまりあてにならざるを知るべき  
 也、而して氏は最後に云く、若しロゴスの化身一時に止まらば、基督教の救拯も亦偶然的  
 のものにして永久的のものに非ずと、氏は基督にして若し今日迄生存し玉ひしならんには  
 其感化は一千九百年前を去り玉ひしよりも著しかりしなるべしと思惟するや、神子の化  
 身一時的なるが故に基督教の救拯も亦一時的也といふは、基督の在世は三十年間なりしが  
 故に、其感化も亦三十年間ならざる可らずといふが如し、背理も亦甚しといふべし。

吾人は前號に於て海老名氏が神子の化身を以て信じ難きとなし、不必要也となしたりしは不條理也との事を述べたり。然れ共讀者よ、誤解する勿れ。吾人は必ずしも「プラト」の流を汲んでロゴス存在論を主張するものに非ず。ロゴスの存在を假定せざるも吾人は今日世界と倫理に關する問題を解釋し得べし。唯吾人の忘るべからざるは當時ロゴスの思想は希臘思想と基督教とを聯結するに最も適當なる觀念なりしとの事は也。初代の基督教徒は基督に於て神を見たり、於是彼等は基督を以てロゴスと同一視し、所謂ロゴス化身論なるものを案出したたりし也。

假令ロゴスなるものは存在せずとするも、化身の思想は全く了解し難きものなるか、了解し難からずとするも化身は全く不必要なるべきか。海老名氏の意見は甚だ容易にして且双方共に否定的なり。然れ共吾人より是を見れば海老名氏が了解し難しとなし、不必要也とせざる理由は亦以て了解し得べく、又必要なる理由ともなし得べし。氏の所謂理由とは何ぞや、一言以て之を云へば神の遍在の思想是也、氏は更に進んで其意見を述べて云く、

神は人類の中に現存し給ふて人性の至聖至善なる所は即ち吾人が神と尊崇するものと類を同ふするものと考ふれば、眞人は即ち神像ではないか、本來の神は固より本来の別あるとも、性を同ふし體を同ふするに至ては即ち一である、基督の性格を以て人類の至善と觀すれば其神たるも亦自ら明瞭であらう、吾人はナザレの耶穌に於て神の衷情を見るを得たのである、神は天地萬有を以て吾人に語り給ふと雖も、彼は基督の人格に由て其衷情を示し給ふた、予は基督に由て直に神の衷情を仰ぎ見るとを得る、基督にある神が天地萬有の主たらば是に於て天地は始めて無限恩愛の光明を現はして来る、故に予は基督に由て直に神に接するを得るのである、約翰傳が基督をして父我に在り、我れは父に在り、父と我とは一也と言はしめ、又ニカヤ信條が神より出た神、光より出た光と論斷したが、予も亦基督に付て此の如く言ふの外言あらはずべき言葉を知らないのである、

氏の説に依れば人類は神の像を有し其性を均ふるものなれば、至聖至善の人あるは恠むに足らず、基督は最も完全に神を現はしたるものにして即ち人類の至善也といふに在り。若し果して氏の言ふが如く、人類は神の像を有し其性を均ふるもの也とせば、神と人類とは水と油の如く融和すべからざる性質を有するものに非ず、既に融和すべからざる性質を有せずとせば神人となると云へる思想は決して了解し難き事に非ず。吾人の考ふる所に由れば神の遍在の思想は化身の教理を理解し難からしむるものに非ず、却て理解し易からしむるもの也。若し氏の云へる如く、斯る化身は神が人眞似したる芝居に外ならずと云はば、神が人類歴史ありてより以來唯一度基督の人格に由てのみ完全に其衷情を示し玉ふたりと云ふも神が一種の芝居をなしたるに外ならずといはざる可らず。若し神子の化身は一時な

るが故に人と神との一致は偶然的のもの也と云はゞ、基督の如き人物は唯一度出て来りたるが故に人と神との一致は偶然的のもの也と云はざる可らず。吾人は素より神の遍在を信ず、而かも彼は唯基督に依りてのみ其衷情を示し玉ひたりとせば、基督を以て神子の化身也となすも何の不可なるとかあらん。海老名氏は云く、「予はロゴスといふ一種の存在に由ざるも直ちに神に親炙するを得るが故に化身の必要を認めず」と而して又云く、「予は基督に由て直に神に接するを得る也」と。基督に由て接すると、何物に由らざるも直ちに神に親炙するとは自ら相違あるに非ずや。若し氏にして基督に由らざるも神に接する能はずとせば、而して神は遍在し玉ふに拘はらず、唯基督に依てのみ其衷情を示し玉ひたりとせば、而して又基督に依てのみ其衷情を示し玉ひたるが故に基督は神子の化身也といふも不可なしとせば、神は遍在し玉ふが故に神子の化身は不必要也と論結するは寧ろ大早計には非ずや。然れ共海老名氏は吾人の既に屢々云へる如く、一種の思辨的想考を以て其議論を初めたり。此の想考は氏をして神子の化身を拒否せしめたり。吾人は今神子の化身は哲學上考へ得べきもの也や否やとのことを論ぜざるべし。唯吾人の立場と氏の立場との相違を明にすれば足れり。吾人は耶穌基督を歴史上の人物として學びたり、吾人は彼に於て神を見たり、吾人が歴史上の研究は神子化身の信念を生じたり、神子化身の教理ありて基督の

神性を認めたるに非ず、基督の神性を認めて爰に神子化身論なるもの起りたる也、而して吾人は萬有神の觀念の明白なるに従ひ益々化身論の了解し易きものなるを覺えたり。海老名氏は吾人と其論歩を倒にせるが如し。氏は先づ其萬有神の信念に由りて化身論の了解し難きとと又化身の無益なるを見たり、故に氏は基督の神性を認めたりと雖も之を以て單に人類の至善也となしたり。氏の基督觀が吾人と相違するに至りしもの素より偶然に非ず。海老名氏の基督は一大豫言者のみ、一大師表のみ。是れ果して吾人の宗教的意識を満足せしめ得べきか。抑も亦果して新約全書に示されたる基督を完全に了解したるものなるか。初代の教會が基督を以て唯に大預言者、大教師となしたりしのみならず、又之を歴史の主治者、萬物の創造者、神、主、救主となしたりしとの事は吾人の既に論じたる處にして、殊に新約全書が基督を以て其死に由りて人類の罪を贖ひたる救主也となしたりしは吾人の忘る可らざる處也とす。而して此事實はストラウスもバワイもハーナツクも共に疑はざりし處也。吾人は今試にハーナツクの云ふ處を聞くべし。彼れ云く、「若し宗教歴史に一事の確實なるものありとせば基督の死が凡ての犠牲を廢滅に歸せしめたりしとの事は也、而して犠牲の思想が深奥なる宗教的觀念に根せりとの事は此思想の多くの國民中に存在せるに依て明也。而して是れ冷淡盲目なる倫理說に由て論斷すべきに非ず、宜しく活潑々地の感情

に由て考察すべき也、若し果して犠牲の念は宗教的必要に出づるものにして、基督の死に由りて此要求を満足せしむるを得たりとせば、而して又吾人が希伯來書に見るか如く、「彼れ一の献物を以て潔まる者を永遠全成す」との明白なる證言ありとせば、吾人は基督の犠牲を以て奇異なる觀念也となすと能はざる也、彼の死は實に贖罪的犠牲の價值を有したりき、然らずんば之に依りて人心の要求を満足せしむると能はざりし也」と。海老名氏は或は云はん、是れ唯基督を宗として建立せる宗教信者の謬見のみ、基督が自ら傳へたる宗教は唯彼を以て一大師表となしたるのみと。然れ共基督が自己を以て其教訓の中心となし、彼の人格に對する吾人の信念は即ち吾人の神に對する關係を定むるもの也との事を教へたりしは、バイシラックも亦看過すると能はざりし事實也。且夫れ基督が「人の子の來るは多人の爲に（邦譯には「人に代りて」とあれ共「人の爲に」と譯する方原文の意を得たり）生命を與へ、其贖とならん爲也」と云ひ、又晩餐式を立つるに方り、杯を取りて弟子等に與へ、「是れ新約の我血にして罪を赦さんとて衆の人の爲に流す所のもの也」と云へるが如きは、假令 バイシラック の異説あるに拘はらず、基督の死が贖罪的價值を有するを明言せるものなるは明か也。此等の事實を看過して基督を以て單に一大師表となし、一大預言者となし更に其救主たるを認めざるが如きは、新約全書に顯はれたる基督を完全に了解したるもの

と云ふ可らず、亦此の如きは適當に吾人の宗教的意識を満足するものとも云ふ可らず、而して吾人の疑訝に堪えざるは海老名氏の基督に於ける信仰の内容は此の如くなるにも關せず、氏が口を極めて基督を稱賛し、「ニカヤ信條が神より出た神、光より出た光と論斷したが予も亦基督に付て此の如く言ふの外言ひあらはずべき言葉を知らないのである」と云ひし事なりとす。ニカヤ信條が基督を以て神より出た神、光より出た光也と云へると、海老名氏が基督を以て神となせると其意義に於て大なる相違あるは云ふまでもなし。然るに氏が此事實を知りて尙此言を假用したるは抑も何の意ぞや。其思想を最も明白に表示せんとするものは極めて疑似の言語を避けざる可らず。然るに海老名氏が斯る無意義の言辭を弄して其思想を漠然たらしめたるは吾人の深く氏の爲に惜む所也。

吾人は以上既に海老名氏の基督觀に關する吾人の卑見を述べ終れり。今は進んで氏が聖靈に關する意見を聞くべし。氏云く、

聖靈はキリスト魂である、基督昇天後は其門弟の間に一種の元氣が感發せられた、是即ち彼等の間の社會精神であつた、此元氣は彼等をして萬難を排して奮闘せしめた、唯外界に向て彼等を驅て奮闘せしめたばかりでなく、よく其内

情を制服して義の人とならしめたのである。彼等の情慾は此元氣に動かされ利を去て愛憐の情念を化した、獨り其同教同主義の人々を愛するに止らないで、仇敵をも愛する所の愛の人とならしめた。又此元氣は彼等の智識を開き、舊來の謬見を去て新識見を發せしむるに至つた。

而して氏は又更に基督と聖靈の關係を述べて云く、

基督は活ける史上の人格であつて、聖靈は基督教會の最も神聖なる元氣である、此聖靈は基督の人格より迸り出て流れて世界を變化する所の活水となつた。故に聖靈は基督魂と思はれる、何となれば此靈は基督の凡ての徳性を吾人に與ふるものであつて基督の聖業をして世界に完成せしむるものである、基督は昇天せられたるも其靈氣は益々大きくなつて世界を征服し神の國の建設を完成せんとして居る、

以上氏の云ふ所に從て之を見れば、聖靈とは基督の遺徳餘風の長く弟子の間に存して活動するものにして、宛も大和魂の我國民の中に活動し、武士氣質の長く我士風を支配せるが如き者たるに過ぎざるが如し。此點より之を論ずれば三千載の後尙支那國民の間に活動せる孔子の道德も、數千年間東亞諸國民を感化したる佛陀の精神も之を聖靈に比すべきのみならず、吉田松陰、西郷南洲の遺風尙多少我國今日の青年を感發するものありとせば、聖靈も亦此の如きもの也となさざる可らず。此の如きは果して新約聖書の所謂聖靈を適當に解釋したるものといふべきか。吾人は今聖靈のペルソナたるを論ぜざるべし。而かも氏の解釋は決して新約聖書を正當に了解したるものといふべからず、請ふ試に之を證せん。吾人は先づ保羅より始むべし。彼れ云く、「聖靈も亦我儕の荏弱を助く、我儕は祈るべき所

を知らざれば共聖靈自ら云ひ難きの慨歎を以て我儕の爲に祈りぬ」(羅馬人の廿六)と。試に保羅の所謂聖靈とは海老名氏の所謂基督の門弟間に感發せられたる元氣若しくは社會精神也とし、若しくは基督の遺徳餘風也とせば、我儕の爲に祈れりとの言は如何にして之を解釋すべきや。吾人或は吉田松陰、西郷南洲等の遺風を聞て起つことあるべし、而かも彼等の遺風吾人の爲に祈れりとは云ふと能はざるべし。保羅は又聖靈の神の靈たるを述べて云く、「神は其靈を以て之を我儕に顯はせり、靈は萬事を究知り又神の深き事をも究知る也、夫れ人の情は其中にある靈の外に誰れか之を知らんや、此の如く神の情は神の靈の外に知るものなし」(哥前二の十、十一)と。是れ少くとも聖靈と神との關係は人の心と人との關係と均しきもの也との事を明にせるものにして、海老名氏の云ふ如く、弟子等の間に感發せられたる一種の元氣をいふに非ざるや甚だ明也。夫の哥林多後書十三章の末節即ち「願くは主イエス、キリストの恩と神の愛と聖靈の交際衆と偕に在らん」と云へる言は古來三位一體的思想を表明せるものとなしたる處にして、兎にも角にも保羅が之に依て父、子、聖靈の三者を識別し、海老名氏の云へるが如く、聖靈を以て單に一種の元氣若しくは基督教徒の社會的精神となさざりしは明也。

更に約翰に就て之を云はんか、第四福音書の著者は左の如き言を基督の口に置けり、云く

「我れ父に求めん、父必らず別に慰むる者（原語の意味は慰むる者に非ず、仲保者若くは保惠師と譯するを佳とす）を爾曹に賜ひて究りなく爾曹と共に在らしむべし」（十四の十六）と。是れ聖靈を以て人類の間に活動せる神の代表者となせるものにして、單に元氣若しくは基督の遺風の謂に非ざると明なり。尤も約翰傳中には聖靈と昇天せる基督との合一を説くが如き言なきに非ずと雖も、是れ唯關係的の言辭にして絶對的合一を説けるには非ず。況や聖靈を以て門弟の間に感發せられたる元氣若しくは社會精神となすが如きは決して基督の思想にも約翰の思想にもあらざる也。吾人更に使徒行傳に就て初代使徒等の聖靈に對して有したりし觀念を驗すべし。吾人は屢々「聖靈に滿つ」「聖靈を受く」等の如き言語を發見すべし。是れ聖靈を以て一種の感化力となすに過ぎざるが如しと雖も、吾人は又之と共に「神己れに従ふものに賜ふ所の聖靈も亦證す」（五の卅二）、「主の靈ハリボを引き去る」（八の卅九）、「靈云ひけるは我が爲にバルナバとサウロを甄別ちて我が彼等に命ぜし所の事を行はしめよ」（十三の二）と云へる如き許多の言を發見すべし。而して是等の言語は海老名氏の所謂元氣若しくは社會精神を以て説明すべからず。寧ろ是れ初代使徒等の間に働ける神の動作を云へるものにして、聖靈とは即ち人心中に活動せる神なると明也。之を三福音書に就て見るも、海老名氏の元氣説は到底満足に基督の言を解釋するも能はざ

るべし。馬太傳廿八章十九節は海老名氏之を後世の附加物也となすが故に之を云はずとするも、夫の基督が「唯爾曹其時賜ふ所の言を云ふべし、蓋ものいふ者は爾曹に非ず、聖靈也」（馬可十三の十一）と云ひ、又「言を以て人の子に背く者は赦さるべし、去れと言を以て聖靈に背く者は今世に於ても來世に於ても赦さるべからず」（馬太十二の卅二）と云へるが如きは如何に之を説明せんとするか。

以上は即ち海老名氏の聖靈元氣説は新約聖書の聖靈を適當に了解したるものに非ずとの意を述べたるもの也。然れ共海老名氏は又聖靈を以て神の内在の證となし。又人心に於ける神の働たるを承認するもの、如し。即ち氏は云く、

予は此聖靈を以て基督社會に於ける神の内在を證明せんと欲する、予は此聖靈が我れの人格を造り、又基督教會の人格を造りつゝあるを知る、此靈の實在を實驗するに由りて始めて神の我れ及び基督教會の中に現存し玉ふことを認むるとを得るのである、故に予は此靈を以て神其物の活動なきざるを得ない、

海老名氏は既に聖靈を以て基督が其死後其弟子等の間に感發せしめたる元氣に過ぎずと云ひ、今又此に之を以て神の内住也といふ。氏の説に由れば基督は人類の至聖至善なるものにして神には非ず、吾人と彼との相違は完全不完全の相違にして、彼は畢竟吾人と其性情を均ふせる人類たるに過ぎず。去れば彼が人心に内住すると能はざるは明也。氏が聖靈を以て基督魂となせるは新約全書の教訓を正當に解説せるものに非ずとするも、其基督觀よ

り來れる自然の結果にして、氏が斯る斷案に達したるは毫も怪しむに足らず。然るに合や、氏は又聖靈を以て人心に於ける神の活動也となす。是れ宛も吉田松陰、西郷南洲の遺風に感發せられて起つものは神彼の心に活動し玉へる也と云へるの論法なるが。吾人不肯にして氏の思想の解し難きに苦しまずんばあらず。

12/35  
漢名氏の基督論  
及び諸家の批評文  
基督論集 終

明治三十五年四月十日印刷  
明治三十五年四月十日發行

(定價二十五錢)  
(郵稅四錢)

發行者 福永文之助  
東京市京橋區采女町二十四番地

印刷者 渡邊為藏  
東京市京橋區日吉町四番地

發行所 警醒社書店  
東京市京橋區采女町二十四番地

印刷所 民友社  
東京市京橋區日吉町四番地

賣捌所  
大坂 福音社。神戸 福音舎。西京 聖書房。東京神田 中庸堂。  
本郷 小杉。仙臺 紀港堂。函館 福音舎。札幌 富貴堂



# 警醒社書店發賣書

松村介石君著

○總合的基督教

定價 二十二錢  
郵稅 二錢

內村鑑三君著

○宗教座談

定價 三十錢  
郵稅 四錢

橫井時雄君著

○基督教新論

定價 二十五錢  
郵稅 二錢

○天啓教と聖書

定價 二十八錢  
郵稅 二錢

星野光多君編

○基督論評一班

定價 二十六錢  
郵稅 二錢

松尾春次郎君譯

○活る基督と四福音

定價 二十錢  
郵稅 二錢

片岡健吉氏外數氏

○實驗上の宗教

定價 三十五錢  
郵稅 三錢

ホルト博士著 村田素軒譯

○耶穌の教訓

定價 五十錢  
郵稅 八錢

植村正久君著

○信仰の友

定價 三十錢  
郵稅 三錢

○靈性の危機

定價 四十錢  
郵稅 四錢

○基督の姿

定價 四十五錢  
郵稅 六錢

ライネット氏著

○基督教會丁史

定價 一圓廿錢  
郵稅 二十錢

デビス博士著

○神學の大原理

定價 二十圓  
郵稅 二錢

フェイスクス氏著 鎌田氏譯

○有神新論

定價 二十二錢  
郵稅 二錢

ブレチル氏著

○自然及超自然

定價 六十錢  
郵稅 八錢

原野彦太郎君著

○基督眞論

定價 十五錢  
郵稅 二錢

發兌元

警醒社書店



82
438

